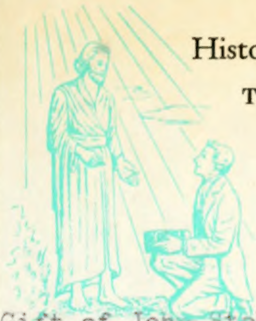


高橋五郎著

麼兒門教と
麼兒門教徒

附 亞米利加土人起原論

『上士聞レ道、勤而行レ之、中士聞レ道、若レ存若レ亡、下士聞レ道、大笑レ之、不レ笑不レ足二以爲一道、故建言有レ之、明道如レ昧、夷道若レ類、進道若レ退、上德若レ谷、大白若レ辱、建德若レ偸、質眞若レ渝、大方無レ隅、大音希レ聲、大象無レ形、』

序

世人多くは思らく、宗敎は古代の製産物たり、先知は昔時の存在物のみと、勿論或る意味に於ては此觀念は當を得たる者なれども、又或る特殊なる場合に於ては必ずしも然らず、要する處只非凡の人物の起ると否やとに在りとす、勿論非凡の人物とは必ずしも無上絶待の眞理を具足せる者たるに限らず、釋迦牟尼可なり、馬哈默杜（マホメット）可なり、只或る意味に於て非凡なれば足れり故を以て亞拉毘亞の聖人一たび起ちて『劍影の下に極樂あり』と叫ぶや、回々敎其勢滔々として恰も洪水の押來るが如く忽ちにして西部亞細亞、亞非利加及び南部歐羅巴を風靡し、其餘勢遠く支那にまで波及し、今や大に衰へたれども尚天下を三分して其一を保てり、之を要するに、宗敎の眞妄は深奥の研究に待たざる可らず、宗敎の存亡は之を長遠の歳月に問はざる可らず、

今麼兒門（モルモン）教の勃興したるも此類のみ、其眞妄は深奥の研究を待て決せざる可らず、而して若し眞ならば永く天下に存すべく、若し妄ならば遂に蹤を世界に絶たん、該教は既に已に迫害の坩堝（ルツボ）を通過し來りぬ、今よりは將に研究攻覈の坩堝に入らざる可らず、本書の如きは即ち該教を此第二の坩堝に紹介する者とす、敢て之が眞僞を證明したりとは言ず、若し何物をか證明し得たりとせば、幾分か是れジヨセフ、スミス、ブリガム、ヤング等が十九世紀に於る非凡の人傑――即ち英雄――たりしを證明し得たる者と謂ふべし、

カーライル曰く、其何種たるを論ぜず、古來億兆に師となりし者、萬人に安心立命の地を得せしめし者は眞摯を以て本色とすと、然り皆血涙を濺いで天下の爲に身命を致せる者ならざるは無し、然ればジヨセフ、スミスを以て一箇の瞞着家欺騙家となす輩の如きは單に是れ己れが斗筲の小人たることを證する者と謂ふべし、小は固より以て大を容る能はず、ミルト

ン曰く群雀は喧々囂々として靈鷲の天を衝くを怪み且嘲ると、眞に然り眞に然り、書して以て自ら戒む、

總論

本書第二章に掲げたる麼兒門信條を閲讀せば、該敎の大體は大約察知せらるべし、要するに麼兒門敎は基督敎の子孫なること、回々敎が同敎の子孫たる如し、但し本書第八章に引きたるビーチヤルの言葉に徵するも、該敎徒が自身に主張する所に依るも、麼兒門敎は基督敎の嫡流にして、回々敎（馬哈默敎）は基督敎の庶孽なり、換言せんにマホメットは基督敎を縱まに增減し改竄し變更したるに、スミスは却つて飽までも基督敎を正統に字面どほりに開發し敷衍し皇張せんことを務めたり、前者は確かに基督敎を改惡したり、後者は果して基督敎を改善したりや、是れ疑問に屬す、

麼兒門信條の第一に曰く、『我等は無始無終の天父なる神と其御子イエス、

「キリストと聖靈とを信ず』是れ純乎たる基督教なり其普通なる基督教會と異る所は只其解釋に存す、恰も佛教徒が阿彌陀を以て釋迦の如く元は凡夫なりと爲す如く、麼兒門教徒は說て云く、神(天帝)は元と人なりしが、其德其信其義圓滿して遂に今の如き上帝となりたる者なりと、他の基督教徒が大に反對を試るは此點に在る如し、然れども是れ聖書の說と神の性質とを飽までも文字どほりに解釋したる者に外ならず、先づ神は persona(ペルソナル)」なる者にて即ち person なりと基督教徒は一般に稱す、故に麼兒門教徒は主張して曰く、神は元と人にして亦人の如き喜怒愛憎等を有すと、彼等は聖書の中に出たる明文、例ば『神は怒りたまふ』、又『神は愛したまふ』『神は憎みたまふ』等の文字を以て之が證となさんとす、故に彼等は又他教徒が神を稱して無形 (immaterial)、沒情 (passionless)、沒部分 (without parts) 等と爲すを駁擊して曰く、若し果して然らんには神は空なる者ならざる可らず、一箇の全體なき者ならざる可らずと、更に說を進めて曰く、基督は天に昇り

て神となれりと稱するに、尙手足を弟子に示して宣はく、視よ、幽靈は此の如き肉身なしと、基督已に肉軀を以て天に在らば、上帝も亦然らん而已、基督は天に在て神の右に坐すと說けば、此天即ち是れコロブ Kolob（本書第四章に於ける第十九圖の處を見よ）なりと、又曰く斯の如く我等信徒も段々進步して遂に（死後にて）神となるべしと、其他浸禮を主張して赦罪の奠禮と爲すが如き、死者の爲に浸禮を設くるが如き、皆聖書の中に據處を有せざるは無し、例へば死者の爲にする浸禮につきては實に哥林多前書（第十五章二十九節）中に左の明文あるに非ずや、曰く『若し死者全く復生せずば死者の爲に浸禮を受て何の爲にかせん、彼等が死者の爲に浸禮を受るは何故ぞや』、

是の如く麼兒門敎の一切の敎義及例規は悉く基督敎の聖經に胚胎す、故に今茲に之を詳說するを要せず、只該敎徒間に行なはるゝ最有用の書若干を指示するを以て足れりとすべし、即ち麼兒門敎の敎義及び典禮につ

きては左の書籍を見るを要す『敎義及契約』(本書二十四五頁を見よ)『無價の眞珠』(仝上)、ロバルツ氏近著『天帝の新證者』、同氏著『ミソリ迫害史』及『ナウヴー興亡史』、パーレー、プラット著『神學秘鍵』、及仝『自叙傳』、某舊英國敎會員著『余が改宗理由書』等、——此中『神學秘鍵』は麼兒門敎の敎義神學 (Dogmatic Theology, Glaubenslehre) 若くは宗敎哲學 (Philosophy of Religion, Religions-philosophie) として潜心に研究するを必要とす、

次に敎會の組織に至りても亦其取れる所は悉く新舊兩約書に淵源す、上に管長の有するメルキゼデクの位より、十二使徒の班より、司祭、長老、執事等の職に至るまで凡てバイブルに基づけり、故に信條第六條には規定して曰く、『我等は古代敎會に存在したりし組織と同じき組織を以て正當なる者とす』と、先づ管長は二名の顧問を置きて管長廳 the Presidency を構成す、之をメルキゼデクの聖職と號す(本書第五章を見よ、創世記參看)其次に

は十二使徒12 Apostlesありて位ゐし、司祭、長老（エルダル）監督（ビシヨプ）、執事、七十人衆之に次ぐ、要するに是れ舊新兩約書中に見えたる聖職制を折衷して採用したる者と

論者往々管長及び聖職員の擅制壓抑を喋々す、然れども是れ決して正鵠を得たる者に非ず、請ふ本書第九章に說ける所特に夫の兄弟姉妹云々の一段を熟讀玩味せよ、スミスは教職員の或は壓制を行なはんことを慮りて豫め之を戒め之を制しおけること『教義及契約』中に見ゆる如し、同書第百二十一篇（スミスがミゾリ州のクレイ郡にて自由獄と名くる獄舎に在て一千八百三十九年三月二十日に吐露せる祈禱及豫言第三十三節より以下に出づ）を見よ、是僧權の濫用を戒めたる者に非ずして何ぞや、之を究むるに、麼兒門教の信妄は麼兒門經の信僞如何に由て決す、故に余輩は最も綿密に該の點を研究せんことを務めたり、麼兒門經若果して信ならば、麼兒門教の說く所は悉く金科玉條たらざる可らず、我輩は批評家として

其任務を盡せる而已、其敎理に至りては熱心充溢せる該敎徒の口をして之を說かしむるを最も善しとす、『靴屋は靴外に出る勿れ』、"No shoemaker beyond his last," *or*, "Let the cobbler stick to his last," "Ne sutor ultra crepidam (indicaret)"

明治卅五年八月

著　者　識

目次

第四章　誣妄又誣妄

第六章　自由鄉―奇蹟―選民

七倒八起―全く是れ靈鳳然

本文摺込圖畫目次

本書插畫目次

モルモン大教會堂　　タバナクル(所謂幕殿)　　石片會舘





前の二等顧問、第一管長の孫

メリル、テーラル、グラント、スミス、ライマン、テースデール、ウッドラフ、カウリ、



ランド、スミス、カノン、スノウ、リチャーヅ、ヤング

モルモン教前管長、顧問、及アポスル、

尚書中の記事を参看せよ、

日本派遣傳道部宣教師



エンサイン氏・ケルチ氏

日本傳道部長グラント師の女及孫娘



グラント師の母（本年八十一歳）

ユタ州婦人の標本

麼兒門教と麼兒門教徒

附 亞米利加土人起原論

高橋五郎著

第一章

天下の最大疑問

嘗て國會議場に宣誓を拒みて退場を命ぜられたるを以て其名一時天下に喧傳せし無神論者ブラッドラウ(Charles Bradlaugh)氏は、今や英國のインガッソル(Ingersoll)となりて、

徃々宗教退治の遠征に出かくるを見るが、其數年前(1897)英國の一市ブリストルに――『基督教は迫害する宗教なりや』と云ふ題を以て――喋々例の雄辯を弄し了るや、一青年突と立あがりて質問すらく、『基督教の始めて興るや、上には勇將猛卒の隊伍整々たる名に負ふ羅馬軍旅あり(レギオン)りて之を威壓し、下には頑迷剛愎なる異教徒の猜々獰々たるありて之に逼迫せしにも拘らず、兵力も無く金力も無くして、能く萬艱に打ち勝ちつ、遂に百戰百勝の勢を以て天下の最大宗教たる地位を占め、世界の最强信仰たる覇權を握るに至りぬ、是豈神力の隱然之を支持保維して

此意外なる好結果あらしめたまひし者に非ざらんや』と、ブラッドラウ答へて曰く、『基督教が昔に在て駸々たる發達をなせしは、モルモン教徒が今日に於て絶大の膨脹をなしつゝあるに比ぶれば毫も著るしとするに足らず、初時の基督教が迫害の面前に屹立して日に月に興隆せし事若し神護の證なりとせば、現代のモルモン教が激烈なる迫害の包圍中に在りて最も驚くべき大進歩をなしつゝあるも亦是れ天帝の擁護衛立と謂はざるを得じ』と、

此の演説及び問答中には少なくも二箇の尤も關心留意すべき者を含有す、其一は即ち是れ奇々怪々たる事實に

にして信仰自由の爲めに慄然寒心すべく、其二は即ち是れ天下の最大疑問として眞理探究の爲めに思想家宗教家の均しく首を傾くべき者とす、

抑も基督教は(其宜しく然るべきが如く)慈悲汎愛を標榜して天下に立てる宗教なれども、奈何せん人間の薄弱なる、其信徒の一たび劍を握れるや、嘗て熾んに其頭上に蒙むりたりし迫害を今度は自ら進んで往々他に加ふる事となりにき、昔しシエークスピーアルはハムレットをして長太息せしむらく、『嗚呼薄志弱行よ、汝の名こそは婦人(と稱すべき者)なれ』と、余輩は更に一歩を進めて曰んと欲す、

『嗚呼薄志弱行よ、汝の名こそ人間なれ』と、西洋第四世紀に於て羅馬皇帝大コンスタンチンが一片の布告を以て基督教を其國教と爲したる如き、第九世紀に於て佛蘭士國王シャルルマンニュ(カルル大王)が大擧して一齊に且端的にサクソン國民を基督教に轉從せしめたる如き、倶に幾分は政治上の理由より出で來りしなるべけれども、確かに後世の爲めに備を作りし者と謂はずんば有るべからず、但し千百年前は尚是れ幼稚の時代に非ざれば青年客氣の世界なりければ、姑く之を措くとせんも、老成を以て自ら居れる第十九世紀に於て、而も文明を大いに誇る所

の邦國に於て、殆んど無政府的なる暴擧兇行を縱(ほしい)まゝにし、以て其異端視する所の人々を窘迫し、暴民を使嗾して之が生命を絶ち、之が家屋を燒き、之が財産を奪ひ、果ては之を萬里の外なる曠野に驅り、遂に之を虎狼土人の巣窟たる山間に逐ひ、而して政府は之を措て問はず、法官は遁辭を設けて推諉(いひのが)れ、上下恬然として怪しまず訝らず、却つて公然太白を擧げて互に相祝賀するに至りては、其害毒豈只足尾鑛毒の類のみならんや、實に言語道斷の野蠻行爲と謂はざるを得んや、吾人は眞理の爲め公義の爲め人權の爲め自由の爲めに切齒憤慨せざる能はざる也、吁嗟

固、陋なる、狂信、の弊、黨同、伐異、の害、も、亦是れ、甚だし、き者、なる、哉、！

詳細の歷史は之を後章に讓り、茲には單に其一斑を擧げんに、ジョセフ、スミスが一千八百二十三年を以て始めて天啓を得たりと公言せるや、恰も人心多宗の紛爭に倦みゐたる際とて、宗教心の鬱勃たる篤志家は競ふて之に來り就きたれば、忽ちにして合衆國ミヅリ州なるジャクソン郡中には宗教界に一新生面を開き來りぬ、然のみならず該教徒の常として勤勉と節儉とを體して働らきたれば、其團體の繁榮日に月に愈よ著しかりき、然るに最大多

數なる舊來の基督教徒は之を視るや、頻りに疑惧の念を熾んにし、一千八百三十三年よりして之れが襲撃を開き迫害を始め、遂に一千八百三十八九年に於てや、ヘロドに疋をかけ(Out-Heroding)、ファラウ(Pharao)に輪をつけたる如き殘忍暴虐を以て、該教徒を悉くミヅリ州中より驅逐し了りたり、而して其止む無くイリノイ州に退去して、千艱萬難の後、奮然としてミヅリ河の東岸に一大都會を建設するや、僅か一年有半の日月を過すか過さざる中に早くも又復例の迫害は始まりつ、百方辛酸を嘗めて後ジョセフ、スミスは、其腹心の徒と偕に曳かれてカーセージ府

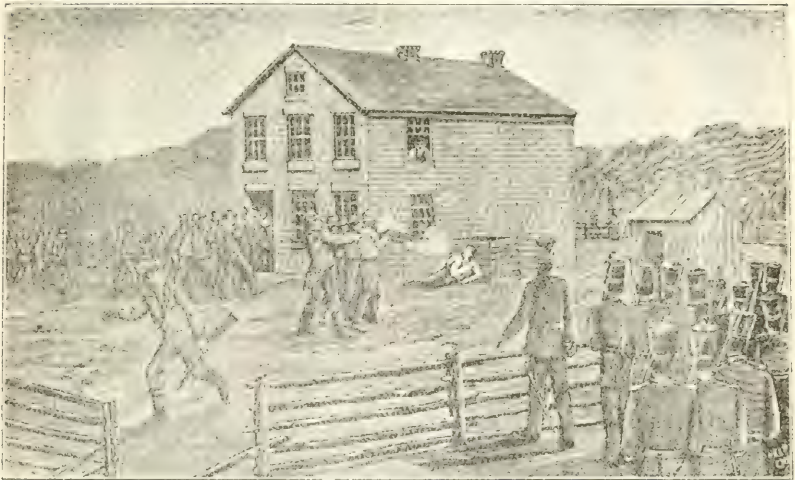
に至るや、遂にイリノイ州兵より成れる暴徒の兇丸に斃れ了りぬ、而して此文明開化(?)の光明裏に於ける百鬼晝行の張本或は渠魁はミヅリ、イリノイ兩州の知事其人にてありき、嗚呼斯の如くにても尚是れ文明界の法治國(legal state, Rechtsstaat)なる乎、四海兄弟を口にする基督教徒なる乎、

然りと雖も寔に殉教者の血は教會の種子なりけり、The blood of her martyrs is the seed of the church.

(註)第二三世紀の交に鳴りたる祖師テルタリアノス(Tertullianus)に當時に於ける羅馬政府及び異教徒の迫害を評して曰く、汝等愈よ多く

第一圖

ジョセフ、スミス州兵暴徒の爲に銃殺せらるゝ圖



（圖解）此家屋はカーセージ市の獄舍にして、ジョセフ、スミスがテーロル、ハイラム、及リチヤルドの三人と偕に此中に拘禁せられたる處へ除隊兵より成れる暴徒顏を黑く塗りて亂入し來り、警備兵と介して內外より發銃し以て遂にスミスとハイラムの二人を殺害す、非術に半ば還りて死したるはスミスが樓上より墮ちて玆に至れる者、又二階の窓より覗きたるはリチヤルドなり、尙下の章中に於る歷見門署史を參看せよ、

我等を苅倒せば、我等愈ょ多く成長繁殖す、殉敎者の血は敎會の種子なり、Plures efficimur quoties metimur a vobis; semen [Ecclesiae] est sanguis martyrium (The more we grow the more we are mowed down by you: the blood of martyrs is the seed of the Church).

其之を窘る愈ょ大いなれば該敎徒の熱心愈ょ熾んに、其之を壓する愈ょ嚴しければ該敎徒の信仰愈ょ堅く、皆擧つて我道の爲めに辱かしめらるゝを榮とし、我神の爲めに死するを樂とし、日に月に信徒の數を增し、年とともに敎會の隆盛を來せり、嗚呼是れ迷信の俗耳に入り易きが爲めにして然るか、抑(あるひ)は又眞理の之をして然らしむる者

あるか、
兎まれ角まれジヨセフ、スミスの蒙むれる醜名は漸々に消え來り、モルモンズてふ綽號は段々に光榮ある稱呼と成りゆきぬ、而して今やユタは獨立なる州(sovereign state)として聯邦の一に算せられ、モルモン教徒に向ひては合衆國中同情を表する名士實に夥だし、

(註) モルモンズMormonsと云ふ名は勿論該教徒の經典『モルモン經』より出たる者にはあれども、是れ彼等が教徒として戴くを欲するの名には非ず、寧ろ是れ他の基督教徒が汚名として之に冠したる者とす、故に彼等に向ひて『汝等モルモン教徒』と言ふは之を輕蔑するに當

る者と知るべし、彼等は自ら初より末世聖徒 Latter-day Saints と號し、其敎會は末世聖徒の基督敎會 The Church of Jesus Christ of Latter-day Saints と稱せらる、之をモルモン敎 Mormonism と呼ぶも實は輕蔑の臭味ある者とす、勿論末世又は後世とは上代又は曩日聖徒 Former-day Saints 即ち昔日の基督敎徒と對比して名けたる者とす、尙次の章々に述る所を參看せよ、

モルモン敎外の政治家、裁判官、實業家、新聞雜誌記者等が一千八百七十年來モルモン敎徒の權理信仰道德風紀文明等に關して吐露し筆述したる所の者を纂輯せる小册子少なからず、中に就て The Fruits of "Mormonism" by Non "Mormon" Witnesses（麼兒門敎の結實――麼兒門敎外

見證者評論彙纂の如きを最も詳密にして而も輕便なる者とす、

之を要するに、モルモン經を以てスポールヂングてふ一牧師の著はせし未刊小說の剽竊に成れりし者と爲せる最大最强の利器は今や既に鈍刀と化し去りたれば(四章に詳說する所を見よ)、ジヨセフ、スミスの所謂天啓は之に準じて愈よ其勢力を强うし來り、モルモン經の起源は更に幾層不可思議なる迷霧中に其解釋を覓めつゝある也、

エマルソン曰く、『殉道者は必ず榮せらる、The martyr cannot be dishonoured. 有らゆる鞭撻は悉く是れ名聲を喧傳するの口なり、有らゆる牢獄は悉く是れ光榮赫々たる宮殿

樓閣なり、凡そ焚かれたる書若くは家は天下を照らす炬燗なり、都て抹されたる或は削られたる文字は却て世界に響きわたる者とす、正氣に立かへる日子思慮を生ずる時節は、其箇人に臨む如く、必ず又社會にも來るべし、然る時には眞理煥然として玆に光を放ち、殉道者遂に其當を得たりし者なるを認識せらるゝに至る』と、嗚呼果して是なるや、非耶、豈天下の最大疑問にあらずや、

想ふに、極寒は物を燒くことゝ極熱と同じ、極端と極端とは相合す、大智は大愚の如く、大慾は無慾に似たり、眞理と不眞理と其相距ること千萬里にして而も又同時に分寸、其

問。殆ん。ど。髮。を。容。れ。ざ。ら。ん。と。す、モ。ル。モ。ン。教。が。天。下。の。最。大。疑。問。た。る。は。眞。に。此。に。在。り。て。存。す。と。謂。ふ。べ。し。



第二章

麼兒門教とは何ぞや

附 教祖ジョセフ、スミスの畧傳

麼兒門教とは何ぞや、否な是れ正名に非ず、末日聖徒の基督教會とは何ぞや（第一章の註を見よ）、此問題に臨みてや吾人が第一番に示さるゝ者は該教の信條（信仰箇條）なり、モルモン教會の信條（或は信經）は大凡左の如し、

『第一條　我等は無始無終の天父なる神と其御子イエス、キリストと聖靈とを信ず、

第二條　我等は信ず人々は自己の罪の爲めに罰せら

るべし、アダムの愆の爲めに罰せらるゝに非ず、

第三條　我等は信ず萬人は福音の律法と訓誡とを守らば キリスト の代贖に由りて救はれ得べし、

第四條　我等は信ず福音の原則と式法は次の如し、曰く、第一は主 イエス、キリスト を信ずる事、第二は悔改、第三は罪を赦すための浸禮、第四は聖靈を與ふるための按手禮、

第五條　我等は信ず人は、福音を宣べ且其式法を執行せんには、預言と在權者の按手とに由りて、神に召されずんば有るべからず、

第六條　我等は古代の敎會に存在したりし組織と同じき組織を以て正當なる者とし、即ち使徒(アポスル)、預言者(プロフェット)、牧師(パストル)、敎師(テーチャル)、福音師(エバンヂエリスト)の存置を主張す、

第七條　我等は方言(外語)を語るの力、預言、天啓、異象、病を愈(いや)すの力、方言を解くの力等の實在を信ず、

第八條　我等は聖書(バイブル)を其正しく翻譯せられたる限りは神語なりと信ず、又モルモン經をも神語なりと信ず、

第九條　我等は神の凡て既に啓示し給ひし所の者、及び凡て今啓示し給ふ所の者を信ず、又神は此後も

尙神の御國に關する衆多の重大なる件々を啓示し給ふべしと信ず、

第十條　我等は信ずイスラエル人は眞に天下諸國より集合すべく、十支派は舊に復すべし、ザイオン(シオン)は本大陸(亞米利加)に建設せらるべく、キリストは遂に親ら地上に君臨すべく、地は更新して其樂園の光榮を恢復すべし、

第十一條　我等は其良心の命ずる所に循ひて萬能なる神を禮拜するの特權あることを主張す、又萬人にも之と同じき特權を許し、如何樣にまれ、何處に

まれ、其善とする儘に禮拜をなさしむ、

第十二條　我等は帝王、大統領、治者及び有司に服從し、且國法を遵奉し尊敬し支持するの正當なるを信ず、

第十三條　我等は正直、信實、貞潔、慈善、厚德なるべく、萬人に善を行ふべきを信ず、寔に我等はパウルの訓誨に則ると謂ふを得べし、曰く我等は凡ての事を信じ、凡ての事を望む也、我等は既に衆多の事を忍べり、又凡ての事を忍び得んことを望む、若し德高き者、愛すべき者、令聞ある者若くは稱讚すべき者

あらば、我等は乃ち之を尋ね求む、

ジョセフ、スミス述』

是れ該教徒の信條なり、是れ純乎たる基督教なり、否な純乎たる初代の基督教なり、而して之に加ふるに襟度の濶き容忍主義寛容主義を以てしたる者とす、此の信條に就て一々顯微鏡的に分析檢審し來るに、吾人は遺憾ながらも(?)未だ彼等が惡魔の徒たる形跡を發見する能はず、失望何物か之に譬へんや、

勿論神學上よりして看たらば、幾多の基督教會中には之に異議を挿さまんとする者も有るべし、例へば第二條に

於けるが如く、原罪(アダムの犯罪と其影響)を信ずる人々は之に反對を唱へん、又原罪を信ぜざる宗徒は雙手を擧げて之を歡迎せん、

又第四條に於ても、浸禮宗徒は其主張せらるゝ浸禮に賛成を表せんも、他の宗派にては或は之に冷評を加へん、否な、第一條に於てもモルモン教徒は聖靈を讀んで字の如く一箇の靈魂と見做したれば、三位一體說を主張する所謂正統教派は斯の二位一體說を辨駁せんとするならん、但第十一、十二、十三條に至りては眞に文明の宗教たるに愧ざる信條として何人も故障の言はるべき者なからん

而已、

勿論此信條は是れ只麼兒門教の大綱を約說せる者にして、是のみにては未だ該教が他宗と大いに異なる所以を明らかにするに足らじ、抑もモルモン教に經典として尙ぶ所の者は一にして足らず、麼兒門經(The Book of Mormon)、『教義及契約』(The Doctrine and Covenants)、『無價の寶珠』(Pearl of Great Price)を始として、パーレー、プラット(Parley Pratt)が『警戒の聲』(Voice of Warning)、『神學秘鍵』の如き、及び一夫多妻に關しては結婚哲學(Philosophy of Marriage, or A Plea for Polygamy, by a Non-Mormon Writer)、『基督教の聖書と一夫多妻』

(The Bible and Polygamy, by Prof. Orson Pratt) の如き、皆參考に供すべき者とす、

然し乍ら一言を以て之を蔽へば、麼兒門教は基督教の聖經を(其正確なるだけは)極めて字面通りに解釋し、且之に若干の新天啓を加へ、百尺の竿頭更に幾歩を進めつ、以て舊來の基督教上に一新生面を開かんとする者なり、

但し誰が此の如き大膽なる事業を企圖せしや、何人が十九世紀の文明界に斯る絶大の計畫を立てしや、曰く、此人こそ是れジョセフ、スミス(Joseph Smith)と稱するクワイ男兒なりけれ、余輩は故らにクワイの假名を用ふ、如何とな

れば賛成者は之に當つるに『快』の字を以てせんとし、反對家は之を塡るに『怪』の字を以てせんとすれば也、疑問の燒點は實に玆に存す、

偉人豪傑の往々然るが如く、ジョセフ、スミスの幼時は初めより濃霧中に隱れて世に顯はれず、百方揣摩臆測を逞ましうする者多けれども、畢竟皆アポクリファ(緯書)のみ、經書には非ず、要するにスミスも亦幼時は天使にも非ず、惡鬼にも非らず、只人間なりし而已、誰がキリストの幼時を詳かにする者あらんや、然るも尙キリストは基督敎の開祖たるを失なはず、ジョセフ、スミスも亦焉んぞ然らざ

らんや、

但しスミス自身の語れる所、及び當時の人々が少しく認め得たる所に依て之が畧傳を記るさんに、ジヨセフ、スミスは一千八百五年十二月二十三日を以て亞米利加合衆國新英蘭ベルモント(Vermont)州なるウヰンヅル(Windsor)郡のシヤロン(Sharon)町に生る、兄弟七人姉妹三人ありて、スミスは實に第四番目に當れり、其父を同くジヨセフ、スミスと曰ひ、母をルーシと曰ひ、共に素性賤しからぬ者なりしが、其信用せし友人の爲めに賣られて財産を失ひ了り、一時は非常に貧しく成りぬ、殊に子女の多かりし事とて、夏

は農耕に勞し。冬ば學校を敎へたりしも、成功甚だ少なかりしかば、數度居を轉じ處を替へ、遂に一千八百十五年、即ちスミスが十歳の時に於て、全く靑山地方(Green Mountain state, or Vermont)を去り、ニウヨルク州のオンタリヲ(Ontario)郡(今のウェーン郡 Wayne County)なるパルミラ(Palmyra)町に遠く移りしが、是ぞジヨセフ、スミスが一新宗敎を開くの端緒なりける、

パルミラはオンタリヲ湖を距る十二哩南に横たはれる一小邑なりしが、玆にスミスは父を助けて開墾に從事し、居ること大凡そ四年にして、闔家更に一二哩南なる同郡

のマンチエスタル町(Manchester)に移りぬ、當時オンタリオ湖邊の地方(即ちニウヨルク州の西部)は百事新開地の觀を呈しをり、オハイオ州とイリノイス州とは尙渺茫たる曠野の趣を有し、ミゾリ州以西は實際未だ探險を經ざる荒服の土人國にてありき、既に斯の如くマンチエスタル地方は割合に住民淳朴なりしかば、宗教心も亦殊に深かりしは自然の勢なるが、恰もスミス家が該地に移りたる翌年、非常なる信仰復興(リバイバル)茲に始まりて、人々殆んど狂せるが如く、熱心なる禮拜は各處に開かれ、讚美歌の響は耳を聾せんとし、說敎の聲は四六時中些しの

間斷も無かりき、然のみならず、メソヂスト宗徒、長老宗徒、浸禮宗徒互に起ちて、各々我劣らじと振ひたりしかば、其結果として此等三派の間に激烈なる宗論を惹き起し來り、其喧囂紛爭は呶々嗷々として底止する所なからんとせり、

スミス家の人々は元來敬虔なる者なりしかば、此際に處して各々其去就を定めんとせしが、母のルーシを始めとしてハイラム、サムエル等多くの者は長老宗(Presbyterianism)を賛成して之が信者と成りぬ、然るにスミスは尚僅か十五六歲許の少年の事とて、多少向背に惑ひてありしにも

拘はらず、大體は既にメソヂスト派に傾きゐたれば、今此有様を見るや心中甚だ安らかならざりしと見ゆ、是に於て平彼が眞理を看出して之に就かばやとの念慮は彌よ其熱度を高め往きたり、思へらく此等互に相軋轢しをる幾多の宗派は孰れも皆悉く眞正なる者には非らじ、必らず其中に眞なる者假なる者あらんと、益々聖書を研究せしに、一日大いに我心を刺戟する文章に見當りぬ、是れ即ち新約聖書中なる雅各書第一章五節にして、其語は實に左の如し、曰く「汝等の中若し智慧足らざる者あらば、夫の咎ること無く惜むこと無くして衆人に與ふる神に求

めよ、然らば予へられん」、
此等の文字は深くスミスの心に貫徹せり、スミスは再三再四熟讀玩味の後、遂に之に從ひて靈智を眞神に祈らんと決心せり、時は一千八百二十年の早春、空は晴わたりて、風爽かに、萬象玲瓏として美を輝かす朝夙に、我が家の周圍をめぐれる蓊鬱たる森林の中に只獨り忍び入りつ、端然跪坐して始めて爰にスミスは聲を揚て天に禱れり、
嗚呼讀者諸君よ、此時にスミスの靈眼は開けたり、此時にスミスの精神は定まれり、此時にスミスの去就は決せり、一言を以て之を蔽へば、此時にスミスの天職は決定した

る也、
諸君は此の大變化を何と名けんと欲するや、ジヨセフ、スミス其者は之を天啓と呼べり、反對論者は之を譎詐と稱す、スミスは尚一少年のみ、無邪氣の一少年のみ、嗚呼彼果して是時既に世人の迷信に乘じて天下を瞞着せんとの野心を起せしや、是最も道理上信じ難き所とす、之に反して無邪氣の心には往々神智靈慧の來り宿るを見る、吾人か如何にスミスを瞞着家欺騙家と言んと欲すとも恐らく茲にては未だ然か言ひ得ざるべし、但しスミスの所謂天啓神牘とは如何なる者なりしか、請ふスミス自身をして

之を語らしめよ、――

我跪いて吾が心の願望を神に捧げ始めしが、其未だ之を爲しをへざるに、忽ち我は或る冥力の捕ふる所となりて痛く壓倒せられたれば、餘りに駭ろけるにや舌結びて物言ふ能はずなれり、四面暗黑となりて咫尺を辨ぜず、アハヤ吾が一命茲に終らんかと一時は思はれたり、然し乍ら滿身の力を出して援助を神に願はりつゝも、今は是までと絶望の裏(うち)に鬼力の我を殺すに委せんとせしに、恰も此大驚慌の一刹那を以て、我は不可思議にも一柱の光が煌々として日の光輝にも倍して吾が

頭上に耀やけるを見たり、而て其光は段々降り來て遂に吾が上に達せしが、其顯はるゝや否や、忽ち斯の身は彼の敵鬼の繋縛を脱したるを覺えぬ、夫の光の吾が上に止まれるや、我は二箇の人物が――其榮光筆紙に描き得ざる有樣にて――空中に屹然として吾が頭上の處に立てるに接せしに、其一人は吾が名を呼びつ、他を我に指ざして曰はく、是れ吾が愛子なり、之に聽けよと、今我が主に問ひたてまつらんとせし目的は、諸宗の中にて孰れが最も正確なりや、果して其孰れに聯なるべきやを求まはらんとするにありしかば、我は氣力を回

復して物言ひ得るや否や、敢て此事を問まゐらせしに、彼等兩人物は答て曰く、汝は其何れの宗派にも就くべからず、其信條は皆是れ我が眼中に厭惡物なるのみならず、其之を信奉する人々は悉く腐敗し、唇を以て我に近づけども、其心は我に遠ざかり、人間の誡命を教義として誨ふる而已、其物たる神爲の形はあれども、彼等は之に神力あることを信ぜずと、

我は再び何れの宗派にも聯ならざらんことを命ぜられ、且其外にも今茲に書く能はざる幾多の事を告げられしが、頓て復已れに歸り見れば、我が身は仰向になり

て天を瞻仰しをりぬ、

是れジョセフ、スミスが宗教改新の大事業を企てたる第一原由にてありき、而して此話は只今公刊せられ始まれるルーシ、スミス(ジョセフの母)の遺稿『ジョセフ、スミス傳』中にも亦同じく記載せられたる所にして、一片の捏造説とは固より日を同じうして語る能はざる所なり、

(註)ジョセフ、スミスの母をルーシ Lucy と名くることは上に説けるが如し、此ルーシ(一千七百七十六年七月八日生れ一千八百五十五年五月七日死す)自らジョセフ、スミス傳を口授して其の歿後に遺せしを或る家に傳へて今日に至りしが、昨年の十一月よりしてモルモン教の機關雜誌インプルーヴメント、イー

ラ (Improvement Era) 紙上に掲載し始めしを見る、亦是れスミス家の詳傳として面白き者なるべし、

但しジョセフ、スミスが蒙りたりと稱する此天啓是果して信ずべき者なる乎、是れ單に主觀的現象なりしか、抑(あるひ)はまた是れ眞に客觀的なる者なりしか、昔し聖保羅(パウロ)は基督教徒を迫害してダマスコ府に近くや、忽然として靈光眩ゆく其身邊を照らし、基督自ら現はれて諭したまはく、我は汝が迫害しつゝある基督なり、汝蕀鞭を蹴るは難しと、是に於てか保羅は飜然悔悟して、熱心なる迫害者たるより變じて、更に幾層熱心なる傳福音者となり、異邦人の使

徒となり、基督教神學の鼻祖となりぬ、其結果は燦然として聖書中に又宗教界に見るべし、然るも尙論者往々夫の異象が單に保羅の心眼に映ぜる主觀的現象なることを主張す、況んやスミスの場合に於てをや、世人の之を疑ふも強ち無理なりとはせず、要する所は彼が爾後の云爲果して其所說の眞なるを證明するや否やと考ふべき而已、

（註）ジョセフ、スミスは上にも說ける如く、已にメソヂスト派に傾むきをれる位なりければ、該宗中に知已を有せしや論を俟たず、故を以て斯の天啓を得るや、去つて之をメソヂスト宗の某教師に告げたるに、意外にも其敎師は憮然として其所說を蔑如し、斷言して曰く、

天啓默示の時代は既に過ぎ去れり、今日は最早斯の如き物あることと無し、汝が見たる異象は皆悉く是れ惡魔の所爲のみと、是時よりして彼はスミスの大仇敵と化せりと云ふ、

案ずるに、麼見門教と諸他の基督教的宗派との一大逕庭は巳に此に胚胎す後者は皆既に天啓默示の今日に絕て無きことを主張するに引かへて、前者は天啓默示の時々垂賜せらるべき者なることを斷言す、天啓默示若しも果して常て幾千年が間續き起りたりとせば、其今日に跡を絕つべしと云ふ理由は全く何處に存するや、若し今日毫も斯の如き事無からんには、其往古に存せしと稱するも或は世人の疑惑を惹かん歟、

是より以下スミスが傳記は即ち該教會の歴史なり、該教會の歴史は即ちスミスの傳記なり、故に特に傳記としては之を說かじ、

アリユト師い雄採



ユタ女子の小標本

第三章

麼兒門經と考古博言學

麼兒門教徒は麼兒門經 The Book of Mormon と稱する經典を有するが故に他より然かモルモン教徒と呼び倣さる、實に該經は末日聖徒の基督教會にとりて重要なる者とす、(第十二三頁の註を見よ、)

然らばモルモン經は如何にして獲られたりしや、又何が故に之をモルモン經(モルモンの記)と名くるや、

問ふて玆に至るや該教の天啓教たる所以――否な开が天啓教なりと自ら稱する所以――判然として顯はれ來

る、此の天啓たるや亦是れ信ずる者には家の隅石となるべく、建徳の基礎となるべく、信ぜざる者には徒らに躓く礙石となるべく、迫害の刄を磨く砥石となるべき者か、ジヨセフ、スミスが初めて異象(Vision)を觀てより早や三年半の月日はたちぬ、ジヨセフも亦人なりき、其間には必ず少年若くは青年に在りがちなる如き若干の過失は之れ有りたらん、然れども又敬虔の天性を有することとて悔恨は往々胸裏に滿ちたりしならん、果して彼は罪を悔て赦宥を天帝に願ひ、併せて更に又啓牖を垂れ給んことを吾神に祈りたてまつりぬ、實に是れ一千八百二十三年

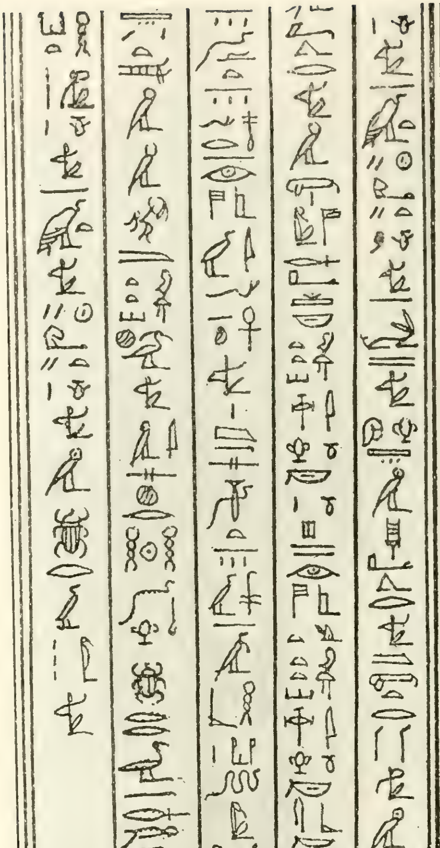
九月廿一日の晩にてありき、

禱り始むるや復も神使の威容は赫奕として其室内を照らし、金鈴を鳴らすが如き淸らかなる、朗らかなる聲を以て皓衣の天使(?)は一大秘寶を露はし來れり、其示現の大體を約め來れば大凡そ左の如し、

「ジョセフ、スミスよ、汝が罪は赦されたり、心を安んぜよ、我は天帝の御前より遣はされ來りし使モロナイ(Moroni)と云ふ者なり、此を去る僅か二哩半許の處に於ける靈山——ニーファイ族(Nephites)の所謂クモラ(Cumorah)、ジヤレド族(Jaredites)の所謂ラマ(Ramah)——に一箇の石

龕ありて、其中には改亙埃及字を以て亞米利加上代の宗教史を鐫れる金版あり、汝往て之を拔き見よ、其中に

第二圖

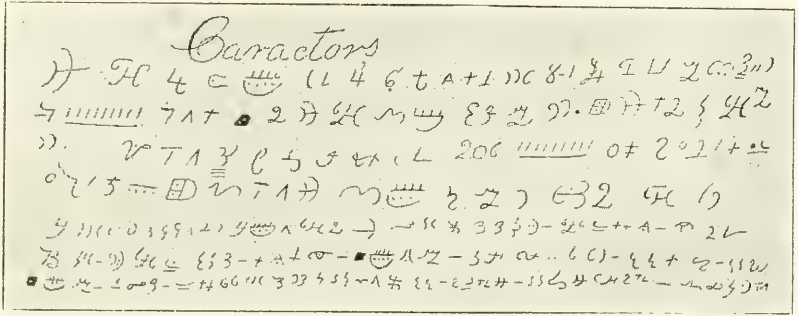


埃及古代象形神字　葬祭文中の一節

は又基督が斯國なる上代の民に傳へたまひし圓滿の

福音を載す、之を飜譯して以て天下を指導教化せよ』と、

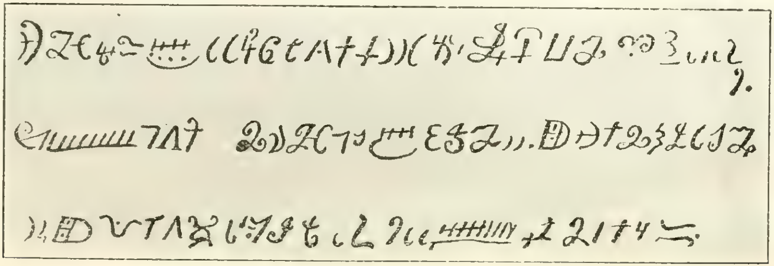
第三圖 (1)



摩兒門經の書かれたる所謂改良埃及文字

ジヨセフ、スミスの手寫に係る者

第四圖 (2)



所謂改良埃及文字

摩兒門教攻撃者ラムがユタにて寫し來しと稱る者

斯の如く諭すこと三たびにして遂に天使は去れり、ジョセフ、スミスは先づ其事を父に語り、後ち自ら齋戒沐浴して ニウヨルク州なる夫のクモラ山に到り見しに、果して其の西腹に峯に近く巨石の顯れたる者あるを認め、之を コヂアクルヤ營裏に光輝燦爛たる幾百の金版(gold plates)堆積してありき、又是と偕に夫のウリム、トンミムと稱する靈鏡並に胸牌も藏めてありき、

天使モロナイ更に語を繼で曰く、是れ基督降誕後四百年の頃ほひ我が尙ほ此地に生きをりて埋めたる者なりと、

但し神使はスミスが直ちに之を取り出すを允さず、命じ

て曰く、今より四年が間今月今日を以て一歳に一回必ず此山に來り觀よ、四年の後汝果して其器たらば之を取出せよと、此際モロナイは新舊兩約書中より種々の預言を引きて諄々と語りぬ、先づ§馬拉基(マラキ)書第三章の一部分及び同書の第四章を引證し、次には†以賽亞(イザヤ)書の第十一章、‡使徒行傳第三章二十二三節に論及し、‖約耳(ヨエル)書の第二章及び其他の經句をも傍徵せり、

※(註)ウリム、トンミム Urim and Thummim とは昔し猶太國の祭司長が胸牌 (the breast-plate, choshen) の上に施こして神託又は天禱を求め得るの具となしたる者に係り、其意味に於ては天啓の眞理、圓滿の妙法

を表する者とす、即ちウリムは光明と云ふ文字の複數にして、衆光を集めたる眞理、即ち天啓を謂ひ、トンミムは完全と云ふ文字の複數にして、乃ち圓滿の妙理を、表彰す、而して此等二語相合して不可思議なる靈鏡を謂ひ顯はせりと見ゆ、今スミスは古代の祭司が用ひたりし胸牌と併せて此靈鏡を獲、之を以て彼の絶妙絶奇なる金版の妙經を、解讀したりと稱す、尙次章(第三章)の下に說かん所を熟讀せよ、胸牌は寶玉を四行に嵌めて美麗に造りし者なること舊約書中出埃及記第二十八章に見ゆ、又ウリム、トンミムに至りては利未記第八章八節、民數紀畧第二十七章二十一節等を參觀せよ、

§(註)馬拉基書第四章は左の如し、——

『萬軍のヱホバいひ給ふ、視よ爐のごとくに燒くの日來らん、すべて驕傲者と惡をおこなふ者は藁のごとくにならん、其來らんとする日彼等を燒つくして根も枝ものこらざらしめん、二されど我名をおそるゝ汝らには義の日いでゝ昇らん、其翼には醫やす能をそなへん、汝らは牢よりいでし犢の如く躍らん三又なんぢらは惡人を踐つけん、即ちわが設くる日にかれらは汝らの脚の掌の下にありて灰のごとくならん、萬軍のヱホバこれを言ふ四なんぢら吾が僕モーセの律法をおぼえよ、すなはち我がホレブにてイスラエル全體のために彼に命ぜし法度と誡命をおぼゆべし、五視よヱホバの大なる畏るべき日の來るまへにわれ預言者エリヤを汝らにつかはさん、

かれ父の心にその子女を慈はせ、子女の心にその父をおもはしめん、是は我が來りて詛をもて地を撃ことなからんためなり、』
又第三章の一部分とは多分最後の十七八節を謂ふ者なるべし、果して然らば、左の如し、曰く、
『[十七]萬軍のヱホバいひたまふ、我わが設くる日にかれらをもて我寶となすべし、また人の己につかふる子をあはれむがごとく我彼等をあはれまん、[十八]その時汝らは更にまた義き者と惡き者と神に服事る者と事へざる者との區別をしらん、』
右に引けるは英譯聖書と同じき文なるが、ジヨセフ、スミスの聽かされたりし者は多少これと異なる所なきに非ず、例へば第一節に

於ては『藁のごとくにならん』を『藁の如く焚けん』と讀み、『其來らんとする日』を『其來らんとする者等』と讀めるが如し、又第五節なる『われ預言エリヤを汝等に遣はさん』をば『我預言者エリヤの手に由て教職を汝等に示さん』と改め、而して最後の節をば實に左の如く變したり、曰く、『彼は父等に立てたる約束を子等が心の裏に樹つけん、子等の心は其父に歸せん、若し然らずば、全地は全く彼が來ます時に悉く滅し了らん而已』、

按ずるにモルモン教にては基督教の新舊兩約書を最も忠實に最も字面どほりに信受すれども(第四章の下に說かん所を見よ)、又同時に往々舊約書中に後人の誤寫または錯謬あることを主張す、是

れ第四章に於て余輩の愼重に論ぜんと欲する所なるが、其獨立眼の端倪は既に已に此時に認められたること奇なりけれ、嗚呼彼れ僅々十六七歳の少年早く已に天下無數の大神學者輩を壓倒せんとする卓然たる氣概を有せしや、是れ殆んど信ずべからず、昔しベーコンは十四五歳にして已に當時の哲學界に革命を來さんとする意志ありと稱するも、識者往々之を疑がふ、是等の事多くは後人の附托に出づれば也、然れどもスミスは此獨立の見解を手記して之を後人に遺したれば、吾人之を疑がふに幾んど餘地なからんとす、恰も是れ大蛇が寸にして能く氣を吐くが如き者、倶に直覺作用と謂はん而已、亦是れ名將が一目にして勝敗の數を悟了するに似たる者歟、天啓

の實を猜がふ人々も此の事實は認めざらんとするも蓋し能はじ、

†(註)舊約書中なる最大預言書―預言書中の王―以賽亞書の第十一章は左の如し、

『一エッサイの株より一つの芽いで、その根より一つの枝はえて實をむすばん、二その上にエホバの靈とゞまらん、これ智慧聰明の靈、謀略才能の靈、知識の靈エホバをおそるゝの靈なり、三かれはエホバを畏るゝをもて歡樂とし、また目みるところによりて審判をなさず、耳きくところによりて斷定をなさず、四正義をもて貧しき者をさばき、公平をもて國のうちの卑しき者のために斷定をなし、その口の杖をもて國をうち、その口唇の氣息をもて惡人をころすべし、五正義はその腰の帶となり、忠信はその身の帶とならん、六おほかみは小羊とゝもにやどり、豹は小山羊とゝもに臥し犢をじゝ肥たる家畜とともに居てちひさ

き童子にみちびかれ、七牝牛と熊とはくひものを共にし、熊の子と牛の子とゝもに臥し、獅
はうしのごとく藁をくらひ、八乳兒は毒蛇のほらにたはふれ、乳ばなれの兒は手をまむし
の穴にいれん、九斯てわが聖山のいづこにても害ふことなく傷ることなからん、そは水の
海をおほへるごとくヱホバを知るの知識地にみつべければなり、十その日ヱツサイの根
たちてもろ〱の民の旗となり、もろ〱の邦人はこれに服ひきたり、榮光はそのとゞま
る所に耀きてあらん、十一その日主はまたふたゝび手をのべてその民のゝこれる僅かの
ものをアッスリヤ エジプト、パテロス エテオピア エラム シナル ハマテおよび海のしま
〲より贖ひたまふべし、十二ヱホバは國々の爲に旗をたてゝイスラエルの逐やられたる
者をあつめ地の四極よりユダの散失たるものを集へたまはん、十三またエフライムの猜
はうせユダを惱ますものは斷れエフライムはユダをそねまずユダはエフライムを惱ま
すことなかるべし、十四かれらは西なるペリシテ人の境にとびゆき相共にひがしの子輩

をかすめ、その手をエドムおよびモアブにのべ、アンモンの子孫をおのれに服はしめん、
十九エホバエジプトの海叉をからし河のうへに手をふりて熱風をふかせ、その河をうち
て七の小流となし履をはきて渉らしめたまはん、十六斯てその民ののこれる僅かのものゝ
爲にアッスリヤより來るべき一つの大路あり昔しイスラエルがエジプトの地よりい
でし時のごとくなるべし、』

是即ち宗教道徳の圓滿境を預言せる者にて、世人多くは基督教を以て之に擬す、而も此理想境には未だ達せざる遠し、ジョセフ、スミスは乃ち宗論黨爭の紛々擾々たる混沌界に一新生面を開き、以て基督敎の刷新を計り、聖經中の幽渺を張皇せんと期す、是れ彼が此以賽亞(イザヤ)の預言の圓成を以て自ら任ずる所以なりとす、

‡（註）使徒行傳三章二十二三節は是なり、――
『モーセ我儕の先祖たちに告て曰けるは、主なる爾曹の神は爾曹の兄弟の中より我に似たる一人の預言者を起さん、其爾曹に告る凡の言を聽べし、凡て此預言者に聽從はざる者は民の中より取滅さる、』

¶（註）約耳（ヨエル）書第二章に曰く、『汝等シオンにて喇叭を吹け、我が聖山にて音高く之を吹鳴らせ、國の民みな慄ひわなゝかん、そはヱホバの日來らんとすれば也、すでに近づけり、…………………………
二一 地よ懼るゝ勿れ喜び樂しめ、ヱホバ大なる事を行なひたまふな
り、二二 野の獸よ懼るゝ勿れ、あれ野の牧草はもえいで、樹は果を結び、無

花果樹葡萄樹はその力をめざすなり、シオンの子等よ汝らの神エホバによりて樂め喜べ、エホバは秋の雨を程よくなんぢらに賜ひ、また前のごとく秋の雨と春の雨とを汝らの上に降せ給ふ、二四打場には穀物盈ち、甕にはあたらしき酒と油溢れん、二五我が汝らに遣はしゝ大軍すなはち群ゐる蝗なめつくす蝗喫ほろぼす蝗噬くらふ蝗の蝕あらせる年を我汝らに賠のはん、二六汝らは食ひ、食ひて飽き、よのつねならずなんぢらを待ひたまひし汝らの神エホバの名をほめ頌へん、我民はとこしへに辱しめらるゝことなかるべし、』

嗚呼是れジヨセフ、スミスが望前的先知先見の預言なりし乎、夫かのユタ山嶽裏に理想の別天地を開拓せしブリガム、ヤング時代の末日

聖徒(應見門敎徒)ならば或は聖書の此文を眼前に現實したらんも、尙ニウヨルク州の舊天地内に平和を樂みをれるスミスにして既に此言を爲したりとせば、誰か其慧眼の靈妙なるを驚歎せざらんや、信徒は即ち之を視て以てスミスが天師たり、先知たり、預言者たるの明驗となす、豈又偶然ならんや、

但しジヨセフ、スミスは、上にも言ひし如く、直ちに此等の金版及び靈鏡を取り來りしに非ず、四年の試期の滿るまでは常の如く農事に勤勞したりしが、農產物時に或は不良の天候に害せられて一家の生計困難を告げしかば、尙十九歲の少年ながらも一千八百二十五年に於ては、去つ

てジョサイア、ストール(Josiah Stoal)と云ふ人の家に傭はるゝ事となりぬ、彼の人はペンシルヴェニア州サスクエハナ郡なるハーモニ(Harmony)地方に於ける舊銀山(昔しイスパニア人が發見せし者と稱する)を再び發見せんと欲したれば、其傭人をして頻りに處々を掘らしめたりき、當時鑛山師は鑛山棒(Mining rod)と號する一種の吸鐵棒を用ひて屢々金銀銅鐵の所在を發見せんと試みたり、其法は先づ例の棒を立てゝ其何れの方向に倒るゝやを檢し、其の倒れたる方に開掘を試むるに在りき、想ふに夫の阿蘭陀人ストールもまた此法を用ひたりしならん、多分

是よりして、ジョセフ、スミスは、其自叙傳中に自ら書るせし如く、掘錢家(money-digger)と譏られ、其父と偕に幻想家(visionary men)と罵られたり、但し此の如き事は、一歩を讓りて實際之れ有りたりとすとも、何ぞ一少年の性行を傷つくるに足らんや、只是れ其頃の流行なりしならん、要するにストールの鑛山發見の企は水泡に歸し了りぬ、但し玆に一つスミスの將來に便する事件は出來せり、スミスはストールの手に雇はれをる間アイザク、ヘール(Hale)と云ふ中産家の許に寄宿して在りしが、同家の女子エンマとて淑德高き婦人は、彼が遂に池中の物に非るを認めた

るにや、其兩親の悅ばざるにも拘はらず、遂にスミスと公然相婚するに至り、スミスは新婦と相携へつゝ、ハーモニを去つて、元のマンチエスタルに其貧乏なる父母の許に歸り來れり、是實に一千八百二十七年にして、此後一ヶ月を經るや、スミスは二十一回の誕生日を祝せり、一千八百二十七年九月二十二日に於て全四年の俟候期滿ければ、此度は例のクモラ山に出ゆきて、首尾よく金版を掘出し、ウリム、トンミムを授かり來りぬ、然るにスミス自身は資金なく又文字なき者なりしかば、――殊に其金版を奪はんと狙ふ輩多くして往々暴行に遭ひたれば、妻

女の里へ赴きて心靜かに働き且之を譯せんものと思ひ定めき、然し乍らマンチエスタルよりハーモニーまでは一百五十哩の路程なれば、旅費なくては叶ふまじ、時に幸ひなるかな家道甚だ裕かなる農人マーテン、ハリス(Martin Harris)と名くる者現はれ來りて、スミスに五十弗を與へやりぬ、スミスは之を以てペンシルヴエニアに達するを得たり、途中にて二回まで警吏に改められたりしかども、豆桶の中に深く匿しおきたれば金版を奪はれずして止みぬとぞ、

ペンシルヴエニアなる妻の里にてスミスは徐々と翻譯

に着手せり、例のハリスは筆と金とを以てマンチエスタルより來り助けたり、オリヴア、カウドリ(Oliver Cowdery)と云ふ青年はスミスが父母の家より遙々と加勢に馳せつけぬ、遂にはデビド、ホウヰトモールと云ふ人千里を遠しとせずして尋ね來りつ、スミスをニウヨルク州のセネカ郡フアエット(Fayette)へ案内し、其父の家にて之に厚く保護を加へ、其弟ジヨンも偕に翻譯に手傳へながら、傍ら道を聞きて喜こべり、是に於て此三人は天に祈りて後、神の允准を得て該金版を示さるゝを得たりと云ふ、故に該翻譯書即はちモルモン經には卷端に先づ此等三人の證言を

載す、後また更に七名の見證者を出し、之が證言も同じく卷頭に右の三名が證言に次で掲げらる、曰く我等七人は該金版を目に睹、手に觸れ、其確實なる者なるを認む、天帝證をなしたまふ、我等は決して僞らずと、而して此等證人中には後或は墮落し或は脫會したる者ありしかども、未だ嘗て一人として其證言の虛僞なりしを明言せし者あらざりし也、中には其證言を取消すべく拷問にかけられたる者もありつれど、竟に其事なくて今日に至りぬ、是亦豈甚だ奇ならずや、天下豈何物か之れより容易なる者あらんや、彼等の愚直(?)もまた甚だしと謂ふべし、是只麼兒

門教徒をして彼等が證言の確實なるを揚言するの辭柄を得せしむる者のみ、嗚呼彼等果して之を見たりしや、唯天之を知る而已、

但し其金版及び純金の胸牌は今何處に在るや、彼等は言ふ、ジョセフ、スミス之を夫のクモラ山裏に返藏したれば、天定の時至るまでは復た世に現はれじと、然かりスミスの敵人は一は好奇のため、一は貪婪のため、クモラ山を掘穿ちて石龕を毀ちたりしも、竟に之を發見する能はざりき、該金版若し果してモルモン教徒の言ふが如く、天使モロナイの之を守れる者なりしならんには、其が敵人に發

見せられざるこそ寧ろ當然なる事なりけれ、併し乍ら是ほど重要極まれる材料にして復世人に見えずなりしとは、啻に疑惑を生ずる而已ならず、又遺憾千萬と謂はざる可らず、但し退いて考がれば、此の如きは是れ寧ろ宗敎の特色とや謂つべけん、天下誰か阿難手書の阿含經を看し者あらんや、佛典中の醍醐味たる最勝至完の華嚴經が宣說せられたりと稱する七處九會は勿論此世界の中に限らず、試みに之を畧說せんに、先づ七處とは何そや、曰く人間に三あり、即ち印度摩伽陀國なる菩提樹下の道場、普光明法堂、及び祇樹給孤獨園(鹿園)の三處是なり、

天。上。に。四。あ。り。曰く忉利天、曰く夜摩天、曰く兜率陀天、曰く他化自在天、俱に須彌山上に位ゐす、釋加佛又は大日如來此等七處に九會して甚深妙法を說けりと云ふ、然らば九會とは何如ん、清涼灌大師の作頌を借て之を言はんに、

初會、菩提場　二會、普光殿　三會、忉利天
四會、夜摩天　五會、兜率天　六會、他化天
七八、重テ普光　九會、給孤獨

此の如く七箇處に九度開演せる者なり、多少處異の論はあれども、先づ之を以て通說とす、然るに此中摩伽陀國に於ける三處を除きては皆天上の事にして空居に屬す、否

な此三處中に在てすらも普光堂と稱する重閣講堂なる者は空實相混ず、其說に曰く、此堂去二菩提樹一東南二三里許、在二尼連禪河曲內一、諸龍爲レ佛所レ作、如來於レ中放二相輪光一、遍照二十方無邊世界一、是故名レ此爲二普光堂一、果して然らば畢竟二處に約まりをはる者とす、

否な啻に是れのみならず、元來此經本は龍樹菩薩が龍宮より獲て來れる者なりと稱す、況んや龍樹菩薩が龍宮に於て見たりと云ふ經典には三本ありて、其中なる上本には十三千大千世界微塵數の頌、四天下微塵數の品(章)ありと相傳するに於てをや、之を信ずるには絕大の信根を要

す、然りと雖も尙此華嚴經は一乘の至妙經たるを之が爲めに失なはず、幵が信爲道元功德母長養一切諸善法、斷除疑網出愛流と宣說せる如きは、眞に是れ千古の確論と謂ふべけん(賢首品上)、

否、眞言宗の起源に至りては、尙更に是に近き者あり、傳へ云ふ、弘法大師尙空海と稱せる時佛前に誓て曰く、從來の佛典は我が心に疑ありて決せず、只願くは三世十方の諸佛我に正法を示したまへと、而して暫く眠るや尊げなる僧枕頭に立ちて告げたまはく、茲に大經卷あり、大毗盧遮那神變加持と名く、是れ眞箇の大秘密經なりと、遂に大和

國高市郡久米寺の塔下よりして此經を堀り出せりと、更に溯りて之を稽ふるに、眞言宗の秘經たる大日經等は、其初佛滅後六七百年の交、龍猛菩薩南天竺に行きて、芥子七粒を加持し以て鐵塔の扉を打破り、金剛薩埵に遇ひて授かり來りし者なり、而て該宗にては釋迦の代りに大日如來(毗盧遮那)を以て教主と爲す、是れ豈ジヨセフ、スミスが天使モロナイに導びかれて金版の古典を發堀したると其揆を一にする者に非ずや、然るに一は佛教中の至深至邃なる理智冥合の密教秘典と尊信せられ、一は基督教中の杜撰孟浪なる異端邪説と排斥せらる、其幸不幸相距る

何んぞ遠きや、其遇不遇相異る奚ぞ大いなるや、其讃毀の
霄壤なる嗟人類も亦先入の兒僻見の女なる哉、
余輩はモルモン教の起原を以て華嚴宗眞言宗の興本に
比較したり、請ふ更にスミスを日蓮に比較して此章を終
へん、
熟ら按ずるにジョセフ、スミスが一千八百二三十年に起
りて、敢然餘宗の無眞理を唱破したるは、正に是れ日蓮法
師が建長五年三月廿八日朝日に向ひて始めて南無妙法
蓮華經と唱へ、頓て大膽にも雲霞の如き十一宗徒が面前
に毅然として、念佛無間、禪天魔、眞言亡國、律國賊と例の四

箇格言を吐露し、法華獨り最勝として諸宗の無得道を叫破したると均しく、氣焔萬丈東西處を異にし古今時を削つと雖も、其精神氣概妙に符節を合すと謂ふべし、瓦となつて完たからんよりは玉と爲つて碎けよ、ジョセフ、スミスも亦偉丈夫なる哉、只日蓮の如く獨斷宗に陷らずんば幸とす、

第三章

麼兒門經と亞米利加太古史

考古學と博言學

麼兒門(モルモン)教徒は基督教の聖書(舊新兩約書)を基礎として、其上に宏壯輪煥たる大伽藍を建築したる者なり、基督教徒(Christians)とは自ら稱せず、是れ深意の存する所なり、語を換へて之を言へば、彼等は其新宗教を以て基督教を擴張する者と爲し、之れが從來の教義を改良する者と爲すなり、但し麼兒門教徒は何を以て其憑依率由する所の經

典と爲すや、曰く、其最大重要なる者は則ち摩兒門經(The Book of Mormon)なること蓋し萬人の齊しく認むる所ならん、

然らば其摩兒門經とは何ぞや、

摩兒門經とは其性質基督敎の聖經に等しくして、卽ち歷史と預言と鑑戒とを兼ね併せたる者とす、而して其中に於る最も大膽なる部分は幵が歷史に關する所に在りと謂はざる可らず、如何となれば其歷史は是れ直ちに亞米利加の太古史及び古代史なるが故なり、

曰く太古に於て、人類の言語混淆して復話の相通ぜずな

民と相合して北亞米利加の大半を占有せしが、是と同時にラマン人民は遂に南米に遍く繁衍するに至りぬ、但し此ラマン人民(Lamanites)は分離して一國民を成せる後、其精神の墮落したる結果にや間も無く天罰として其の皮膚を黑くせられ、漸々と其知識を失ひ、稍獰猛なる者と化し、遂に今日の亞米利加土人(所謂銅色人)と成り了りき、之に反してネーファイト人民(Nephites)は神寵に浴する善民なりければ、夥多の名君賢臣預言者殉教者等を出し、基督の降世は夙に期して待たれ、基督教的なる教會は組織せられ、基督教的なる道德は宣傳せられ、基督教的

なる奠禮は施行せられ、機既に圓熟して、一に基督の降臨を待つ者の如くなりき、

果せる哉、基督は猶太國に於ける釘死復活昇天の後、未だ幾くもあらざるに忽然として亞米利加に、其人民の中に出現し、四十日間茲に留まりて天國の嘉音を傳へ、幾多の奇蹟を行ひ、十二使徒を任立し、教徒の信仰を堅振したまへり「モルモン經中なるニーファイ書を見よ」

是に於てか無數の教會は蔚然として南北兩洲に興り、ラマン人民もニーファイ人民も共に均しく其教澤に浴し、絕て久しく干戈の閃くを視ず、長く茲に金鼓の音を聽か

ず、庶民其堵に安んじて、鼓腹擊壤の樂極りなかりき、然りと雖も內憂外患兩つながら無き者は動もすれば腐敗し易し、大凡二百年間の太平は彼等洲民の中に驕奢淫佚の習を馴致し、薄信不虔の徒は滔々相率ゐて基督敎を排棄し、墮落汚行踵を接して至り、茲にラマン人民の本色は再び滔天の勢を以て顯はれ來りぬ、之が爲に篤信醇俗なるニーファイ人民はラマン人の手より攻擊せらるゝこと頻にして、一日も枕を高うして眠る能はず、弓矢の飛かふ、劍戟の相擊つ、殆ど寧處なかりしが、今は惡魔の時なりければにや、天意の遠く深く謀慮する所あるにや、敬虔

なるニーファイト人民の運命は岌々として實に纍卵の危ありき、
斯の如くして多く年所を經、幾たびか星霜を重ねしが、遂に基督紀元三百八十四年に及びてや、吁嗟哀しい哉、ニーファイト人民はラマン人民の大擧して來り襲ふに遇ひ、幾多の苦戰の後、唯一人を遺して餘は悉く殄滅せらるゝに至りぬ、即ち虜民たるニーファイト人民は斯く全滅し、亞米利加の大洲は擧つてラマン人民の押領する所となり、信仰は地を拂ひ、蠻風は洲中に蔓延し、其結果として今日の如き蒙昧未開の銅色土人を米國に見ることには成

れり、換言すれば則ち今の亞米利加土人は是れ彼のラマン人民の子孫たる也、(モルモン經中なるモルモン書と稱する者を見よ)

ニーファイ人民全滅の際ニーファイ軍の總大將たりし人はモルモン(Mormon)と名る者にして、其慧眼遠慮なるや夙に我が人民の全滅せんことを先見し、其神聖貴重なる文書記錄の或は兵火に罹らんとを恐れ、或は守護者なくして湮滅せんことを憂へ、此種の典籍の後世に傳ふべき者を悉く蒐集し、更に又之を要畧し撮約して、其子モロナイ(Moroni)に授け、モロナイ又之を補足し、之を金版に縮書し、

以てニウ、ヨルク(新約克)州パルミラ郡に程近きクモラ(Cumora)山中に之が全部を埋めおきぬ、是即ち此ジヨセフ、スミスが獲たりし麼兒門經なりし也、モロナイ特に復活し來りて之をスミスに授けたる者とす、

以上はモルモン經中に特筆大書せられたる事實なり、世人は之を讀んで如何なる感をなすや、恐らくは荒誕不經となして之を排斥せんとするならん、

按ずるに、世には人種論ほど六ケ敷きはなし、就中亞米利加人種を以て最も所屬の不分明なる者と爲す、亞米利加土人の由來を揣摩臆測する實に區々なりと雖も、其中最

も古くして又最も廣く行なはれたるは、之を以て猶太國の所謂沒跡支派（Lost tribes）と爲すの說なりとす、昔しパレスタインに十二支派と稱する兄弟國ありて、其總稱をイスラエル人（Israelites）又は猶太人（Jews）と號す、然るに中頃一たび諸支派蹉跌失墜して外邦に擄去せらるゝや、忽然として其支派の大半は跡を沒して復世に顯はれず成りぬ、之を沒跡支派と名く、故に非論理とは言はゞ言へ、從來亞米利加土人の出處に迷へる人々は、往々之を以て沒跡支派に擬して曰く、彼に幾支派の忽然として跡を沒せる有り、此に幾千萬人の突如として邦を成せるあり、是

即ち此等兩者が同一人種なる明驗なりと、斯の如き循環論は、其れ自身に於ては固より三文の價値も無しと雖も、更に又之に加ふるに處々方々より出で來れる種々樣々なる事實と顯跡とを以てするに及んでは、此種の臆說も强ち荒誕不稽とは妄斷すべからざるに似たり、

按ずるに、猶太人と亞米利加土人と密接の關係あることを始めて唱へ出せしは、即ち新世界發見の當時墨色哥國へ或は戰爭に或は布敎に赴けるイスパニア人其者にてありき、此說の由て來る遠く久しきや是に由て知るべし、墨色哥征服の英雄冒險家コルテス（Cortes）一千五百二十

四五年僅々一握の兵を擧げて幾百萬の慓悍なる墨色哥人中に猛進するや、到る處前なく、敵兵の潰走する恰かも朽を摧くが如くなりき、是よりして無數のイスパニア人、許多の僧侶神父續々該國に入りこみけるが、皆开が宗教上に於る風俗習慣の甚だしく猶太的基督教的なるに驚ろきぬとぞ、

三百五十年前よりして段々に此等西僧輩が或は土人の譯解に基き或は現存の文書に憑りて譯述し又は筆記したる所の史傳文詩實に夥だしく在り、——潔癖者流は何とでも言はゞ言へ、——亞米利加土人の古代を吾人に示

すには極めて貴重なる寶典にして、其功や寔に獨逸民族の古史を傳へたるタシタス(Tacitus)の『日耳曼國俗一斑』(Germania)に百倍すと謂ふべし、

先づ彼等イスパニアの學者輩は其常に口にするノアの洪水談がメキシコの畫文に委しく寫し出されあるに駭ろけり、*洪水滔々として天に漲ぎれる中に二人の男女一舟を或る山の下に泛べて居り、一羽の鳩さへも描き添られてある、是れ墨色哥(メキシコ)の畫文なり、其隣邦に至れば即ち更に又之に加ふるに種々の獸畜鳥禽を以てし、剩さへ一小禽が喙に綠芽を啣みつ、其放ち出されたる避難船に還り

來れる圖すら添はりたりとは、暗合の妙茲に至りて極まれりと謂ふべし〔聖書創世記第六章八節より八章二十二節までを參看せよ〕

＊(註)洪水を避けたるメキシコのノアは其名をコスコス(Coxcox)と云ひ、其隣邦ミチユアカン(Michuacan)のノアはテスピ(Tezpi)と云ふ、又其舟が遂に止まりし山はコルアカン(Colhuacan)と名く、是即ち聖書のアララト山なり、最後に、例の綠芽を啣み來りし小禽は蜂雀、即ちハンミング、ボルドと稱する亞米利加の小鳥なり、之をメキシコ語にてはウヰツヰリン(Huitzilin)と云ふ、此鳥は該國にては著しき者にして、彼等が最も尊信せし軍神も此鳥の名に取りてウヰツヰ

ロポッチリ Huitzilopotchli（蜂雀左）と稱す、

又彼等はバベルの塔（The Tower of Babel）に彷彿たる者を有せり、メキシコ府の南、プエブロ府の近傍に位ゐす、其高さ一百八十尺、傳へ云ふ、大洪水の後巨人再び洪水の難に罹らざらん爲めに之を築きて雲にまで達せしめんと圖りしが、神明之を嘉みせず、天より火をくだして之を燒き、彼等をして復之に從事することを能はざらしめ給へり、（創世記第十一章四五節を見よ、）

此塔もまた創世記の中に於ける塔と同じく磚瓦を以て之れを包めり、只バベルのは火に燒き、チヨルラのは日に

第五圖



墨色哥邊の高塔

乾かせし區別ある而已、否な、是の如き塔若しくは封丘はメキシコの南、ユカタン地方にも又多し、而して、其形は挿圖の如くにして、エジプトの金字塔とは少しく其趣を異にす、多くは天を禮拜するに用ひしと思はる、

アステク人(Aztecs)及びト

ルテク人(Toltecs)、即ちメキシコ人及びユカタン人はまた一種の洗禮或は灌頂を有し、小兒命名式の時などに之を行なへり、其時に頟ぶ神はショアコアトル(Cioacoatl)と云ふ女神にして、是また聖書のエバに相當する大母元后にてある而已ならず、常に蛇を其の傍に描かれをり、又產の劬勞を此世に來せし者と信ぜらる、然り、其ショワコワトルてふ名は即ち「蛇婦」の義なりとす(創世記第三章を見よ)否な、一園に唯一株の樹(生命樹)立ちて其まはりに人面の蛇からみつける圖さへも有りしと稱す、

又玆に一箇の不可思議なる聖人乘救主なる者あり、白晳

にして長鬚あり、東洋より來りて農工稼穡の道を民に教へ幾多の教會を設立し、告解及び懺悔の奠禮を定め、アナワク(墨色哥等)に黄金時代を作り出して之に主宰たりしが、後ち諸他の神祇と相善からず成りしかば、再來を民に約して獨り蛇皮船に棹さしつゝ、飄然として太西洋に泛び去りぬ、墨色哥人がケツアルコアトルと其兒孫の再現を待つは恰も猶太人

第六圖



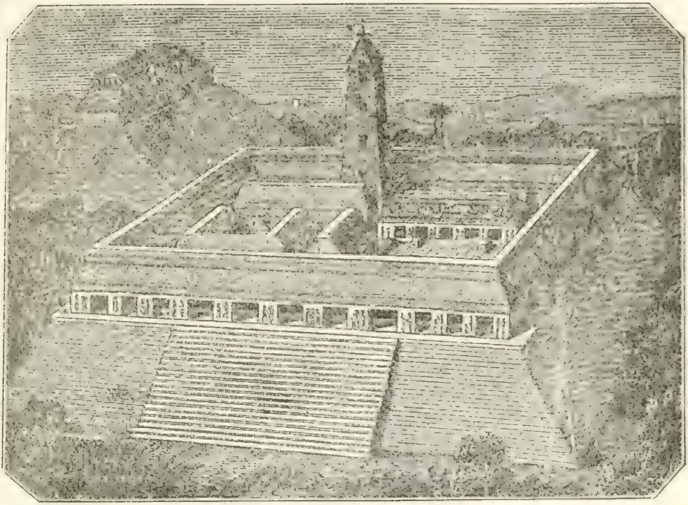
ケツアルコアトルの肖像

民がメッシア(基督)の降誕を待つと一般なりき、實にケッアルコアトルは或る意味に於ては墨色哥のメッシアたりし也、實にチョルラの塔も彼が禮拜に供せし者と稱す、請ふ、汗が白皙長鬚なるに注意せよ、是決してイスパニア人が發見したりし現在の土人にあらず、此に揭げたる第六圖は古代の墨色哥人がケッアルコアトルを描きたる者に係る、如何に立派なる風采を有する者ぞよ、之を以て現今の土人に比するに實に天淵の相違あるを見ん、上に說けりし如く、ジョセフ、スミスが發見したりし摩兒門經中には明記して曰く、基督紀元前六百年の頃、即ちユダの

王ゼデキヤの治世の初に方りて一隊のイスラエル人ヱルサレムを去り、印度洋を渡り、太平洋を經て、遂に南亞米利加の西岸に到着せりと、今此を以て彼のケツアルコアトルの外來に考へ合はするに、兩者の相似たる酷だしき者あるを見ん、況んや麼兒門經には今の土人が神罰として其祖先の白膚を失なひたりしことを說き、又其遂に悔改して白皙化せんことを說くに於てをや、ケツアルコアトルの再來談正に之と符合す、實にメキシコ人は白皙なるイスパニア人の始めて來れるを見るやケツアルコアトルの再來には非じかと疑ひたりと云ふ、

但し彼等イスラエル人(猶太人)は文明社會を該地に建設したりと稱す、固よりケツアルコアトル一人の能く爲す所に非ざりしが、果せる哉中央亞米利加及其の附近にはトルテク人(Toltecs)或はマヤ人(Maya people)と稱する一種の人民古くより住みをりて、盛んに堂塔宮殿を建築したり、到底後世の土人輩の夢想だも爲し得る所に非ず、而して此人種はメキシコ人と其源を同うせる者と見ゆ、彼等はワステカHuasteca と稱せられ、メキシコ人民はアステクAztec, Azteeと稱せらる、其本と同一なるは一目に瞭然たるべし、

第七圖



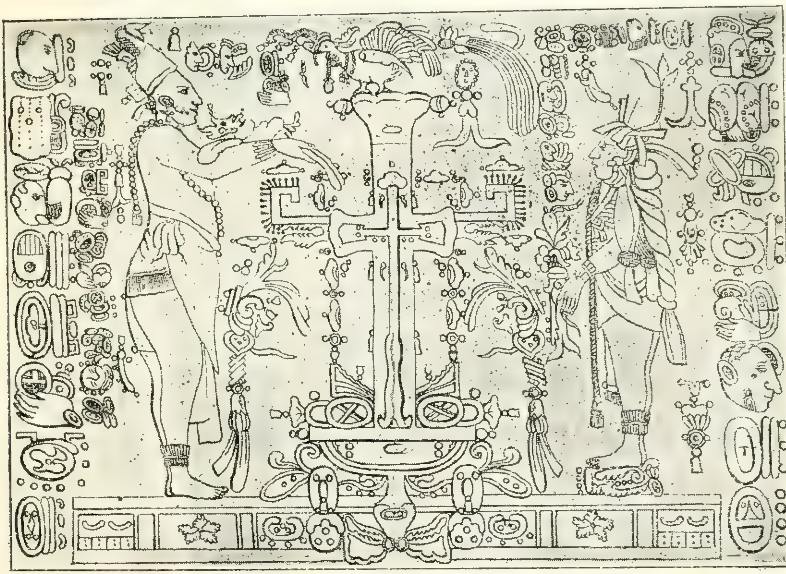
マヤ人民の堂塔

此マヤ人民がユカタン(Yucatan)、ミトラ(Mitla)、パレンクエ(Palenque)、コパン(Copan, Coban)、ウシマル(Uxmal)等に遺せし壯大なる殿宇、臺塔、及び精巧なる彫刻物は中央亞米利加の偉觀と稱す、殊に其外觀を巍大にして內裏を狹小にしたる處

一志ほの奇觀と稱すべし、
茲に掲げたるはパレンクエ地方に於ける六大建築中の一にして、一層なれども高さ二十五呎、間口二百八十四呎、奥行百八十呎、巍然として金字塔ピラミツト風の基址上に聳立す、周圍の牆壁には濶さ九呎の門口を列開す、其數前面に十二あり、又殿堂の眞中頃に高塔を設けたるが、凡て此種の樓塔は單に幾多の梯段を昇りつむるや遂に狹窄窮まりて復進む能はず、絶て登觀すべき室あるを見ず、亦是れマヤ建築の一奇點と稱すべし、
此殿堂は石造にして其內裏に於る壁上には種々の彫刻

ありて施こすに極彩色を以てせること我が日光の廟に似たり、是等彫刻の一を玆に掲げて之が一斑を示さんに（第八圖を見よ）、本圖の如きは祭司若くは神官が禮拜を執り行ひをる所を描

第八圖



マヤ人の壁上彫刻

ける者とす、人物の左右には一種の象形文字を以て之が意味を詰し、以て其何を爲しつゝあるやを明かにすることと、埃及の壁畫と其趣を同じうす、(此圖につきては倘下に言はん所を見よ、)

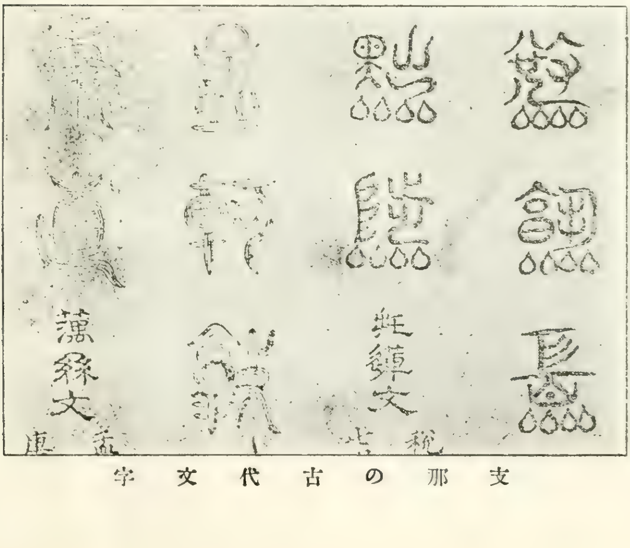
本圖中の人物は勿論當時の人種の相貌を寫せる者なるが、之を今の土人に比較すれば、毫も似ずして却つて彼のケツアルコアトルの肖像に似たる所あるを見ん、只此等の人物は一般に額を匾（ひらた）くしたる如く見ゆ、蓋し是亦當時彼等の社會に行なはれし風俗なりけん歟、今も太平洋のサモア島、米國のコロンビア等には匾頭の陋風盛んに行

第九圖



マヤ人民の神字

第十圖

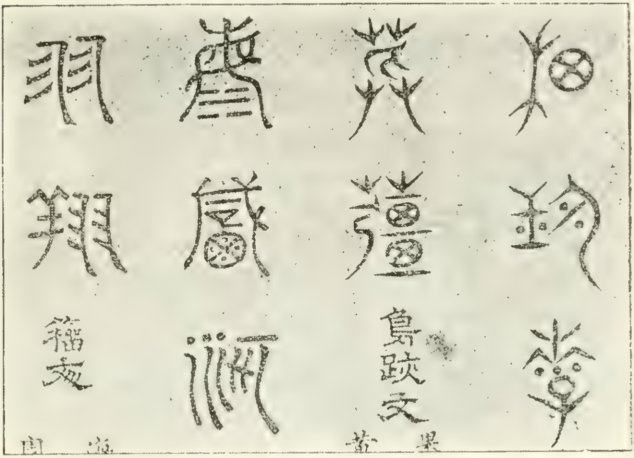


支那の古代文字

なはれをると云ふ、

偖此圖に出て見るを得るが如く、マヤ人種は一種奇異なる象形文字を有てり、之を埃及の象形文字(神字)に比ぶるに更に幾層の複雜繁疊を加へ、支那の古代文字に較ぶるも尙其煩を增すが如し、決して實用に供せし者にあらじ、埃及の神字の如く、否な埃及の神字よりも却つて、是れ僧侶の秘字たりしならんと思はる、比較に便せん爲め支那の古字及び埃及の象形文字を揭げて讀者の一粲に供す、第十二圖中に於る蟲は卽ち昔し埃及人が尊重せし甲蟲(ケプル)(scarabæus)にして、死者の墳墓中には必ず之を納れたり

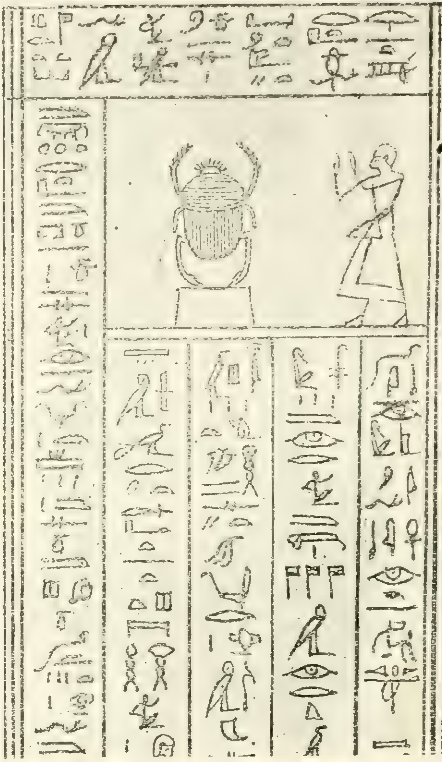
第十一圖

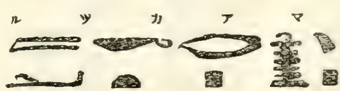


支那の古代文字

と云ふ、蓋し其活き強きに取れる者ならん歟、ブンゼン(Bunsen)は、是れ世界の造主たるプタ神(Ptah)の一表號なればとて、多分世界の象形ならんと論ぜり、亦是れプルータルクの説にてありき(第二圖を參照せよ)、此等のマヤ文字は猶太、亞拉毘亞等の文字の如く、否

第十二圖





埃及の象形文字

な寧ろ支那の文字の如く右より縦に書きし者なり、稀には横に書きしも亦見うけらる、殊に起頭の一字を大きく所謂カピタルにしたる如きは面白しとす、

是の如き建築、是の如き技藝、是の如き文字を有せし人民は決して野蠻には非ず、ジョセフ、スミスが大膽にも亞米利加の古代は文明の世界なりしと斷言せしも偶然には ![非ざりし也、]

但しスミスは此等の考古學的發見を講究して然る後に其說をなせし者なるか、若し然らば何ぞ之に先知の明を許すべけんや、其實スミスは全く此等の事を學ばずして殆んど直覺的に其大斷言をなせし者なりとす、

昔し中央亞米利加及び墨色哥に住ひしマヤ人民アステク人民は、上に說ける如き幾多の傳說及び風習を有せし

かば、夙に之をノアの子孫または猶太人の末裔となせる說行なはれざりしに非ず、否な西班牙語にて諸神父等が物せる三百年來の著書翻譯固より山の如くなりし而已ならず、英語にても既にロードキングズボロウ(Lord Kingsborough)の卷帙浩瀚なる「墨色哥古代考」(Mexican Antiquities)の如き、ロバルトソン(Robertson)の亞米利加史の如き、久しく學者間に相行なはれてありき、實にキングズボロウ氏の如きは、其メキシコに於るや恰も獨逸のブンゼン(Bunsen)が埃及に於ける如くなりき、否な寧ろ前者が『墨色哥古代考』は後者の手に在て大本三千頁の『埃及學大全』と成

れりと謂ふべけん、

然りと雖も家道不如意なるスミスは西班牙語は勿論、此等浩瀚渺茫たる英書の如きは研究するに暇あらざりき、否な不文にして之を讀むの目あらざりき、故に道がの反對論者も此點に於ては誣言を逞うする能はず、纔かにスポールヂング譚（第十四頁を見よ）を以て之を攻撃するに務めたりし也、

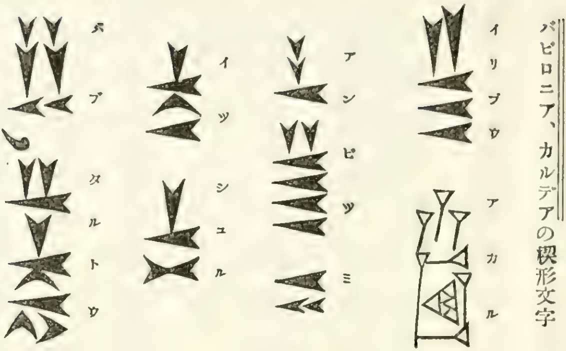
然のみならず、此等の英書は重に中央亞米利加及び墨色哥に關する者なりしに、スミスが建築せる樓閣は直ちに南北兩亞米利加の全州を包括する絶大の建物なりき、殊

に當時は此等の問題たる尙茫漠として、之に入る者は恰もサハラの大沙漠に獨り路を失なへるの觀ありき、復何の之に基づきて建築さるべき者あらんや、アステク人民の古代に關して稍精確なる研究の端緒を開きしは、一千八百四十年後に始めて顯はれし博學洽聞多識强記なるプレスコット(Prescott)の墨色哥征畧史(The Conquest of Mexico)を以て嚆矢とす、又マヤ人の遺跡に關する精密の探檢は北米のスクァイアル(Squier)氏を以て始まり、佛國のシャルチー(Charnay)氏を以て大成すと謂ふべし、此中前者は一千八百五十年後にして、後者は實に一千八百八十

年の事に係れり（シャルテー探檢は合衆國政府と佛蘭士政府とが合併補助して大規模に之を行なはしめし者とす）、之を要するに、ジョセフ、スミスの亞米利加土人起原論は殆んど獨自獨立なる者と認めざる可らざる也、

借今再び墨色哥（メキシコ）の古代に溯りて之を見んに、論者或は言はん墨色哥人は寧ろ支那より移住したりし者ならん、數年前該國にては一種の象形文字を刻める石碑を掘出せしに是れ支那の古代文字なりしと云ふに非ずやと、然り、虛實は兎まれ角まれ、其話は確かに有りたり、又支那人及び其他の東洋人も必ず彼の地へ幾度か漂着せしならん、而して多くは是夫（か）の比較的に獰猛なるメキシコ人の爲

第十三圖



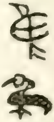
西部亞細亞の象形文字

第十四圖



西部亞細亞パピロニア太古の畫文

に殺されたらん、剰さへ後世に於ては其肉をさへに食はれたらん、然れば支那碑文の實際に存するも何ぞ怪しむに足んや、然りと雖も墨色哥人は支那人の如く象形文字を用ひざりき、彼等が用ひたりし者は幼稚にして全く畫文(Picture writing)なりき、畫文は文字の中にて最も程度の卑き者とす、例の楔形文字を以て有名なる上古のバビロニア人民すらも、其初は全く畫文を用ひしと見ゆ、埃及の如きも其神字中に尚純然たる畫文の跡を存するあり、例ば顚倒と云ふ文字を直ちに  と書けるが如し、支那に於ては之に異なり、固より極初は純乎たる畫文にして、

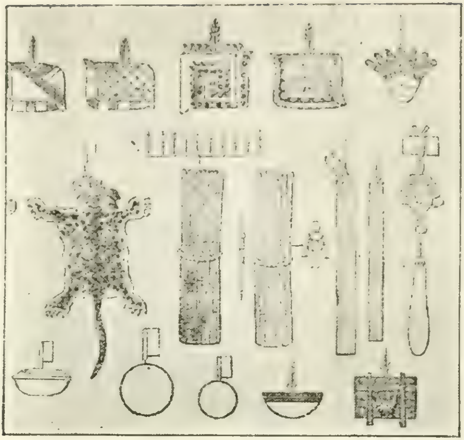
例へば雛をと書けりと雖も、漸々に畫字を變じて

夙に斯く（舟）

（君）（伐）等

と順次進化を經て、遂に今日の如き割合に單純なる文字とは成りぬ、今之を以て墨色哥の畫文に比するに、實に一大逕庭の其間に存する者あるを認めずんばあらず、換言すれば、墨色

第十五圖

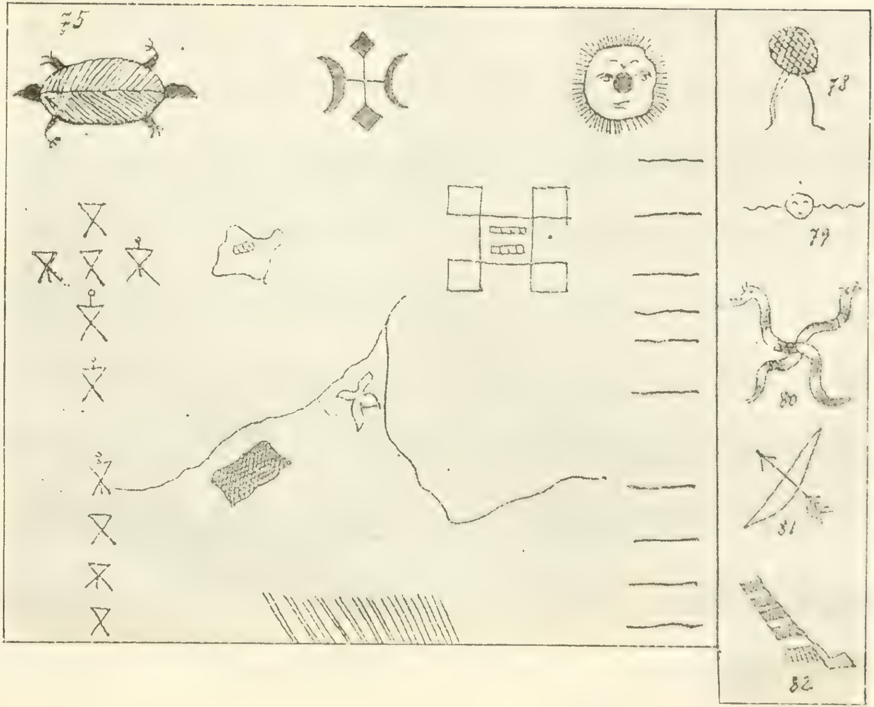


墨色哥の畫文

哥國のは眞の畫なり、文字に非ず、唯種々の畫を以て出來事を記せると猶我國の盲暦の如し、白露國の結繩（キーポ(quipo)）に僅か一歩を進めたる者とす、コルテスの始めて該國に臨むや、談判の使節一行中頻りに歐人を描寫しをる者ありしかば、コルテス將軍奇貨措くべしと爲し、俄かに幾隊の騎兵をして操練せしめ、又一群の砲兵をして發砲せしめしに、彼等は悉く之をも寫して其王モンテズマに捧呈したれば、滿朝爲めに寒心せりと云ふ、然も有りつらん、近世の亞米利加土人が往々使用せる畫文は此種の畫文の衰退したる者に外ならず、其巧拙實に雲泥の差あり

第十六圖

（近世の亞米利加土人の畫文）



（ゲトケ氏の世界文字考に據る）

も此第十六圖に於る畫文は如何なる事を表示せる者ぞと尋るに、其七十五と記したる畫文は全く是れ歐羅巴人が亞米利加に入り來れることを表示する一種の歴史畫なりとす、二本の棒を交叉して上を三角にし之に小〇を戴かせたるは歐洲人の形と知るべし、但し此種の畫文中には解し易き者と到底解すべからざる者とありて存す、其解す可らざる者は多くは判じ物の類に屬す、之を我が晉暦若くは判じ畫暦に徵せんに、鼠牛虎等の畫を以て子丑寅を表し、扇若くは裸躰を以て暑を表し、黑く太さ十の字若くは十本杭を以て十方ぐれを表し、鬼面若くは鬼形

を以て節分(追儺)を表する如きは領會し易しと雖ども、賊が荷を奪ふ圖を描きて入梅(荷奪)を示し、老人が禿頭を撫る圖を描きで半夏生(禿生)を示し、錢二百と砥石と蚊を描きて二百十日(二百砥蚊)を示し、飯櫃(ハチ)と重箱(ヂウ)と又飯櫃と矢を描きて八十八夜を示すが如きは、最も難解に屬し、外國人にありては到底之を理會し得ざるべし、

(註)北米に於ける土人間に行なはるゝ畫文は畫文の尤も拙劣なる者なりと雖も、又其種類も區々にして一定せずと雖も、其中に自ら觀念の相通ずる者も蓋無きに非ず、例へば卵を以て天帝(Gitche Manito, (Great Spirit)を表し、蛇を以て惡魔(Mitche Manito)を表し、横線を以て

地を表し、下に向へる曲線を以て天を表し、上に向へる曲線を以て舟を表し、白圈を以て生を表し、黒圈を以て死を表するが如き、又飛鳥の向(むき)を以て行人の方向を表し、茅舍に向へる脚を以て客來若くは招待を表する如き、多少の系秩なきにしも非ず、而して又此等の畫文はヒアワタ(Hiawatha)と名くる聖人の創製に係ると稱し、又此ヒアワタは滿月の中より落ち來れる美人が草野の花間に西風(ムチエキーウヰス)に感じて產めりし者なりと傳ふ、亦是れ墨色哥(メキシコ)に於るケツアルコアトルの類なる哉、單に異曲同工なる而已ならず、蓋し、是れ亦同人異稱なるべし、如何となればヒアワタは亦他の民族間にマナボゾ、ミチアブ、チヤボ、タレンヤワゴン等の別名を以て語

り傳へられておれば也、

第十七圖



マヤ普通文字

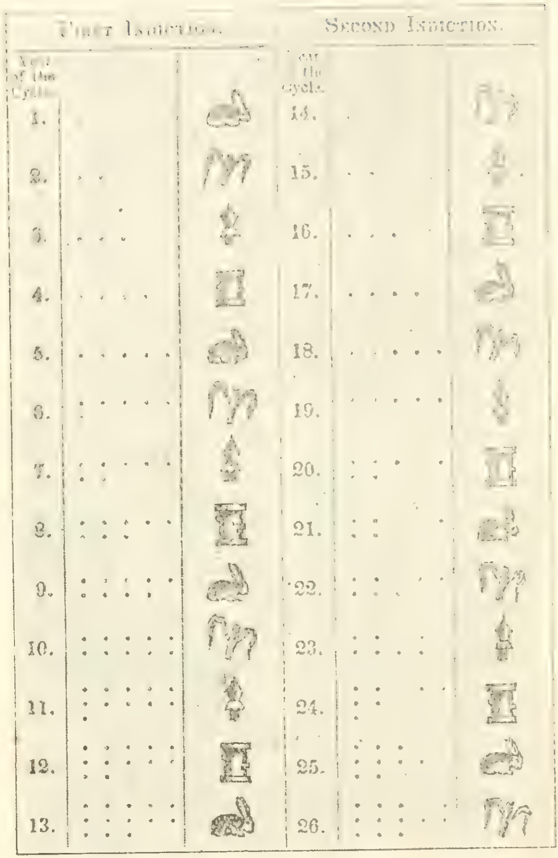
熟ら考ふるに、形こそ異なれ、第九圖に於るマヤ神字の如きも實に一種の畫文なるが如し、到底彼が如き者は一般普通の使用に供しては其煩瑣に堪へじ、是れ多くは神官僧侶の閑事業のみ、寔に彼よりは遙かに簡易なるマヤ文字てふ者もイスパ

ニヤ宣教師の筆によりて相傳へられある也、但し此種の文字も亦果してマヤ人固有の物なりしや否やは尚疑問に屬す、或學者の如きは之を以て當時イスパニア宣教師の捏造となし、又は土人中に於る學者の新製となすこと猶畏吾兒文字の景教徒に於るが如し、

但し墨色哥人を以て支那の子孫と爲せる論者は或は更に說を進めて言はん、墨色哥人は一種の甲子法(花甲子)を有せしに非ずやと、然り、是また事實なり、然りと雖も、埃及人の如きも亦種々の紀運法を有てり、何ぞ必ずしも支那に限らんや、殊に墨色哥の紀年法と支那の紀年法とは根

柢に於て異なる者あり、先づ支那の十干十二支に引かへ

第十八圖



墨色哥甲子法

て、黑色哥人は四千十三支を立て、隨つて又六十甲子の代

りに4×13即ち五十二甲子を有せり、然ればメキシコの還暦は五十二年にして成る者とす、

今試みに其一斑を説んに、第十八圖上に見えたる如く、彼等は先づ地水火風の四行を表する兎、葦、燧石、家屋を以て四干となし、之に配合するに其聖數たる十三を以てし、十三に至る每に四干の首先たる記象を最後に廻はして更に之を十三の數に配合し、斯の如く四回繰かへして而して止む者とす、是れ決して支那の甲子法に基づける者に非ず、埃及支那等の甲子法紀年法と均しく是亦特發なる者と謂はざる可らず、但し黑色哥人が由て以て日を紀せ

し所の具は支那の十二支に稍似たりしと雖も、是も亦同日の論ならん而已、

更に之をマヤ若くは墨國の言語に徵するに、汗が支那との關係は愈よ薄きを認め得られん歟、黑色哥語は上に揭げたる神名人名等に於る如く多綴結合性なる者にして其文字の甚だ長きを常とす、例へば神官をnotlazomahuizteo-pixcatatzin「我が父と敬愛し奉る神官殿の義」と一氣に呼稱するが如し、此中「神。」と云ふ文字はテオに當ると知るべし、斯くテオは「神」の義なるが故に、神宮をteocalix(テオカリス)と云ひ、神書をteoamoxtli(テオアモストリ)と云ふ也、該語

の特色はタチッテト(t, z, ch, tl, tz)の音を最も多く用ひ、トル(tl, tli, itl, tla, atl)の聲を尤も繁く發するに在り、而して1の音を以て文字の首に冠することは絶て無きこと、恰も純粹の日本語にラリルレロを冠したる者なきが如し、只rの缺けて無きは支那に似たりとや言はん、然れど支那語には龍(lung)、遼(liau)利理黎(li)等1を以て始まる文字夥しければ、彼と此とは其特色を異にすと謂はざる可らず、

其他、墨色哥市の西なるミチヨアカン Michoacan 地方に行なはるゝ最も音調善しと稱するタラスカ語にては、例へ

は主禱文中の第一行天に在す我等の父(我等が在天の父)てふ事を Tata uchayeri tukiro hacahini ayandaro と云ひ、又墨色哥語と縁める トトナカ 語にては、同主禱文を Quintlatcané nac tiayan huil 若くは Quintaccan ò nitiayan huill と曰へり、今之を以て支那語の『我父在天者』(古音 Nga pu dzai tin zhà; 今音 Ngo fu tsai t'ien ché) に較ぶるに、實に天地の懸隔あるを見ん、特に單綴と複綴との點に於ても其相違の殆んど根本的なるを見ん、

更に進んで中央亞米利加に至れば、マヤ語の子孫末裔尚處々に活存すと雖ども、是また支那語とは全く其類を異

するを奈何せんや、例へばホンドラス(Honduras)地方に於る土語を通覧するに大凡左の如し、——壹＝イタ、イタスカ(itaska)、貳＝ナア、參＝ラグワ(lagua)、四＝アリア、五＝サイへ、六＝フエ(huie)、七＝フヰーカ(hui-ca)、八＝テーフカ(teefu-ca)、九＝カヤパ、拾＝イシス(issis)、日＝ガシ、星＝シリ(siri)、火＝ウガ(uga, yuga, ua)、水＝グワス(guass, guash, uash)、木＝イリ(ili)、またニカラグワ(Nicaragua)及びサンサルワドル(San Salvador)に於ては左の方言の行なはるゝを見る、

NICARAGUA.			SAN SALVADOR.		
	(1)	(2)		(1)	(2)
	Masaya.	Suetiabo.		SAVANERIC.	BAYANO.
月	ahca	numbu	月	chuhi	———
星	uku	nuete	星	behugupa	———
男	rahpa	(n)uho	男	———	———
女	rapaku	(n)ahseyomo	女	auichi	purra
目	setu	nahte	目	siguacva	ivia
耳	nau	nuhme	耳	olo	onja
鼻	taco	mungoo	鼻	vase	asagua
口	dahuu	nunsu	口	ca	caguigui
毛	tusu	membe	毛	chugags	saglaga
我	icu	saho	一	———	quenchique
汝	ica	sumesheta	二	———	povuar
彼	ica	———	三	———	pavuar
此	cala	———	四	———	paquevuar
父	ana	gooha	五	———	atate
母	autu	mhohue	六	———	nercua

視よ一口に中央亞米利加とは申せど、其中に行なはるゝ方言の如何に互に相異なるかを、同じニカラグワにても又チョンタル(Chontal)にては男をアル(all)女をヤル(i-all)と呼び、モスキト、コーストにては男をワイクナ(waikna)、女をマイレン(mairen)と呼ぶが如く、實に一地方一鄉邑悉く特殊の方言を有する者に似たり、否な、是實に亞米利加の土人語の特色なり、亞米利加の土人は其容貌骨格の指示する如く、皆均く銅色人種に屬すと雖も、其言語に至りては實に千差萬別にして、其數殆んど枚擧するに暇あらず、加奈陀の西南隅に於る彈丸黑子のブリチシ、コランビア

中にても尙十餘の別種なる土人を算ふべく、其中晩香坡(バンクウバ)島上に於るアートと稱する土人のみにても亦殆と二十族に分かれをるを見る、而して其言語の各相異なるは勿論なりとす、蕞爾たる中央亞米利加に彼が如く幾多の全然別異なるが如き言語の行はれをるも何ぞ怪むに足らんや、

今ブリチシ、コランビアの土人中に就て若干の例を掲げんに大凡左の如し[但し左の信據し得べき書中より取る、Comparative Vocabularies of the Indian Tribes of British Columbia, by W. Fraser Tolmie and George M. Dawson, 1884.]

日本	Thlinkit	Tshimsian	Haid	Kwakiool
男	'kha	waioot	ithlunga	pukwanum
女	shawut	(h)unnah	jada	kunnum
目	hleu	wuleil	hongo	huks
手	uhtleik	lahsnain	shitlai	haiasso
足	kakoos	asi	til	kokwio
烟草	kunsh	imdokumshewa	kwil	tlowkwa
日	kukan	kimakundzioos	jowi	noshi
火	kan	lukh	tsuno	nai

但し斯の如く互に甚だ異なりと雖も、互に亦相同じうする所の者も無きに非ず、トルミ氏の表を借りて其一斑を例せんに、我と火との二語に於ては實に北米土人中に左の相似たる者あるを見る也、

我 I. (*Pronoun.*)

Neuio ....Tshimsian.
Ni ....Delaware (Algonkin family).
Nila ....Shawnee (Algonkin family).
Nica ....Thsinook.
Einuk ....Shahaptani.
Uro ....Choctaw.
Noo-kwa ......Kwiha (Kwakiool family).
Netza ....Comanche (Shoshonee family).
Nini' ....Chemehueni (Shoshonee family).
Neh ....Cahnilla (Shoshonee family).
No............Kechi, San Luis Rey.
No............Netela, San Juan Capestrano.
Noma ....Netela, San Gabriel.
No ....Kioway (having Shoshonee affinities).
Ni ....Navajo (Apache family).
Hino.........Kiwomi (Keres family).
Hoho ....Zuni (Zuni family).
N' yat ....Cuchan (Tuma family).
In yātz ....Coco-Maricopa (Tuma family).
Imata n' yatz ..Majave (Tuma family).
N' yat ....Diegeno (Tuma family).

火 FIRE.

Kun (firewood) Tshimsian family.
Kān ....Skutkwan (Thlinkit family).
Kounn ....Chepewyan (Mackenzie).
Khon ....Dogrib (Richardson).
Kone..........Takulli (Harman).
Khon ....Umkwa (Hale).
Konh ....Navajo (Schoolcraft).
Kon ....Apache (Bartlett).
Koh ....Hoopa (Schoolcraft).
Kun ....Comanche (Shoshonee family).
Kun ....Chemehuevi (Shoshonee family).
Kut ....Cahnillo (Shoshonee family).

人 MAN.

Dinnie ....Chepewyan (Mackenzie).
Tennee ....Takulli (Harman).
Tune' ....Umkwa (Hale).
Tennai ....Navajo (Schoolcraft).
Wins (A man) .... } dialects of Shahaptani.
Tein (Men or people) .. }

然らば敢て問ふ、亞米利加土人の言語は世界中何れの國語と其類を同じうする者なる乎、曰く是れ從來博言學者輩が至難と見做せる問題なり、抑も世の中には言語と政治家ほど腐敗し易き者はあらず、高尚なる文學ありて之が鹽となるに非ずんば、到底腐敗を防ぐこと能はじ、否な拉甸語の如き立派なる文學を有てる者すらも、一朝蒙昧不文なる半開人民の手にかゝるや、忽ち腐敗して今の伊大利亞語となり、以西班牙語となり、葡萄牙語となり、佛蘭西語となりぬ、矧んや毫も文學なき國語に於てをや、況してや幾多の小族に分裂せる蠻民に於てをや、其初多綴語

にして今單綴語と成り了れる蠻語も已に中央亞細亞に發見せられたり、西藏語の如きは文字に書くと口に言ふとは非常の相違あるにあらずや、

(註) 西藏語にては舊來の綴字法と實際の發音法との大いに相違ふ文字少なからず、例へば壹をgchigと書きてchikと發音し、brgyad (八)をgyeと、zlava (月)をdawaと發音するが如し、猶英語にてknifeをnifeと、ChòlmondelayをChumleyと、WorcesterをWusterと發音するが如し、

是に由て觀きたれば、文學の之を醯藏糖漬する者なき亞米利加語の忽ちに四分五裂し、千變萬化したるは毫も怪

しむに足らず、況んや其之を話したる亞米利加土人は人口稀薄にして廣大なる面積に三三五々分棲散處したる者なるに於てをや、其言語の千差萬別なるは決して是れ人種の千差萬別なる證據には非ず、試みに亞米利加土人と稱する者を生理的に觀察せよ、皆均しく是れ銅色土人(red Indians)なるは爭ふ可らざるの事實なるに非ずや、人種の相貌は百千歲を經るも容易に變ぜず、之に反して言語は能く一代にして全く化す、地質學上に火力論者(Plutonists)と水力論者(Neptunists)ありしが如く、博言學上にも亦天爲論者(Analogists)と人爲論者(Anomalists)とあり

き、然れど孰れも極端にして與すべからず、要するに言語は天爲にして又人爲なり、必ずしも一元より段々と轉訛し來れる者にあらず隨時隨處必要に應じて生じ來る也、然ればヘロドタスが記述せるエジプト王サムメチカスの實驗法の如きは全く正鵠を失せる者と謂はざるを得ざるべし、

(註) 歷史の元祖と稱せらるゝヘロドタスの世界史中に記るして曰くエジプト人はサムメチカス王の治世に至るまでは自ら天下人間中の最も古き國民と信じ居たり、然るに此王の位に即くや該疑問を實地に驗定せんと百方試て、遂にフリヂヤ人(Phrygians)を最も古き

者と認むるに至れりと云ふ、其之を驗定せる法大凡そ左の如し、——
サムメチカス王乃はち貧人の赤子の生れたるばかりなるを二人求め得て、之を一牧羊者に托して羊群の中に育てしめ、其の前にては口を箝んで何事をも語らしめず、其の飢ゑたる時には羊を曳き來りて之を乳養せしめ、其如何なる語を自然に發するかを見んと待をれり、是其自然に發せん語は必ず最も古き國語に屬する者なるべしと信じたれば也。斯くて殆ど二箇年に垂んとする頃ほひ、一日右の牧者の入來るを見るや二人の嬰兒は手をさし伸べて、ベコス、ベコスと呼べり、其狀さながら飢て食物を乞へる者の如し、因て之を王に奏しければ、王命じて徧ねく其語の所屬を尋ねしめしが、遂にフリヂア國にて

バン(或は食物)をベコスと曰ふ由（よし）を發見したり、是を以て該國民を天下の最も古き者と認むるに至りぬ、此の事が眞に有りたる者なる由を我は自からメムヒスにてヘフアイストス神の神主等より聞き得たり云々、

此の如きは畢竟偶合のみ、偶然の暗合を以て人種の異同を決すべくんば、亞弗利加なるスビア邊のビシヤ族は男をotak（チタク）と呼び、埃及語にては油をabr（アブル）(abar（アバル）)、有るをar（アル）と曰ひ、上古のフヰニシア語にては柱をashera（アシラ）と稱へたるが故に、皆大和民族と人種を同うすと謂はざる可らざらん、實に亞米利加にも此種の偶合多し、例はカリフヲルニア州に就て之を檢するに、吾人は左の著しき暗合に接す、

日本	KOPEH.	TALATUI.	SAN RAPHAEL.	TSCHOKOYEM.
火(ヒ,ホ)	po	wike	waik	wikih
日(太陽)	suuh	hi	hi	hih
日(晝)	—	hi umu	hi	hiahna

此外サンタ、バルバラ(Santa Barbara)族が矢をヤと言ふが如き、上に掲げたるスリンケット族(第百二十八頁を見よ)が足をアシと呼ぶが如き、クチユアン族(Cuchuean)が天をアメと稱ふるが如き、殆んど枚擧に暇あらざらんとす、然れども亞米利加語の全體を通觀せば、そが支那語の苗裔に非ざるが如く、又日本語の姉妹にも非ざるを曉らん、嚮に我はメキシコ語の往々非常に長き者なることを說けるが、其他の北米語中にも、殊にユタ近傍なる土人語中には、外國人をして絕望を

を叫ばしむるに足るべき文字多きを見る、例へばパウニ族(Pawnee)は日(晝)を shakooroosehairet と曰ひ、惡魔を tsaheekshkakooraiwah と云ひ、チエヌーク族(Chenook)は星を tkhlkhekhanama と曰ひ、トラツカナイ(Tlatskanai)は齒を khotsiakatatkhusin と曰ひ、舌を khotzotkltzitzkhltsaha と曰ふが如し、是れメキシコ人が薪を tlatlatlalpistitentli と呼ぶと同日の論のみ(第百二十一頁を參照せよ)、殊に其困難なる kh 音の如き到底日本人支那人の能く模倣する所に非ず、

但し論者或曰ん、今の千差萬別なる土人語は元と單一なる者が漸々と墮落して玆に至れるに非ず、其初よりして斯の如く千差萬別なりし而已と然れども是は比較博言

學上の結果を無視したる暴論にして取るに足らず、其一例を示さんに(第百二十六頁にも說ける如く)、蕞爾たる中央亞米利加邊に於るワステカ人若くはマヤ人の苗裔中にも既に大別して五六種の殆んど異質的なる方言若くは邦語を認むるに非ずや、而して此等は皆墮落腐敗したる國語の特質を呈す要するに亞米利加土人は人も墮墮したる者なれば言語も亦墮落したる者とす、

但し此點に於ても亦論者は異議を唱へて曰ん、言語の墮落したりとの事は已に命を聽けり、然れども人は墮落したるに非ず、依然初より蠻民なりし而已と、是亦事實に戻

れり、北亞米利加洲中にも南へ往くに隨ひて處々の巖石に壯大なる彫刻ありて存し、今の土人は只其巨大なるを感歎して巨靈（彼等は天帝を巨靈即ち Guitche Manito と稱す）の所爲となす而已、又再び墨色哥（メキシコ）の古傳につきて之を尋ぬるに、該人民は其の高天原（たかまのはら）を北方に位ゐせしめて己が根源地となし、之をアストラン（Aztlan）と稱し、又ウエウエタパラン（Huehuetapal-lan）と稱す、倶に光明ある祖國の謂なり。又諸他の蠻族中にも西方若は西北方を以て己が出で來りたる地と爲す者多し、而して此事たるや實地に就きて稽ふるも其根據あるを信ぜずんば非ざる也、

但し希百來語(猶太人民の用ひたりし言語)と亞米利加語との關係は果して何如ん、是最後に起るべき大疑問なるべし、按ずるに一字一語に於ては、亞米利加語中希百來語に相似たる者或は在らんこと猶幷が支那語日本語に於る如けん、唯文法に至りては往々彼此相出入する者なきに非ず、先づ米語は時に或は形容詞及び持格代名詞を名詞の後に置く、例へば吾が鐵砲 cah tahvow(ダヴァウは小銃の義)、汝の鐵砲 tahvow nis、彼が鐵砲 tahvow is、巖山 accovocleit nookkey,(アッコボクレトは山と云ふ事)、大湖 willcau accoconook(ウヰルカウは大の義)、小湖 accoconook nahnah(以上タク二語)、の如し、今少しく例の主禱文(Lord's Prayer)に由て

之を比較せんに、希百來文は夫の『天に在す我等の父よ、願くは御名の崇められんことを』を左の如く書す、

[English: Our Father who art in Heaven! Hallowed be thy name!]

Hebrew: Abinū (father-our) shebashāmaim (who in Heaven)! ithkadash (be hallowed) shemechā (name-thy)!

Cochimi of Lower California: Pennayu (our) Makenamba (father) yaa (this) ambayujui (heaven-in) miya mo (thou art); buhu (thy) mombojua (name) tamma (men) gkommend (confess).

Waikur: Kepe (our) Dare (father) tekereka-datembi (bent-earth-in; *i.e.*, Heaven-in) dai (thou art); ei (thee) ri (o that, would that) akatuike (know, recognize) pu (all) ti (people) me (would, will).

其趣大凡斯の如し、讀者諸君の精査に任す、

但し希百來文にて書ける碑文の如き者果して發見せられたりや、云ふ一千八百六十年より六十五年の間にオハ

イヲ州リッキング郡中に希百來文を載る數枚の石掘出されたりと、殊に其の一枚の表には chiis (have pity) na (o that) alair (upon him) nephel (or Nephet) חוס נא עליו נפל と云ふ文字を載せたりと稱す、此文中最後の一字を以て最も緊要なる者とす、如何となれば之を nephel と讀めば『月足らず子』の義なれども、若し之を Nephit נפל なりしとせば、是れモルモン教に所謂ニーファイ人 a Nephite の義と成るが故なり、若し果して後者ならば、是れ『願はくは彼れニーファイ人を憫み給へ』と飜譯すべき者ならん、

(註) 希百來文即ち猶太字は右より左へ横に讀むを法とす、然れば上

の文も希百來文にては

Nephet alaiv na Chuis

と右より順次に讀むべき者とす、此中 na は即ち上に掲げたるツイクル語中の ni に當りて、俱に希望を陳る添語なりと知るべし、

但しジヨセフ、スミスは曰ふ上古の亞米利加人は耶穌基督を信奉したりと、果して其證として見るべき者いづれにか殘存するや、按ずるにイスパニア人が初め墨色哥(メキシコ)ユカタン等に到りし時尤も驚きしは其種々の禮典儀式及び古傳口碑が極めて猶太的又極めて基督教的なる點に在りき、是(こ)は既に上に粗論及せるが如し（第八十六頁以下を見よ）、而し

て玆に猶一つ未だ言はざりし者ありて存す、他なし、是れ即ち十字架なりとす、第八圖として掲げたるパレンクエ神殿の壁畫の如きは(第九十八頁を見よ)、神官が十字架を祭りをる所を描ける者なり、抑も十字架は基督教の最大要素にして、十字架を離るれば殆んど基督教なからんとす、彼等メキシユ人又はパレンクエ人は如何にして斯る十字架を祭るには至りしぞ、論者或は曰ん、十字架はメキシユに限らず、亞米利加に限らず、埃及の如きも亦已に十字形の表號を有したりと、或は然らん、或は然らざらん、然りと雖も十字形の存する處には多くは基督教の聯關せる形迹あ

りて存す、我が島津家の紋章の如き、表面には轡の形と稱すれども、實は○に十字架を收めたる者なることは嘗て證明せられたり、人若ザヴ井ェー Xavier 師が來朝の時先づ麑島に滞在したりしを顧りみなば思の半に過る者あらん、

メキシュ人は啻に十字架を偏く崇拜せしのみならず、又一種の聖晩餐式(The Lord's Supper)を執行したり、即ち墨色哥の神官は玉蜀黍の粉を血に混ぜて餅を作り、之を神肉と號じて衆に頒ち、憂色と謙狀を帶て謹んで之を食せりと云ふ(プレスコット墨色哥征略史)、

彼等は又一種の三位一體說を有せり、曰く、父はエオナ(Yeona)、子はバハブ(Bahab)、聖靈はユアチ(Euach)と稱す、曰く、其のバハブは處女チビリアス(Chibirias)の產める所にして、遂に木上に釘殺せられ、後ち穌りて天に昇れりと(ラス、カサス及キンクズボロウ)、是亦ケツアルコアトル(第九十三頁を見よ)の話と相聯關す、而して此種の救世主出現談は智利等の南米國中にも亦行なはれたりと稱す、豈復奇ならずや、但し亞米利加には此上尙首を傾くべき一箇の珍らしき事迹あるを見る、メキシコと云ふ名稱即ち是なり、Mexicoてふ文字は、英語にてはメキシコと讀めども、以斯班牙語

にてはメシコ(Messico)と讀むべき者とす、傳へ云ふ昔しメシと名くる酋長其民アステク人をアナワクAnahuacの野に率ゐしが故に、其建たる國をメシコと稱すと、今之を希百來語に較ぶるに、該語にては基督をMessick(メシーク)と書きて、メシア(Messiah)と發音せしむ、其相似たるや甚だしと謂ふべし、嗚呼メキシコとは眞にメシア國の義なるか、但しは是れ單に暗合偶契なる乎、或は亦是れ牽強附會なる乎、尚一層の研究を値す、

之を要するに、麼兒門經が宗教界の最大疑問なる如く、亞米利加土人の起原も亦人類學上の最大疑問に屬す、嗚呼

最大疑問と最大疑問、誰か此最大疑問をして渙然氷解せしむる者ぞ！

第三章　補註

（い）（第百八頁參照）上古より亞米利加に移住し又は漂着したる國民一にして足らず、豈唯支那人日本人のみならんや、ホンボルトが黑色哥人を以て蒙古人若くは支那人の移住に係る者と爲せし臆説は薄弱にして、既に已に陳腐に屬す、之を要するに南北亞米利加は各國民の漂着地若くは避難地にして、最後には英國の淸敎徒（ピウリタンズ）之に壓制を避けつ、遂に夫の雄大なる合衆國を建設せり、上古に於る亞米利加植民に就ては蒙古説猶太説の外又希臘説セルト説等枚擧に暇あらず、中に就て最後なるセルト説を一言せんに、云ふ英國威見斯國の王子

マドク(Madoc)てふ者其民をメキシコに植ゑたりしかば、其子孫今に至るまで威兒斯(ウエルシ)語を話すこと屢々旅行家(例ば一千七百四十年にてはモルガン、ジヨンス、一千八百零一年にては太尉ロバルツの如き)の認めたるが如し、已に斯く西人の子孫なるが故に、彼等は其祖先は白人にして海外より來れりとの口碑を有す、十字架を禮拜す、威兒斯語の地名を有す、云々、寔に神父ブラツウルの如きは此の「所謂事實」を、顚倒して說を爲すらく、希臘語、拉甸語英語佛語等は皆悉く墨色哥語、より出で來りし者なりと!!

(ろ)(第百三頁參照)第十二圖中下位に横書せる埃及象形文字は、先づ口字形樣の細長き窓を横に描き、其下に指を伸たる腕を描き、最後に塔形を描きたる者にして、其音はマーカツル、其義は城櫓または高塔なりとす、是即ち希百來語のミグドル migdol に相當すと知るべし、(因に記す、第二

圖は第十二圖に於ける葬祭文の下部を便利の爲め分載したる者に係る」、

又上圖中に埃及僧が祭りをる甲蟲はケプル kheprr と名くる者にして其大體は第百二頁に説ける如くなるが、埃及人は亦此の圖を以て「地」を表し、之を讀んでタと爲す、支那語の地と粗其音を同じうす、而して又此甲蟲の下に大盃を描きて之を「創造」create の義に顚用す、其動詞の音、は依然ケパル也、

（は）第百十頁參照 第十三圖の極右第一行に於ける上字イリプゥは「船」の義、下字はアカル又はクゥと讀みて「食ふ」の義、第二行に於る文字は海神（魚神）の名にして、其中アンは「神」、ビッ bitu は「家」、ミは「水」の義と知るべし、（因に云ふ、右の中ビッは希百來語の beth（家）、ミは仝語の maim, me（水）と其語原を同じうす」

第三行のイッシュルは「鳥」なり、而して極左のバブタルトゥは即ち「門」を謂ふ者とす、

(に)(第百十八九頁參照)紀運法紀年法等につきて更に考ふるに、支那には大運、小運、日運(廿八年)、時運、章(十九年)、蔀(七十二年或六年)、紀(二十蔀)、元(三紀)等許多の運てふ者(cycles)あれども、其根本には六十記法あり、所謂六十花甲子を本尊とす、之を以て日を記し、月を記し、更に之を擴むれば、又六六三百六十日(一年の日數)と成るべく、一六六百年と成るべく、又六六三千六百年と成るべし、此六百年は是れ迦勒底亞人が用ひて以て月差を正したる者、此三千六百年は是れ埃及人が用ひて以て歳差を正したる者に係る、而して皆是れ六十運に根柢す、此點に於ては吾人は支那人と迦勒底亞(カルデア或バビロン)人とが兄弟なるを認めざるを得ず、否此種の甲子法は蒙古地方西藏地方にも亦廣く行なはるゝ

を見る也、是れ併し乍ら墨色哥の紀運法とは大に其趣を異にす、然るにホムボルト(Humboldt)が之を以て墨色哥人と支那人とを聯關せんと試みたるは不精密の至りにして、眞に弘法にも筆の誤と謂はざるを得ず、但し若し强て此等兩者の間に關係を認めんと欲せば、退いてジョセフ、スミスの論法を用ひんには若かじ、即ち此等兩紀運法はバビロニア(カルデア)を以て起原地と爲し、一は東亞に一は北米に遠く傳はりし者と見做すべし、其の差違は畢竟是れ江南の橘が江北に枳となるの類ならん而已、本書第七十六頁を再讀玩味せよ。

(ほ)百四十二頁を參照せよ 希百來文字を鐫ばめたる石碑は嘗にオハイヨ州より出たる而已にあらず、處々方々より出で來れりと云ふ、其中には最古の希百來文字にて聖書の句または十誡を刻みつけたる者も發見せられたり、昔イスパニア人の始めて到れるや夫の有名なる敎師慈善家

ラス、カサス(Las Casas)はハイチ島(Hayti)の人民が一種の希百來語を話す由を說き、ラフヰツ(Lafitu)はカリビ語が希百來語なりし事を記せり、然のみならず以斯班牙の歷史家輩は希百來文字が亞米利加洲に往々發見せられたるを特筆したり、剩へスリナム(Surinam)の猶太學者アイザク、ナシ(Isaac Nasci)は斷言すグヰアナ(Guiana)人民の語中に於ては其名詞悉く希百來語なりと、又簡畧に省書したる希百來文字も往々發見せられたりと稱す、既に希百來語アメリカに行なはれたりとせば、亞米利加語は希百來話を通じて埃及語とも關係せし者なるや論を俟たず、尙第四章を參看せよ、

(へ)第百四十四頁を見よ プレスコット、キングスボロウ等が以西班牙人の古書舊記に徵して說ける如く、墨色哥等には、啻に斯る圖書ありしのみならず、十宗架崇拜の風は當初盛んなりし也、

第四章

誣妄又誣妄

スポールヂング譚及其他の妄譚

第一章中に論及せし如く、スミスが摩兒門經を掣げて天下に號令せんとするや、幾多の迫害及び讒謗は自然にして簇生せり、中に就て最も廣く且長く其勢力を維持したる者は所謂スポールヂング譚(the Spalding Story)なりとす、スミスの少時ペンシルベニアア州のアミテ(Amity)地方にスポールヂング(Solomon Spalding)と名くる新敎牧師あり、

亞米利加土人に關する歴史小説を作り、題して Manuscript Story（古寫本譚）と云ふ、然るに此牧師貧にして自ら之を刊行する能はず、空く筐底に藏めおきて其身は早くも歿したり、而して其寫本は久しく紛失して影をも留めずなりぬ、是に於てか、ジョセフ、スミスが摩兒門經を飜譯し刊行するや、スミスの敵たる人々は（中には該教の墮落者ボルボルトも在りき）主張して曰く、スミスはスポールヂングの歴史小説を剽竊襲蹈せる而已、猶何の金販か有らんと、一犬虚を吠て萬犬實を傳へ、眞に喧々として噪箏を極めたり、而して識者の中にも之を信ぜる者多かり、ガニソン（Gunnison）の如く公

平を務めし徒も比々皆然り、否な今日に於も尚之を喋々しつゝある者鮮なからざるは奇怪千萬と謂ふべし

（註）昨年麼兒門宣敎師の横濱に來るや、一大恐慌は宗教界及び倫理界、否政治界までにも起りて、島田三郎氏の如きも例の長文を以て打擊を之に加へんと試みられたり、島田氏も亦該論文中に此スポールヂング譚を妄信して唯一の武器と認められたりしは遺憾の事と謂ふべし、吾人は其今少しup to dateたらんことを望まざるを得ず、

一千八百三十三年「麼兒門教の尙二葉にて在りし頃」ヘンリ、レーキ（H. Lake）と云ふ人宣誓して明言すらく「我は嘗てスポールヂングと組合て業をなせり（ス氏は牧師なりしに、レーキは之と組合て果して何を爲しや）、其間ス師は屢々自作小說の稿本を我に讀

きかせたるが、今麼兒門經を見るに及んで、其の該小說と暗合するの著きに吃驚せざるを得ず』と、又曰く『一千八百十二年ス師は其稿を携て出版旁たペンシルベニア州の都會ピッツボルグ(Pittsburg)へ往きしが、爾後寂として復音沙汰なし』と、

此證言に本て世人は推斷すらく、ス氏其稿本を活版屋に托し、リグドン(Rigdon とてモルモン經翻譯の際スミスの爲に執筆者となれりし者の一人)をして之が校訂の任に當らしめしなるべく、而してス氏間も無く死たりしかば、リグドンは之を携てスミスに到り合せしなるべしと、然れども調査の結果は此話をして虛妄な

る者とならしめ了りぬ、スポールヂングは其未刊の稿を懷いて一千八百十四年にピッボルグを去り、二年の後失意の有樣にて同州の南部に死し、其未亡人はニウヨルク州のオノンダガ郡に三年を費やせし後、再嫁してマサチユセツに移りけるが、其間に夫の小說稿本は紛失し畢れり、然るに此稿本紛失してありしかは、世人は復も說をなして曰く、ストールの許に在る間にスミス之を盜みたり(!!!)と(第六十及六十一頁を參照せよ)、

(註)今之を論法に照すに、曰く、スポールヂングは歷史小說を書けり、ジョセフ、スミスは一時彼と同州に住めり、故に(ergo)亞米利加の古史

を設けるスミス之を盗めるなりと、嗟是れ何たる亂暴の論理ぞや、果して其彼が之を盗まざりし證據は既に現はれ來れり、請ふ刮目して左の驚くべき發見を見よ、

固より慶兒門教徒は常に其寃なる事を辨じつゝありしと雖も、該小説の原稿の出で來らざるは少なからぬ不利益を彼等に與へてありき、然るに慶兒門經公刊の後大凡五十年の後、即ち一千八百八十四年を以て茲に一大警報は合衆國の東北隅より起り來りぬ、偶まオハイオ州オベルリン大學の總理フェアルチャイルド(President James H. Fairchild of Oberlin University) 氏非廢奴的運動に關する舊文書

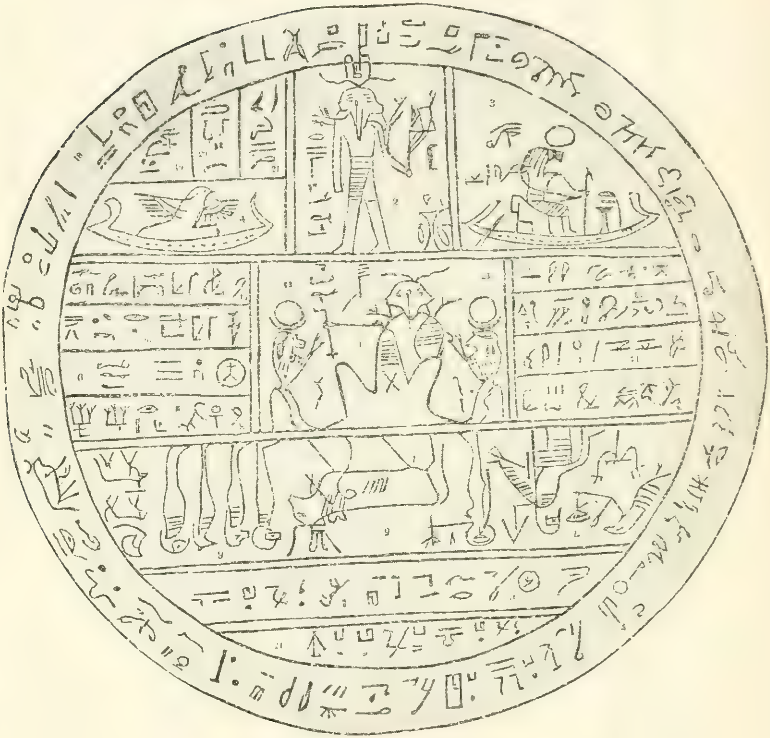
を博く索めんと欲して文友ライス氏(Hon. L. L. Riceとて近頃布哇ホノルル府滯在の高等官たりし者)の頃者購ひ得たりし反古紙堆裏を檢べけるに、嗚呼意外なる哉嗚呼奇妙なる哉、忽然として其の中より夫の——五十年來の尋物たる、然か久く幾多の誣妄の種たりし——歷史小說は端なくも顏を出だし來りぬ、是に於て乎該名にし負ふ公明兒は其翌年二月五日の新約克ヘラルド紙上に之が顚末を公けにし、遂に論斷すらく、『麼兒門經はスポールヂングの小說に起因せりとの臆說は蓋し抛棄せずんば有る可らず、ライス氏と余と其他の人々とにて之を精査したるに、此等兩者の間には毫も

其似たる所あるを見ず、要するに、慶兒門經の起原につきては、若し果して說明の必要なるあらば、他に之が說明を求めざる可らず』、

（註）其後一千八百九十五年、即ち今より僅五六年前に該總理が某氏（J. R. Hindley）に與へたる書翰中には實に左の明白なる文字あるを見る、云く、『拜啓本校の圖書館にはソロモン、スポールジングの精確なる原稿を藏し有之候、…………右の原稿は少なくとも二回既に刊行せられ候て、其はユタ州なる大鹽湖市のモルモン敎徒、他の一はアイオワ州なるジヨセフ宗徒（モルモン敎の一派）に御座候、ユタ州なるはホノルヽのライス氏より獲たる寫に本づき、ジヨセフ宗徒のは小生が與へたるに依れる者に候、要するに此原稿はモルモン經の原本には無之候、頓首、オベルリン大學總理フェアルチヤイルド』、嗚呼斯の如

く今は何人も自ら之を目睹し驗證するを得べし、何たる好發見ぞや、
此の發見は實に麼兒門教徒にとりて絕大の關係を有す、彼れ等が氣焰は斯の名詮自稱なる『發見寫本』Manuscript Found』と偕に大いに揚り來れり、反對論者も此點にては今や口を緘ぢざるを得じ、今にして猶該寫本を喋々するは時勢に後れたる無識の徒のみ、
但し論者或は更に問て言ん、ジヨセフ、スミスは然らば如何にして彼が如き改良埃及文字と彼が如き難解の國語を讀み得たりしや、答て曰く是れ即ち大疑問なり、是所謂『信者には德を建つるの具たり、不信者には蹟(つまづ)く碍石た

第十九圖



埃及象形文字及び神秘的畫文

(スミス譯アブラハム書の一節)

ゝる者とす」然れどもスミスが飜譯したる所の者は單に麼兒門經に止まらず、是と殆んど同時にスミスは純平たる埃及の象形文字をも解讀し(?)飜譯したり、時は恰も一千八百三十年の頃人ありて若干の蘆書(papyri)を埃及の墳塚裏より獲て携へ歸りしに、ジョセフ、スミス乃ち之を視て曰く、是れアブラハムが今より四千年前埃及に於て爲りし書なりと、頓てウリムトミム(四十八頁を見よ)を以て若くは神感を得て(?)之を英語に飜譯せり、第十九圖に掲げたる者は單に其原本の一斑のみ、且其諸文に至りては數字を配して一々に之を説明す、例へばIはコロブKolobとて

造化の首たる至高の天を描ける者、3は天帝の玉座にゐます者、6は地の四極を表する者と云ふが如し、之が全體の譯文は載て無價の眞珠（二十四頁を見よ）中に在り、否な、然のみならず、人々に眼中一丁字なしと言はれたりしスミスは希臘文の聖書を時に或は改譯せり（例ば無價の眞珠中に載たる馬太福音書の如き是也）否な剩へ§希百來文をすらも訂正せんと試みたり、是豈大膽極まる事にあらずや、昔しアウグスチン（Augustine）は基督を評して曰く、基督は、若し神ならずば、是れ善なる者に非ず（Christ, if he be not God, is not good, Christus, si non Deus, non bonus）と、ジヨセフ、スミスにつきて

も亦或は言ふべけん、スミスは若し天師に非ずば、是れ善なる者にあらず(Joseph Smith, if he be not a prophet, is not good)、

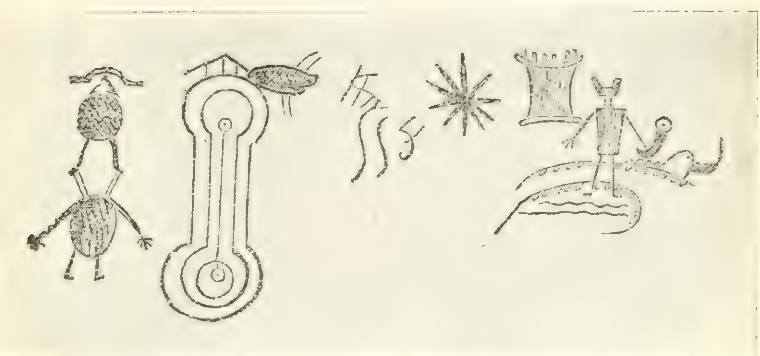
§(註) 創世記第一章第一節に元始天帝創造天地 In the beginning God created the heavens and the earth てふ文字あり、之を原書の希百來文にては Be-reisheeth bara Elohim eth ha-shamaim veth ha-aretz と書す、スミスは之を論じて曰く、此文は全く後世の校訂者が謬書し又は轉寫者が誤寫したる者なりとす、實は是れ「群神の首長群神を生ず」"The Head one [of the gods] brought forth the gods" と有るべき者なりと、是れ現在の希百來文を大いに改竄せんと試みたる者にして、大凡左の如き變更を見ずんばあらず、曰く Reisheeth bara elohim、按ずるに be-reisheeth の be は in の義なれば、之を削り去るや reisheeth (reshith) は其類中の首長を表する語となるや明らかにして、茲にては固より群神の首長

たる天帝を指す者となる可ければ例へば箴言一章七節に知識の首を reisheeth daath と云ひ、詩篇百十一篇十節に智慧の首を reisheet chachma と云ふが如く、是れ亦文法に適ふ者とて、斯くは the Head-one [of the gods] と飜譯したる也、而して又神 elohim と云ふ文字も定冠詞 ha (as ha-Elohim) を戴かざれば、之を天帝 God の義に取らず、群神 the gods の義に取るも決して無理なる者に非ず、若し眞に此の如しとせば、固より eth ha-shamaim eth ha-aretz は後人の誤つて附加したる者と認めざる可らず、姑く疑を存して後の識者を待つ、

右と同一轍にてスミスは又例へば創世記五章六なる It repented the Lord that を It repented *Noah* that と改めたるが如き、主禱文中なる Lead us not into temptation を Leave us not in temptation と直したるが如き是なり、

讀者諸君は以上の事實すらも既に多とせられんに、ジョセフ、スミス

第二十圖



は更に幾歩を進て亞米利加土人の畫文をすらも解讀せんと試ろみぬ、是よりしてスミスの補筆たりし人々の如き又は高等の教職等の如きも、時に或は其宗師の例に傚へり、第二十圖に揭げたるはユタ州に於る某處の巖上に刻まれたる土人の畫文にして其英譯は（某師の解讀に依れば）左の如くなりと云ふ、

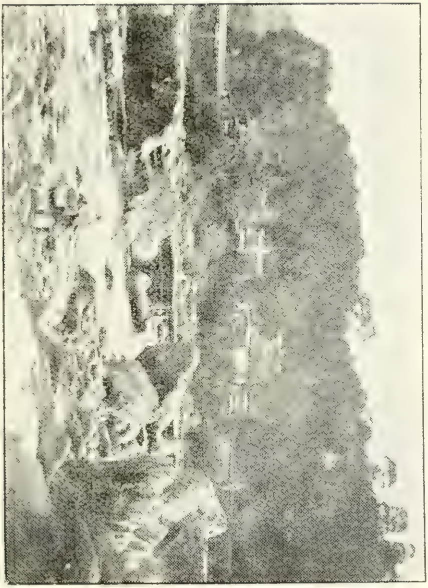
『ラマン族第二代の王、朕マハンテ山中の五谷裏に於て、エルサレム出發後第一千二百年目に、此記錄

を遺す、―― 朕は三子あり、麋鹿を獵て生活すべく南國へ往きぬ」、

此類固より枚擧に違あらざれども、只其一斑を示すを以て足れりと思ふ、

此外ジョセフ、スミスは種々に讒誣せられたり、曰く貪婪なり、曰く淫佚なり、曰く瞞着を以て本領とす、曰く愚夫愚婦を餌食にす、云く何、云く何と、殆んど底止する所を知らず、然れども今カーライルが言を以て之を言んに、不眞摯不誠實なる教説は古來能く世に行なはれざりき、又誰か不義者不德漢の爲めに甘んじて身命を致せし者あらんや、諺に曰く、友の爲に死すは易し、之が爲に死して遺憾な

きが如き友を獲るは難しと、慶兒門教徒が滔々相率ゐて其道の爲に死せんことを甘んじ、スミスの爲に身命財産を擲たんことを惜まざりしは抑も如何なる所以なる乎、余輩は之が説明に惑はざるを得ざる也、



耶馬溪の山水

第五章

教會成立――退去（エクソダス）

一千八百二十九年摩兒門經の翻譯既に成りて、同年八月印刷に着手し、一千八百三十年三月には公然刊行せられたり、初版五千部にして、其出版費實に三千弗なりしと云ふ、既に摩兒門經出版せられ了るや、茲に摩兒門教會は正式に組織せられ、ジョセフ、スミスは之が首長と成りぬ、但しスミスには誰如何にして其教會の首長たる權理を得せしめしや、曰く、ペテロ、ヤコブ、ヨハ子是なりと、彼等三人は一千八百二十九年の六月中スミスとカウドリ (Oliver

(Cowdery)とに顯はれて之を至高の聖教職、即所謂メルキゼデクの教職 the Priesthood of Melchizedek に任じたり、是より先、浸禮ヨハネ (John the Baptist) は已に彼等をアロンの教職、即ち普通の教職に任じてありき、是故にスミスは未だ何れの教會にも屬せず（三十、卅一頁を參照せよ）、又何れの教職（例ば天主教の法皇やカーヂナルや大司教の如き在職者を指す、勿論新教の教職は已に破門絕交せられたる者なれば、傳燈の權理なしと認定さる）よりも按手禮を受けざりしと雖も、昔し聖保羅が直ちに基督より使徒の印證を賜りし如く（三十八九頁を參看せよ）、スミスは直ちに斯く至高の教職たるべき權理を古代の聖衆より授けられたりと稱す、是亦固より門外漢が容易に首肯せ

ざる所なり、然れども基督若し眞に保羅に現はれたりとせば、ペテロ、ヨハ子等がスミスに現はれたりと云ふも、何ぞ非理ならんや、要する所虚實は只其顯現を蒙むれる人物の何如に存する而已、

偖斯く教會の組織せらるゝや、摩兒門教は旭日の昇るが如く日に月に駸々と隆盛に赴きけるが、（此間スミスは親らオハイヨ、カナダ等に布教し、使徒等は遠く英國に傳道し、それぞれ効果頗る大なりき）、其發源地たるミソリ州の人民は忽に激烈なる迫害を肇めつ、遂に火と劍とを以て之を州外へ逐へり、是に於て平該教徒は其隣州イリノイに移り、ミッシッシッピ河畔なる三面河流を環らせるコン

マルス(Commerce)てふ地に居を定め、之をナウヴー(Nauvoo希百來語にて美麗の義とす)と名けたり、始てスミスが玆に一片の地を購ひたるは實に一千八百三十九年の春にてありき、此地たる風光は美なれども、低濕にして人體に善からぬ者なりしが、僅々二三年間に眞箇の一大樂園とは成りぬ、ナウヴー(ノーヴーと發音す)は既に市と認められ、數萬の市民(信徒非信徒相合して)は四方より來往し、市長(新信徒ベンネト)、參事會員、市會議員(スミスも其一員に列す)撰擧せられ、六中隊より成れるナウヴー軍團組織せられ(スミス之が中將たりベンネト之が少將たり)、百事亨通の勢顯著なりき、然るに人間の榮達は天魔の忌む所にや、內憂外患忽然と

して叢起し、一方には少將ベンチトの叛てスミスを弑せんと計るあり、他方には再びミソリ州民の來り襲ふあり、會事多端幾ど寧日なからんとす、是より先きジヨセフ、スミスは一千八百三十九年遥々華盛頓府に到りて時の大統領に事情を具陳し、且國會へ保護の請願書を提出せしに、復も一千八百三十三四年の交に於る如く、俱に顧みられずして止みぬ、

(註) 一千八百三十三四年の交、該敎徒は其尙ミソリ州に居れる間、時の大統領ジヤクソンに合衆國兵の來りて己等を保護せんことを願ひ出けるに、其權能なしとの一言を以て排けられ了りしが、今又ヷン、

ビウレンはスミスに答て曰く「子が要求する所は正しと知る、然れども我は子が爲に何事をも爲す能はず、恐くはミソリ州の投票を失はん」と、此最後の數言は或は是れ大統領の心情をスミスが透讀したる者にてや有つらん、兎に角此の慨歎すべき出來事はスミスをして政治界にも亦奮起せしめたりき、請ふ左の一節を注視せよ

一千八百四十二年八月六日談偶まミソリ迫害の事に及ぶや、スミス慨然預言すらく、末日聖徒は今後尚幾多の艱難に遭遇して遂にロッキイ連山中に退去するに至らん、而して無數の辛酸流離の後末日聖徒は該山脈の間に雄大なる一人民と成らんと（果して是の如く成りぬ）否な、彼は一千八百

四十四年を以て實際西部に探檢者を派遣したりし也、天眼通か千里眼か抑(あるひ)は先見の明か、讀者の推斷に任せん而已、スミスの覺悟は寔に斯の如くなりしが、恰も此の時を以てミツソリ州の知事レーノルズ(Reynolds)は執念くもスミスを逃亡囚徒と妄稱して、之が引渡をイリノイ州の知事カーリン(Carlin)に要求したれば、スミスは遂に逮捕せられ、一時入獄の身となりしも、忽ち申開たちて復も青天白日の躰とは成りぬ、

否な、啻に自由を得たる而已ならず、スミスは頓て一千八百四十四年の春ナウヴー市より衆に推されて、合衆國大

統領の候補者として打て出たり、此時米國は奴隷問題の爲に痛く惱されてありき、スミスは乃ち其獨立なる主義綱領を公けにして國民に告たりしが、兵馬に關する大統領の權力を增さんとしたる如き、奴隷廢止の最良法案を提出したる如き、尤も時勢に適切なる者なりしと云ふ、

(註) 此時大統領の候補は他に五名ありき、曰はくカルハウン、カッス、ジョンソン、クレー、バンビウレン、是なり、スミスは此等に書を與へて之が政綱(殊に其モルモン敎徒に關する者)を問ひ、之に答へたるクレーとカルハウンの說には自ら詳評を加へたり、但し奴隷問題に就ては後人をして其卑見に舌を捲しむる如き意見を吐露したるぞ殊勝なりける、卽ちスミスは明言して曰く、奴隷の廢止は實行せざる可ら

ず、然れども廢奴論者が普通に唱る所の如きは是れ人權を侵害するや大ならんとす、南部の栽植家奚爲ぞ其既得の財産を妄に奪はるべけんや、合衆國政府は須らく官有地を賣却して奴隷所有者（即ち南部の所謂栽植家）に賠償するを要す、然らざれば必ず慘憺たる兄弟戰爭（内亂）を釀生せん而已と、夫の大思想家エマルソンは是より十一年の後公然とスミスの此平和的なる廢奴賠償論を自說として唱へ出せり、但しスミスは自ら其政見の行なはれざるを已に其十三年前に知りをれりと見ゆ、即ち一千八百三十二年に於て彼は既に後日南北の間に戰爭あらんことを預言すらく叛亂は必ず南カロライナ州に端緒を發せんと、果して一千八百六十一年四月十二日南カロライナ州に於て南兵サムタル砲臺を砲擊したるを手始めに該大戰爭——百

萬の兵士を殺し億兆の生靈を塗炭に陷しめし内亂――は開始せられたり、嗚呼スミスの此卓見此先知は果して是れ惡魔の所爲なりし乎、惡魔も斯の如くんば寧ろ所謂道德家宗敎家よりも倍して歡迎さるべき者ならざらんや、

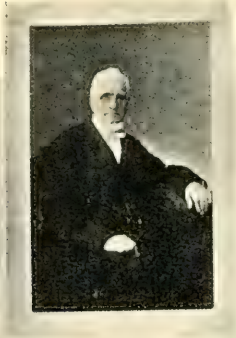
偖天下の形勢彼が如く、スミスの政見此の如くなりければ、自然の勢に任せばスミス或は大統領に當選せしやも知るべからずして、其勢力中々侮る可らざる者ありき、是に於て平ミソリ及イリノイ二州の人民は政治家も宗敎家も倶に均くジヨセフ、スミスを殺さんと計り、麼兒門敎徒を亡ぼさんと務め、種々の誣告に基づきて遂にスミス並に其二三の股肱を捕へ、頓て暴徒と民兵とは當時のイ

創立開基第一管長スミス





第三管長ウツドラフ



第三管長テーラル



第二管長ブリガム、ヤング



第四管長スノウ

リノイ州知事フヲルド(Ford)の默許を得て之を虐殺し了りぬ、虐殺の果して何如なる者なりしかは、請ふ之を本書第一章の記事に問へ、

ジョセフ、スミスの遺骸一千八百四十四年六月廿八日にナウヴー市に到着するや、一萬の市民集りて之を吊ひ、皆切齒扼腕す、使徒(アポスル)リチャルヅ及び大佐マーカム衆を和めて曰く、請ふ其報讐を法律に任せよ、法律若し之を爲さずんば、天の賞罰に任せよと、斯て或る使徒等が撰擧遊說地より歸るを待ちつ、仝年八月八日に十二使徒(アポスル)の長ブリガム、ヤング(Brigham Young)てふ大宗敎家兼大政治家は全會

一致にて麼兒門教會の管長に撰擧せらる、實に此のヤングはスミスの衣鉢を傳へたる天然自然の紹繼者にてありき、該教會に於ける建設の事業は悉く此人の靈腕に由りて成りぬ、

一千八百四十四年スミスの殺され了るや、暫く敵徒の嫉惡も滿足したればか、小康はナウヴーに來りぬ、市民の數は日を逐て殖ゆきぬ、是より先スミスが神意として建築に取り掛りてありし一大神殿の落成は夜を日に續ぎて歩を進めつゝありき、此殿堂は教祖の遺命として是非とも竣功せしむべくありし也、然るに其小康は實に是れ大

擧攻撃の準備なりしぞ情なき、一千八百四十五年一月イリノイス州の立法部は議決を以てナウヴー市の成立認可を取消し、同州の知事は仝年四月ヤングに書を與へ、其西部へ移住して樂境を他に求んことを勸告せり、是實にスミスの先見したる所にして（第百七十六頁を見よ）、亦ヤングが衆聖徒と共に覺悟してありし所とす、（第百九十三頁を見よ）但し一たび市權を取消さるゝや、例の暴徒は今こそとて犇々と押よせ來り、或は掠奪し或は放火し、迫害殘暴至らざる所なかりき、其財産の刧はれし者幾百萬弗、其家屋の燒かれし者二週日に炎々たり、而も麼兒門教徒は不義の充ち滿た

る天地復保護の倚賴すべき者なきを觀じ、基督の精神を體しつ、スミスの心を心としつ、毫も抗爭を爲ざりき、此際恰も夫の神殿(the temple)成るを告げしかば、一千八百四十五年の十二月より翌年の一月までに盛大なる獻堂式を行ひ、禮典を其中に執行し、祝福を其の壇上に宣授し、一同大滿足にて讃美の聲天地を振はしぬ(併し乍ら此輪煥たる神殿も數日の内に之を措きて去らねばならぬと思ふては又皆暗涙に咽ぶを禁ずる能はざりき、果して此美麗なる殿堂は所謂異邦人の劫掠破壞する所となりつ、今博物館內に其の斷片を留めて昔を忍ばしむる耳、噫、)、偖既に獻堂式を行ひ了るや、頓て其飾裝品を撤去し、一千八百四十六年二月四日を以てミッシッシッピ河を西に渡りし

ユタ州のアメリカ土人



田中猪太郎製版

第一回の退去隊を手始とし、續々踵を接してアイオワ州(Iowa)に打入り、殘忍無情なる§土人の領土に踏こみ、具さに辛酸を嘗め艱苦を味ひつ、遂に遠くロッキイ山脈中に於る無人の曠野に第三の故鄕を看出せり、

§(註)彼等がナウヴーより西の方ミッシッシッピ河を二月に舟にて渡り始めてより渡船は終歲間斷なく往來して聖徒を西に運びぬ、而して遂に嚴冬に及びてや彼等敢然氷上を蹈んで同河を渡り、遠くアイオワに入り、慓悍無比と稱する蠻族スウ人民[Sioux スウ又シウーと讀む]の間に進み、更にミスリ河を渡りては又ネブラスカ州のポタワトミ、ブンカオマハ、ポウニ等の土人間を通過し、ワイオミングとコロラドの間に於て夫の北米の最頂偉觀たる路機(ロッキー)山脈の綿々たる

峰巒中に突入し、彎尾蛇山を北に眺め、甘泉を前に渉り、ブリヂヤルの峠を越え、熊山熊河を跋渉し、時に或は拔海二千尺の高嶺に天下を小とし、時に或は崎嶇羊腸の險隘に九折の魂を驚かし、具さに逐謫の艱苦を嘗めつゝ、遂に米洲の大死海―大鹽湖―に其疲れたる脚を洗ひ、新世界のジョルダン河を挾み横る萬里の大平原に一大自由の郷國を發見せり、尚次章に說かん所を見よ、

此旅行中先發者は沿道の地理を調査し、里程を特記し、凡そ溫泉の涌く處、木材の茂る處、牧草の生る處、美景の存する處、奇觀の伏する處、一として後隨者の爲に採錄せられざるは無く、完全なる道中記は玆に自然と製作せられたり、之に加ふるに夫の有名なる天然の大數學者錚々たる使徒、オルッソン、プラット(Orson Platt)は一千哩間の經緯度を精細に記載したり、其用意の周到綿密なる至れり盡せり、バンクロフト

曰く、ナウヴーの退去は空前絶後なりと、是該大史家の如く單に其艱難の大なるにつきてのみ申すべきに非ず、亦是れ其用意の周到なるにつきても言ふを得べし、ブリガム、ヤングの偉大なる雄才躍如として玆に彰はるゝを見る、嗚呼盛んなる哉、

當時路機探検隊長たりしウッドラフ(Wilford Woodruff)の語簡にして盡せり、曰く『我等は弱者小者家具糧食を滿載せる無數の車輛を牛馬に引かせ、崎嶇たる山谷を跋み險隘を過ぎ、一千哩以上の路を遙かに往きつゝ我聖徒(摩兒門教徒)の爲に安宅を覓めたり、玆に二哩四方の市府を地取し、七哩外の山中より斬出せる材木と太陽に乾かせし練瓦

(adobes)とを以て城を築き、以て十ェーークル(二萬三千坪許)の地を圍繞せり其中三十四五丁は覆ふに木造の粗屋を以てし、外に又十ェークル程の穀圃菜園を作れり、是皆余輩が一箇月內に成したる所に係る』と、此最後に說き及ぼせる所は卽ち是れ路機(ロッキー)山脈中に地を卜して築造せる天下に名高きユタ市を指せる者とす、

彼等は倂し乍ら怨みたりしや、彼等は望を失ひたりしや、否な、彼等が退去の際の心持は其歌ひて過ぎゆける讚美歌中に明かに描き出されて見ゆ、亦是れ寔に初代に於る基督敎徒の精神にてありき、

某紳士の邸前



ブリガム、ヤング學校



ブリガム街





鷲門



鹽湖市最古の建屋

(註) 當時該教徒が歌ひ行きし讃美歌は應兒門聖詩集第四十七番に出たる者にして、其大意を義譯すれば、左の如し、

曰く、『(1)來れよ來れ、汝等聖徒よ、艱難も勞苦も怖れざれ、只喜んで汝等の路を進めよ、此旅路は困難と見ゆとても、恩惠は却て汝等が日の如けん、* * * * 皆善し、皆善し、(2)我等何ぞ哀くべけん、何ぞ其境界を苦しと思ふ可けん、然にあらず、皆宜し、若し戰鬪を避けなば、爭てか重き賞を獲らる可けん、* * * 皆善し、皆善し、(3)我等は神の定め給ひし地を遥かの西に看出さん、* * * 彼處にて音樂に天を振はさん、讃美を我が神我が王にさゝげん、殊にも此の辭を唱へまつらん、曰く皆善し、皆善し、(4)我等もし途中に死せば、嗚呼亦是何等の幸ぞよ、然らば艱難も憂苦も免かれ了り、義人と偕に天國に住ん、* * * * 皆善し、皆善し』、

1. Come, come, ye Saints, no toil, no labour fear,

    But with joy wend your way;

Though hard to you this journey may appear,

    Grace shall be as your day.

*   *   *

*   *   *

*   *   *

All is well, all is well.

2. Why should we mourn, or think our lot is hard?

    'Tis not so; all is right!

*   *   *

*   *   *

*   *   *

Our God will never us forsake;

And soon we'll have this tale to tell—

All is well, all is well.

嗚呼此精神を以て自ら處らば、天下之く處として豈可ならざる地あらんや、該敎徒がミソリ州に、イリノイ州に、ユタ州に繁榮亨通せしは、決して是れ偶然に非る也、固より彼等が成功は其社會組織の特殊なるに在れども（第九章を見よ）、此精神亦與りて大に力ある者とす、靑山隨地佳、豈必故園好、

第六章

自由郷—奇蹟—選民

七倒八起—全く是れ靈鳳然

麼兒門教徒は一千八百四十六年二月四日ミッシッシッピ河を西に渉りて以來、月を閲する十有七、路程を經る一千餘哩にして、先發隊（凡そ四千人）は一千八百四十七年七月二十一日に大鹽湖畔に到り着きぬ、而して同二十四日には管長以下隊伍整々として着湖に及びければ、ユタ建國の紀元節として年々歳々此日を大いに祝ふ事となれり、斯

て管長は再び遭難地に歸り、尚十有四回の月を重ねて陸續たる退去者を世話し、遂に復殘餘の使徒等と偕に殿し、續て殘衆も亦來り了ぬ、固より該教徒は我に無情刻薄なりし合衆國外に自由郷を看出んと試みたるなりき、而して今のヲバダ、ユタ等の山地はカリフヲルニア、アリゾナ等の地と均しく名義上は當時墨色哥（メキシコ）國に屬してあり、實際は殆んど無所屬の如き有樣にてありし也、ヤングは既に衆聖徒を大抵登程せしめ了りて後、一千八百四十八年五月十四日ミスリ河上に於る教務廳を引あげて征途に上らんとするや、衆を祝福し、且預言して曰く、『末日、聖徒、は

永く路機(ロッキー)山裏に住居して復た驅逐せられじ』と、固より是は信仰眼を以て洞見したる所にはあれど、政治眼若くは軍事眼を以て之を視るも、其天險は自然の要害にして眞に是れ一夫途に當れば萬夫も進む能はざる者と謂つべし、

（註）該教徒は今云ふ鹽湖市(ソールトレーキ)を元はデゼレット Deseret と名けたり、デゼレットとは摩兒門經中に出たる文字にて「蜜蜂」の義なりと云ふ、蓋し聖書に所謂「乳と蜜の流るゝ約束の地」に取れる者とす、後ち聯邦政府にて强て之にソールトレーキ市てふ名を命じ、以てデゼレットの稱呼を廢せり、今は只異名として存する而已、例へば該教の機關新聞をデゼレット、ニウズと呼ぶが如し、勿論此外にも著名の市府ユタに少なか

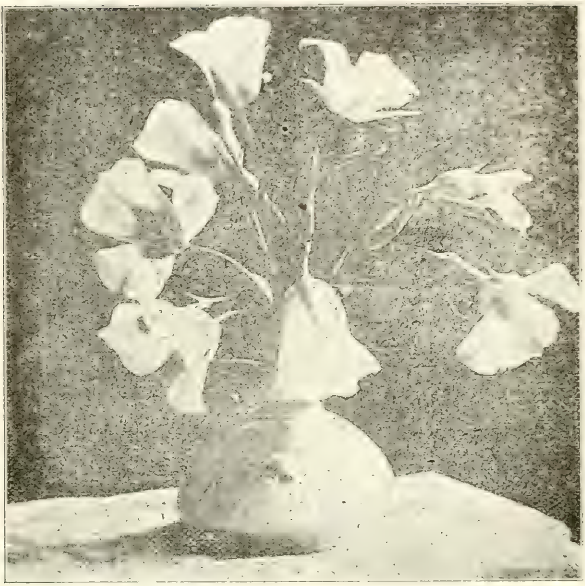
らず、オグデン、マンチ、バロアン等枚擧に暇あらず、
然し乍ら玆に又意外の變は忽然として麼兒門教徒の前途に生じ來りぬ、是より先き合衆國と墨色哥とは葛藤を生じてありければ、我が嘉永の大賓ペリ提督(Commodore Perry)は一分艦隊を率ゐてヴエラ、クルス(墨色哥)を砲撃し、陸軍指令官スコット將軍と協同し以て遂に該國をして城下の誓をなさしめたり、其結果として一千八百四十八年二月二日グワダルペ、イダルゴ(Guadalupe Hidalgo)の媾和條約にて墨國は北緯三十二度より四十二度に至るの土地を左は海まで右はコロラド及び新墨色哥まで合衆國

へ割讓する事となりたり、故を以て管長ヤングがミスリ河上より殿として尙タへの途上に在りける間に、嗚呼天なる哉、自由鄕たるべき准無所屬の曠原は早くも既に合衆國の有となり了りぬ、其の失望果して何如なりしぞや、亦是れ乍併天道の好配劑なる歟、但し『皆宜し皆善し』All is right, All is well を覺悟とせる麼兒門教徒は雙手を擧て之を歡迎せり（第七章を見よ）、

偖該教徒は兎に角其自由鄕に入りぬれども、食物の缺乏は日に月に加はり來りぬ、是非なくも屋蓋に張れる牛皮を割き來りて煮食し、山上に草根を掘採して飢餓を防げ

第二十圖

ユタの州花



セゴリリの圖

り、其草根は山芋自然薯には非ず、一種のクズめける者にて、其花は美しく其味は淡く、名けてセゴ、リリ the Sego lily と稱す、此の草根は彼等が生命

の親たればとて、之が花を以てユタ州の徽章State Flowerとは爲したり、恰も我國が菊を用ひ、コロラドがオダマキを用ひ、英國が薔薇を用ひ、蘇國が茨を用ふる如くして、其意味は特に慘憺たる者あるを見る也、

麼兒門教徒は大鹽湖市に到着するや、五箇月内に廣大なる土地を耕やして馬鈴薯を植ゑ、灌漑の便を設けて各般の種子を蒔きつけしに、菜蔬禾穀蔚然として茁生せしかば、聖徒の愁眉將に漸く開けんとせる折柄、嗚呼情ない哉、周圍(まはり)の山腹より幾億萬の蝗(いなご)忽然として群がり降り、恰も餓虎の餌を貪るが如く、嫩緑を襲ふて之を食ひ、其幾縱隊

となりて滔々と前進するや、大軍の境を壓して來るが如く、蔞々蒼々たる折角の園圃も倏忽の間に一面の荒野と化せんとす、到底溝火や掃箒の能く防遏し得る所にあらず、衆庶額を蹙めて長太息し、一同聲を揚て天帝に哀訴するや、嗚呼叉奇なる哉妙なる哉、非常の災は天帝之を防ぐに非常の手段を以てし給ふにや、突然として意外の救は塞に意外の邊より顯れ來りぬ、一朝鹽湖の方面に颯としで風起るや、幾千の鳥群翩翻として飛び來りつゝ、幾尺の雪と見るまでに遍く地上を覆へる蝗蝠の上に悠然として舞ひ下り、宛然ヴヰルザルが所謂ハーピー〔貪食鷲〕の如く

且捕り且食ふ、其幾萬なるを知らず、殊に斯鳥の絶奇たるや一たび飽まで喫ひて腹に滿るや、去て之を其肚裏より吐き出し、再び來りて之を啄むこと、恰も天然の鵜飼の如く、又古代の羅馬紳士の如くなりければ、其一日に幾回啄食するを知らず、而して晩景に垂んとするや皓翼を鼓して飄然北天に飛び去りぬ、斯の如きこと數日にして蝗蟲幾んど跡を絶てり、此神禽は是れ大鹽湖中の島嶼に群棲せる鷗屬にてありき、今や此水鳥は、恰も鵜鳥が、羅馬のカピトル宮に於る如く、麼兒門教徒に神聖なる靈禽となれり、而して此奇蹟たるや全く聖書の中に於る預言の應驗

したる者と信ぜらる、

(註) 歴兒門教徒は信ずらく、此奇絶妙絶なる出來事は全く約耳(ヨエル)と云ふ預言者が今より大凡三千年前に於てユダ國に宣説せし所の者に係ると、其預言に曰く(約耳書第二章)、

『1汝らシオンにて喇叭を吹け我聖山にて音たかく之を吹鳴せ國の民みな
慄ひわなゝかんそはエホバの日きたらんとすればなりすでに近づけり
2この日は黑くをぐらき日雲むらがるをぐらき日にして東雲の山々にた
なびくが如し數おほく勢さかんなる民むれいたらん斯かる者はいにし
へよりありしこと無くのちの代々の年にもあることなかるべし 3火彼
らの前を焚き火焔かれらの後に燃ゆ其の過ざる前は地エデンのごとく
其過しのちは荒はてたる野の如し此をのがれうるもの一としてあるを
なし 4彼らの狀は馬のかたちのごとく其馳ありくことは軍馬のごとし
5その山の嶺にとびをどる音は車の轟くがごとしまた火の稗株をやくお

との如くしてその樣强き民の行伍をたてゝ戰陣にのぞむに似たり 6そ
のむかふところ諸民戰慄き其の面みな色を失ふ 7彼れは勇士のごとく
に趨あるき軍人のごとくに石垣に攀のぼる彼ら各々おのが道を進めゆ
きてその列を亂さず 8彼ら互に推あはず各々その道にしたがひて進み
行く彼らは劍に觸るとも身を害はず 9彼らは邑をかけめぐり石垣の上
に奔り家に攀登り盜賊のごとくに窓より入る 10そのむかふところ地ゆ
るぎ天震ひ日も月も暗くなり星その光明を失ふ 11エホバその軍勢の前
にて聲をあげたまふ其軍旅はなはだ大なればなり其言を爲とぐる者は
强しエホバの日は大にして甚だ畏るべき故に誰かこれに耐ることを得
んや 12然どエホバ言たまふ今にても汝ら斷食と哭泣と悲哀とをなし心
をつくして我に歸れ 13汝ら衣を裂ずして心を裂き汝等の神エホバに歸
るべし彼は恩惠あり憐憫あり且つ怒ることゆるく愛憐大にして災害を
なすを悔たまふなり 14誰か彼のあるひは立歸り悔て祝福をその後にと
めのこし汝らをして素祭と灌祭をなんぢらの神エホバにさゝげしめた

まはじと知んや 15汝らシオンにて喇叭を吹きならし斷食を定め公會をよびつどへ 16民を集めその會を潔くし老たる人をあつめ孩童と乳哺子を集め新郞をその室より呼いだし新婦をその密室より呼いだせ 17而してエホバに事ふる祭司等は廊と祭壇の間にて泣て言へエホバよ汝の民を赦したまへ汝の產業を恥辱しめらるゝに任せ之を異邦人に治めさする勿れ何ぞ異邦人をして彼らの神は何處にあると言しむべけんや 18然せばエホバ己の地のために熱心を起しその民を憐みたまはん 19エホバ應へてその民に言ひたまはん視よ我穀物とあたらしき酒と油を汝におくる汝ら之に飽ん、我なんぢらをして重ねて異邦人の中に恥辱を蒙らしめじ 20我北よりきたる軍を遠く汝らより離れしめ濕潤ほひなき荒地に逐やらん其前軍を東の海にその後軍を西の海に入んその臭味立ちその惡臭騰らん是大なる事を爲したるに因る」

此預言「若果して預言なりしとせば」眞にモルモン敎徒に當るべき者なるや否やは姑く措き、渠等は斯く己れ等の遭遇を悉く聖書の預言

に徴するを好む也、否な彼徒は自家の主張を盡く聖書(新舊兩約書)に淵源せしむ、本邦派遣長老ケルシ氏著實用參照(A Practical Reference by Elder Louis A. Kelsch)を參看せよ、

按ずるに、彼等をして斯かる確信を懷かしむるは固より偶然の事にあらず、彼等がナウヴー市より逐れて一千哩の路程に一百日間各々其身を牛車又は馬車に托するや、途上往々鶉群の車間に落ち來るありて、大に體力の營養に資したりと云ふ、是即ち舊約書出埃及記(十六章十三節)及民數紀略(十一章三十一二節)に見えたる所と符節を合す、又彼等がナウヴーより退去したるはイスラエル人が

埃及より出で來れると同じくして、倶にエクソダスExodusなり、ユタは即ち靈性上に於る亞米利加の迦南(Canaan)にして、地理また眞にパレスタインに符合す、例へばパレスタイン(基督の生れたる猶太國)に大湖「死海」Dead Seaてふ者あれば、ユタには大鹽湖(Great Salt Lake)あり、パレスタインにテベリオ湖(Sea of Tiberias)あれば、ユタにはユタ湖といふ小湖あり、此等大小二湖を相聯ぬるヨルダン河(River Jordan)彼にあれば、此にも亦ジョルダン河(Jordan River)ありて右の二湖間を奔流す、斯の如くオグデン市はベツレヘムに、ソールト、レーキ市はエルサレムに、プロヴヲ市は

テベリアに、ニーボ山はヘルモン山に、それぞれ相應ず、奇と謂ふべし、

偖既に百事此の如くなるが故に、彼等は古へのイスラエル人民の如く亦自ら選民(Chosen People, the Elect of the Lord)と稱す、少なくとも或る意味に於ては其主張の虚妄ならざるを認めずんば有る可らず、

(註) 彼等は又ジョセフ、スミス、ブリガム、ヤング、各使徒等の吐露せる幾多の先識預言を以て其道の證と爲す、例へば上に掲げたるスミスの語(廢奴問題及びユタ移住に關する者)及びヤングの見(ユタよりは最早逐はれずとの斷言)の如き是なり、此の種の預言枚擧に暇あらず

[ロバルツ氏著「天帝の新見證者」New Witness for God 第二十章――二十

三章を見よ」

之を要するに、麼兒門敎徒は徹頭徹尾基督敎の聖經を基礎として、更に幾歩を其上に進め、基督敎の開發を以て自ら任ずる者とす、故に夫の新敎牧師たる有名の大雄辯家ヘンリ、ビーチャルは斷言して曰く、基督敎徒に於ては麼兒門敎徒を辯駁し去ること到底能はじ、如何となれば彼等は最も綿密に聖書を信奉し實踐する者なれば也と、是故に新舊敎徒中續々麼兒門敎に轉ずる者あり、其中監督敎會員にして一千八百九十六年七八月鹽湖市に遊び、感じて麼兒門敎徒と化し、去て一書を著はし以て其轉敎改

宗の理由を明らかにしたる者あり題して"My Reasons for Leaving the Church of England and Joining the Church of Latter Day Saints"（我が英國教會を去りて末日聖徒の教會に入れる理由）と云ふ然りビーチャルの彼の語と云ひ舊監督會員の此說と云ひ倶に麼兒門教徒が最も正統的基督教の産兒なることを證明すと謂はざる可らず之を要するに基督教の聖書を以て正確なる者とせば麼兒門教を排闢するは徒勞に屬す後者は即はち前者の正統的開發なればなり、

（註）前述監督敎會員の脫會理由書は重に基督敎會內に於る敎義宗

規に關し、聖職員の多少及び存廢、バプテスマの解釋等に關す然れども是の如きは純平たる宗教問題なれば、玆には詳說せじ、

第七章

亂臣か忠臣か

英國にては自由黨は徃々保守黨を詈りて宦官と曰ひ、保守黨は屢々自由黨を誇りて共和黨と曰へり、是れ敵黨を中傷する最良の悪手段なり、殊に共和黨と云はるゝに至りては、立君國にては殆んど亂臣たる嫌あるを免かれず、隨つて又此種の讒誣は最鋭の利器にして、其効力の極めて大なるを見ん、東洋にては纔かに『共和』の二字を引用したればとて大臣の椅子を奪はれし者さへあるに非ず

や、世間にて尤も憎むべき者は叢の爲に雀を獵る徒なり、人生最も怖るべき者は專賣の忠孝屋なり、嗚呼『說難』の著者たる韓非も遂に言說の犧牲たるを免かれざりしぞ是非も無き、

ジョセフ、スミスも其の弟子たる麼兒門教徒も幾度か此手にて窘められき、曰く彼等は逆臣亂民なり、曰く、土人と相結んで共和政府を顚覆せんとする謀叛人なり、曰く天險を恃みて獨立を計る者なりと、反對家の卑劣も玆に至りて極まれり、然れども彼等は決して政治界に叛徒たらんと欲せしに非ず、唯宗教界に革新家たらんと期せる而

已、俚語にも論より證據と申せば、何ぞ之を形迹に徵せざるや、何ぞ之を事實に稽へざるや、

一千八百四十六年摩兒門教徒逐はれてナウヴー市を退去し、今方にアイオワの曠野に殘忍なる土人の間を通過せんとしつゝある矢先きに、霹靂一聲、合衆國政府は墨色哥（メキシコ）戰爭に使用すべき兵士にとて五百餘名の壯丁を此の困頓極まれるモルモン教徒間に徵發せり、嗟吁政府何の顏ありて此の無情なる事をなせしぞ、該教徒が差出せし再三再四の保護請願を度外に措き乍ら、今俄に开が最必要なる壯丁五百を奪ひ去らんとは、嗟大逆無道も茲に

至りてや殆ど名狀するに言葉なからんとす、剩へ元老議員ベントン(Benton)の如きは恐喝して曰く、彼等若し此徵發に應ぜずんば、不忠の叛民として之を全滅せしむべしと、然れども『皆善し皆宜し』を主義とせる摩兒門敎徒は、復も甘んじて服從せり、一千八百四十六年七月ブリガム、ヤングは乃ち直ちに此の要求に應ぜんことを約し、己れには百方不自由を來たし乍らも、己が今後の征途を痛く危險ならしめつゝも、愛國の爲めなればとて、五百四十九名の壯夫を選出し、大に其行を壯んにして之を送り遣りぬ、而て彼等兵士は二千哩の曠野を跋涉し、一千八百四十

七年一月二十九日カリフヲルニアに到り着けり、嗚呼文明を誇れる十九世紀の中頃にも斯の如き蠻行の公然なされんとは、アキレたる世の中なる哉、然るに論者は尚強辯して、曰く、是れ合衆國政府が麼児門教徒を憫れみて、其幾分をなりとも官費にて西征せしめやらんとの好意より出でたる者なりしと!!!噫、

勿論末日聖徒は屢々暴民と戰ひたり、啻に戰ひし而已ならず、勝てり、然し乍ら政府の保護なき以上は自ら武装して暴徒を防がざる可らず、正當防禦は神聖なり、ミヅリ(ミスリ)州にて暴民に迫害せらるゝや、教徒中の壯士捍禦隊

を組織し、自ら名けてダナイト隊(Danite band)と號す、其威力一時四隣を震駭せんとせり、又スミスの死後ナウヴー府の攻撃せらるゝや、寡勢を以て善く戰ひ、遂に三日間籠城を全うせり、否な彼等は聯邦政府の軍隊をしてすらも一步も其疆域に踐入ること能はざらしめき、

是より先き、ユタが合衆國の領地となるや、聯邦政府は麼兒門教徒の望に任してブリガム、ヤングを知事に任じ、聯邦判事として高等法官を差遣してありしが、其中モルモン教の墮落者スタイルズ(Stiles)及び博徒ドランモンドの兩人が聯邦判事となれるや(前者は一千八百五十四年後者は一千八百五十五年)、

其私行の悪きと公行の邪まなるとよりして非常の不人望を買ひ、前者は逃奔し、後者は辭職し、倶に摩兒門教徒叛を謀ると大統領ビユカナン(Buchanan)に訴へたり、是に於て大統領は先づヤングの職を褫ぎてカンミング(Cumming)てふ者をユタの知事に代任し、新知事の護衛を名として二千五百名の精兵を差むけ、折善くば鏖殺も試みかねまじき勢を示しぬ、時恰も一千八百五十七年七月二十四日摩兒門教徒其第十週祭を盛に執行しつゝある最中に東邊より馳つけたる三名の聖徒息もつきあへず報じて曰く、聯邦政府の追討軍押寄せ來つたりと、ヤングは此

注進に接するや、晩天に衆を集へて此の凶報を傳へ且其決心を示して曰く、『我等は未だ嘗て叛を企てざりし、又今後も叛を企る意絶て無し、然れども此民を亡ぼさんとて來る者あるに於ては幸ひに天帝の佑助を獲て斷然之を擊退せん而已』と、頓て再び其祝祭は續けやられたり、斯て其翌日よりは、直に二千五百の兵勇を徵集する事に着手し、先づ一方に於ては險隘を固めて一兵をだも疆域內に入らしめず、他方に於ては陳情使を送りて大統領に其寃を訴へんと計りぬ、既に斯の如くなりければ、二千五百の精兵は荏苒日をわたりて嚴冬酷寒の候に及び、殆ど

無人の曠野に露營の辛酸を嘗め、凍傷餓死頻々として續發し、一人として復た進み鬪ふの勇ある無し、是に於て大統領は新知事をして護衛兵を棄てゝ入府せしめ、又ヤングー及び麼兒門敎徒の『罪』を悉く赦免して、纔かに其兵をソールトレーキ市に入駐せしめ得たるぞ笑止なる、況や新知事の調査に出て毫も叛逆の元かりし事判然したるに於をや、ビユカナンの不明實に笑ふに堪へたりと謂ふべし、

前にも言し如く已等を見殺しにせる合衆國内に住んとは本意ならざりしかども、已にユタが合衆國の領地とな

り了るや、彼等は甘んじて亞米利加共和國の民たらんとせり、即ち誰も他より要めざるに彼等は第三週祭の節盛大なる儀式を以て合衆國憲法奉戴式を擧行したり、之を要するに彼等は謀叛人には非ざりし也、否な却て是れ去就の分を知れる大丈夫と稱すべき耳、然り、ジョゼフ、スミスの生時に宣布せられたる『教義（ドクトリン）及契約（カビナンツ）』と名る經書中（第百三十四編）既に政府と其法律とにつきては奉戴遵行の義務あることを悉く人民に說示せるありて存す、是亦實に聖パウロが羅馬書中第十三章に諭せる所に外ならずとす、眞正の基督教徒は國家の忠民なり、眞正の麼兒門教徒も

亦豈國家の忠民たらざらんや、

(註)間說、大統領ビユカナンは奴隷存置主義なりしかば、南北戰端を開かん曉に用ふべく故らに口を藉て此精兵をユタ邊に蓄へおける也と、开は兎まれ角まれ、彼等は遂に其銃砲兵器を悉く鹽湖市に棄賣して去りぬ故を以て今まで一ポンド一圓の高價なりし鐵釘は俄かに开が三四分の一に下落して、人々十分に釘を用ふるを得るに至りぬ、是即ち人を殺す武器を壞りて家を造る要具となせし也、夫の戰亂の爲にユタは一千五百萬弗を失ひたれども、禍を轉じて福となす天の配劑も亦妙なる哉、而して此好結果は是亦既に聖徒の一人に預言せられてありしとは嗚呼奇なる哉、モルモン教の歷史は「奇」の一字を以て之を貫くと謂ふべし、

第八章

一夫多妻

一夫多妻は麼兒門教の特色として天下に知られたる所なれども、其實は決して是れ麼兒門教に限れる者にあらず、佛教の如きも到る處に於て一夫多妻を――否な一夫多妾をすらも――許容し來りぬ、夫斯の如く印度は一夫多妻國なり、西藏は一妻多夫國なり、支那は一夫多妾國なり、日本は一夫多妾國なるに非ずや、

（註）近頃我國に來遊せる錫蘭（セイロン）紳士ダンマ、バラ氏の如きも麼兒門教を評するに當りて其一夫多妻主義を大に贊成し、遂に極言して

曰く、日本の法律もし一夫多妻を許さずんば、其實に於て大差なき一夫多妾てふ名義を以て之を行らんも亦可なるべしと、印度人佛教人の語としては然もありなんと思はる、氏は又麼見門教徒が一箇人として甚だ敬愛すべき者なることを明言せりと云ふ、亦是れ好證言と謂ふべし、

之を要するは、夫妻問題は、社會上より見るも哲學上より見るも、倶に是れ天下の一最大難問題と謂はざる可らず、堯舜は天下の大聖なり、然るも尚ほ前者は其二女を潙汭に降して舜に妻はし、後者は之を併せ娶りて毫も其愧づべきを思はず、ソクラテスは世界の大哲なり、啻に身みづ

から一夫多妻を實行せし而已ならず、又其弟子プラトの傑作と稱するレパブリカ(理想の國家)中には男女の自由婚媾(free love)を公然と主張したり、曰く『男は二十五歳より五十五歳まで、女は二十歳より四十歳までは、最も壯んなる齡なるが故に、此間は國家の爲に子女を產む義務あるる者として彼此無差別に自由に日常婚媾を爲して可なり』と、此說もしソクラテスの見ならずとせば、是れ大哲學者プラトの理想ならん耳、彼が國民(亞典士人民)は法律を以て二妻を一夫に許したり、羅馬人は表面一妻を法としたれども、中等以上は實際多妻多妾なりし而已ならず、シ

ーザルの如きは萬婦の夫(husband of all women)と稱せられたり、昔の日耳曼人民は一夫一婦を習慣としたれども、酋長輩は名譽の記號として多妻を有せり、實に是また東洋の風俗にてありき、王侯は最も德高く力大なるが故に、古來之に允すに多妃多嬪を以てし、其力德愈よ大なるに循ひて其妻妾の數を愈よ多くしたり、斯の如く亞拉毘亞の教祖マホメットは、從來の一夫多妻を禁遏せずして制限し、各信徒に四妻を許し、有權者聖職員には其品等に循ひて六名八名十名二十名の妻女を許せり、而して回回教(マホメット教の別名)の父たる猶太教に至りては固より(太古に行はれたる諸他の宗教に

於けるが如く)一夫多妻を公然と是認したり、否な基督教と雖も印度等の多妻國に在ては、一時此の風俗を默許す、縱しや默許せずとも、少くとも之を不問に措く也、

茲に眼を轉じて麼兒門教を視るに、古代の王侯牧伯が衆多の妻妾を妄りに納れたりとて非難攻撃したる文字は麼兒門經中に見ゆと雖も、又『教義及契約』(二十四頁を見よ)中に一人に一妻云々の句も出でたりと雖も、ナウヴーに移りて以來一夫多妻の傾向は漸々に顯はれ來りつ、遂に一千八百四十三年七月十二日天の特啓としてスミスは結婚の永遠なるべき事及び一夫多妻の許すべき事を公表せ

り、其天啓たるや簡短なりと雖も明瞭なり、曰く「神曰く」我が言に循て嫁娶したる夫婦は未來永遠に繼續す、曰く我が言に依らずして縦に結婚したる夫婦は一世のみ、曰く凡そ幾人にても正式に妻と成たる初婚婦人は皆其一人の夫と永遠に夫妻の關係を有す、皆一人の夫に助けられて未來の榮光裏に入るべく、相携て愈よ榮光より榮光に進むべし、曰く斯の如き男女は益す相進て神となる者なれども、天使(エンジェルと稱する者)は我が言に循はざりし、結果、終古孤居獨棲すべくして神とは成らず、惟神使たる而已、云々

一夫多妻――、今は世人に麼兒門の麼兒門たる最大特色

と誤解せられをる一夫多妻制は、之れを宗敎上より見來るや其の原理大凡是の如しと雖も、社會上より稽へ來れば、更に幾多の理由ありて存す、而して其一理由たるや、ソクラテスの婦人共有論、自由婚媾說と粗同日の論なるが如し、只スミスは其上に尙幾歩を進めたる處有る而巳、

(註) 一夫多妻の敎理は斯く特殊の天啓に基く者にして、其天啓と稱する者は載て敎義及契約第百三十二篇、及び無價の眞珠〔二十四頁參觀〕に在りと雖も、之が社會學上の原理は使從パーレー、プラット氏の神學秘鍵 (Key to the Science of Theology)、並に且殊に結婚哲學〔倶に本書第二十四五頁に論及せる者〕中に詳かなり、曰く聖種播殖、曰く人種改良、曰く風敎釐革、是其重なる要目なり、是故に或人の如きは

スミスが之を社會學上の問題として主張せざりしを遺憾とす、思へらく若し然かせしならば世人の反對も割合に少なかるべくして、學者の之を視るや、ソクラテスの婦女共有的學説を視るが如くなりけんと、但し其實麼児門教徒が迫害せられしは、是れ僻見と先入と讒誣と誤解とより來れる者にして、一多夫妻は後日の口實に過ぎざりし也、視よ最も劇きミヅリ迫害なる者は皆悉く一千八百三十九年迄に起りぬ、然し乍らユタに移てよりは無論聯邦政府の攻擊迫害は一夫多妻の點に集中し來れり、數年前ユタが獨立の邦家（sovereign state）となりて聯邦の一に加はれるや、夫の有名なる著述家ロバルツ氏［New Witness for God; Missouri Persecution; Rise and Fall of Nauvoo 等の著者 B. H. Roberts］撰ばれて國會へ出しに、多數の議員はロ氏が一夫多妻の人たりしを言ひ立てゝ之を排斥せり、時に匿

名の一婦人あり、書をロ氏に寄せて曰く、某日某處に於て現任議員の最大多數が却て隱然たる蓄妾家狎妓家たる事實を擧示し以て君が爲に聊か寃枉を伸べんと、ロ氏深く其原意をば心謝したれども、肯て此義俠なる婦人と會合せざりき、惟曰く『彼等が敗德汚行家たることは殆ど公然の秘密なり、何ぞ之を故らに指摘するを要せんや、我は只天帝の審判に待つゝある而已と、眞に君子の言と謂ふべし、因に云ふ、我が東京にも近頃之と均き美談あり、諸宣教師がグラント師を包圍攻擊しつゝあるや、往々外人中密に來てグラント師に宣教師の中幕てふ者を告んとせるに、グ師はいつも之に耳を貸さずして曰く、我は我が道を弘めんとて來れる耳、宣教師輩が醜行を聽きに來るに非ずと、グ氏も亦高德の士なる哉、

按ずるにスミスが一夫多妻を許せしは(其の天啓なると否とは姑

く描き)亦是れ或る意味にては、親鸞聖人が肉食妻帶を公許せると一般ならずとせんや、親鸞若し見眞大師たらば、スミスも確かに大聖と謂はざる可らず、今や西洋にても凡そ資力ある者は妾を蓄へざるは無し、彼等は之を妾(コンキユバイン)と謂はず、情人と謂ふのみ、而て此一種のカコヒモノなるや固より内密に之を蓄養する耳、天下滔々相率ゐて僞善の徒たらざるはあらず、スミスの慧眼靈心なる夙に此邊の消息を解し、萬人をして悉く正人君子たらしめんことを計れり、我輩は前にスミスを日蓮に比せしが、今や之を親鸞に比す、其實スミスは或る意味にては全く日蓮にして親鸞を兼たる者とす、是即ち公然と正々堂々たる俯仰天地に愧るなきの行動をなさしめんと務めし者に非ずして何ぞや、其好結果にや、否な必ず其好結果として、ユタ州には操を賣り淫を鬻ぐ女子婦人一も有ること無し、他州の青年

大塩湖上の水浴場



塩湖市に遊ぶや孰れも此點に失望して逃げ還らざるは無しと云ふ、既に嫖客遊冶郎なし、猶何の私窩淫窟あらんや、但し斯く申せばとて決して彼等麼兒門教徒は昔の淸敎徒(ピユリタンズ)の如く己を持する薄刻にして一切の遊戲諸般の快樂を排斥する者に非ず、劇場は宏壯にして幾千の座席に觀客充滿す、舞蹈場は悉率(さらさら)として絹裙飛踊する恰も天女の舞くだれるかと怪しまる、「本書挿入の海水浴場圖を叅看せよ」其狀殆ど人をしてバイロンの句を叫ばしめんとす(Childe Harold, C. III. S. 22.)

"On with the dance! let joy be unconfind;
No sleep till morn, when Youth and Pleasure meet
To chase the glowing Hours with flying feet."

然りと雖も彼等は又決して放肆淫佚なる徒輩に非ず、敎職長老等は

申すに及ばず、一切の良麼兒門(モルモン)(末日聖徒)は、酒を嗜ざるは勿論、煙草をも喫せず、剰へ咖啡茶等をすらも愼んで用ひず、其自ら守るの嚴なる眞に驚くに堪たり、甚きに至りては聖餐式に於てすらも葡萄酒の代りに水を用ふ、決して彼等は論者が喋々する如き肉慾の奴隷に非ざる也、然るに敎敵も政敵も思へらく麼兒門敎徒は女子を壓制して己が淫樂の具に供するなれば、婦人に撰擧權を與へたらば一夫多妻の風頓に廢たらんと、麼兒門敎徒は乃ち此說を容れて毫も恐れず、一千八百七十一年を以てユタの立法部は普通撰擧權を國中の妻人に與へたり、然るに其結果は意外にして、殆ど一人だも一夫多妻を醜陋とする者なかりしかば、今や却つて此の一旦婦人に與へたる選擧權を褫がんと工夫しつゝあり、嗚呼論者の手段も亦窮したる哉、

嘗て四五十年前麼兒門教徒を蛇蝎視して百方暴力を用ひて他州へ驅逐せしミゾリ州に刊行せらるゝ『州報』てふ新聞紙上にてすらも一千八百七十七年九月十四日には實に左の大讓步を明言せる者ありき、『麼兒門教徒の諸階級中には勤儉友愛誠實滿足等の美德頗る豐かなるは今や掩ふべからず、…………我が特に異議を唱ふるは私利の爲め又は無識の爲に世人が此等の新宗教家を虐遇刻待するに在り、斯の如きは基督教の精神に戻るも亦大なりと謂はざるべからず』云々、嗚呼若し果して果の如何に依て樹の善惡を識り得べくんば、何と吾人は茲に言ふべきや、

但し以上縷々絮說し來れる所も畢竟今は實際問題に非ず、如何となれば、今より十數年前管長ウッドラッフは、聯邦法律との衝突を避ん爲に既に一夫多妻制を廢棄したれば

也、今何ぞ遽かに之を日本に宣傳することを爲さんや、彼等は臆病と譏られ乍らも猶之を茲に唱へざらんと決心せり、亦是れ到る處の政權と國法とに遵へてふスミスの精神を體せる者とす、然れば一夫多妻の點につきて喋々彼等を攻撃するは、恰も的なきに矢を發つが如し、焉んぞ正鵠を得んや、嗚呼焉んぞ正鵠を得んや、

第九章

麼兒門社會の組織―共立主義

天下の最難問題は社會の組織に關する者より大且重なるは無し、財產共有主義、財產平分主義、虛無主義、國家社會主義等、社會問題日に月に熾んなるは、开が最大至難の問題たる所以なりとす、此間に立て社會學者の未だ考へ及ばざる神人融合主義を以て此問題に一種の解釋を與へしは無學不文なる―而も靈智直覺なる―ジヨセフ、スミス―にぞありける、麼兒門教徒の主義に曰く、勞働は神聖な

り、人皆勞働せざる可らず、懶惰なる者は天罰を蒙むる、曰く、自己と家族との扶持の爲に行ふ勞働は其性質の神聖なる恰も公禮拜式の如く又祈禱其物の如し、曰く土地は神有なり、悉く天帝に屬す、我等聖徒は之が管理者として、各々其有利有益に使用し得るだけを享有すべき而已、土地の專有者は天帝の爲に其土地を管理する支配人なれば、其聖徒の爲に食物を產せしむべく之を開拓し耕作するは即ち是れ天帝に忠なる所以なりと、是より先き、一千八百三十一年七八月の交スミスはザイオン(シオン Zion)の地をミソリ州に卜するや、信徒爭つて土地の購買に從

事し、規模廣大なる新耶路撒冷(New Jerusalem)の敷地は出來あがりぬ、(教義及契約第五十七篇を見よ)此際の土地分配は眞に貧富平等の社會的組織にてありき、

(註)ザイオンは希百來語にてはツイオン(Tsion)と讀み新約書中にてはシオン(Sion)とも書ける者なるが、元は城砦の義にて猶太國の首府エルサレムの一部分なりき、後ち默示錄中にて救贖者(the Redeemed)の聖城をザイオンと呼びたれば、是よりしてザイオンは新耶路撒冷と稱し、基督敎徒の理想郷とは成りぬ、今スミスはミソリ州ジヤクソン郡なるインデペンデンス府の近傍に此理想郷を建築せんと欲したれば、其地を公然ザイオンとは名けたる者とす、

卅十年來イリノイ州シカゴ市にジョン、アレキサンドル、ダウヰ(Jhon

Alex. Dowie)とて神癒主義を旗號となせる非凡の意志家精神家あり、之に歸依せる者萬を以て算ふべく、自ら管長を以て任ず、揚言して曰く、眞箇に悔改して基督の徒たる者は信仰に由て萬病を治癒せらるべし、如何なる難疾といふとも信力の醫(いや)す所とならざるは無しと、神癒報」"Leaves of Healing" といふ週刊雜誌を發行して頻に其主義を天下に皷吹しつゝあり、此人深く摩兒門教の制度を視察して、大いに則(のり)を之に取れるあり、先づ其新たに建築しつゝある大市をザイオンと名け、又摩兒門教徒が其禮拜殿を猶太の古式に則りて幕殿(タバ子クル)と稱するに倣ひて自家の教會堂をザイオン、タバ子クルと呼び、ザイオン、バンク(銀行)は其集め得たる幾百千萬の金銀を運轉し、基督教徒の大倶樂部とも曰ふべき禁酒館兼神療院は七層の大厦高樓としてミシガン街に屹然雲を凌げり、是亦スミスの形骸を模倣して成功したる尤

も著しき者とす、嗚呼スミス、ヤングが鴻圖雄畧は反射に由て愈よ其光輝を増す者と謂つべし、

今少しく之を詳說せんに、即ち先づ各信徒は其資力に應じて土地を購求し、其斯く各自に買ひ得たる土地を悉くザイオンの監督（當時バートリチ氏）に聖獻す、而て其斯く聖獻せられたる土地よりして各家の生活に必要なるだけの地を家族及身分に應じて分配し以て之を管理支配せしむ、而て其餘れる土地をば之を購買力なき貧者に施與し、而て其尙剩れる者を以て開墾奬勵費公土木費等に供用す、斯の如く土地神有にして各人其還與されたる土地田圃に

は單に支配人たり管理人たりと雖も、又其支配地管理地に於ては徹頭徹尾自主獨立にして毫も他に制肘せらるゝ無し、只其所得の十分の一(什一稅)を管長に納めて敎會の諸經費及び弘敎費に充る而已、其後該敎徒ユタの大鹽湖畔に移るに及びても、此精神を體して萬事を行ひ、決して土地の厚薄を爭はず、先づ共同して耕種に從事し、各家の必需、勞役及び出種に準じて之が收穫を平等に分配せり、而して鹽湖市を地取するに當りてや、之を平等なる千二百坪許の宅地に區劃して配與し、被配與者は只少額の測量費及び登錄費を拂ふを要せし而已、市の南方には六方

哩の「大田野」(the Big Field)なる者あり、六千坪宛の農園に區分し、實地耕種を望む者には一筆より八筆までを分與し、中央には拾四萬坪の「貧民農園」(Poor Farm)なる者ありて、貧民救助の資に監督等之を監理す、其狀井田の法に彷彿たり、又市外の廣漠たる草野は共同の牧塲私有を許さず、一に公共の利に供す、農事の方面に於て既に然り、商事の方面に於ても焉んぞ然らざらんや、一千八百六十八年には又「ザイオン、協同商館」Z. C. M. I. と名くる規模濶大なる一種の共同勸工場樣なる設立物を開き、管長十二使徒より全信徒に至まで悉く之に出廛することを得るの

制と爲せり、既に上に言ひたる如く、勞働を以て神聖なる者と爲すが故に、管長を始として皆勞働に從事し、只日曜日に於て講壇の上に福音の道を宣說する耳、諸他の傳道師宣教師皆然り、ブリガム、ヤングの如きも週日（日曜以外の日）に於は山谷に丁々と木を伐り、河邊に孜々と水車を運轉せり、實に麼兒門教徒間には俸給を受て宣教師たる者一人も有ること无し、皆自給とす、惟或は教友若くは教會に於て其留主宅に殘れる家族を扶助することは時に之れ無きにもあらじ（然るに日本人中此習慣を知らずして彼等の雇傳道者とならんと求る者多きは氣の毒千萬なり）、是豈良制美俗ならずとせんや、亦是れ初代に於る基

督教會の遺風なりけらし、

要するに、斯の基督教的社會主義は是れ平等主義(削平主義)に非ず、共産主義に非ず、我は之を名けて共立主義と曰んと欲す、此の共立主義は即ち前にも言ひし如く神治的民主政體(Theo-Democracy)と呼稱せられたる者にして、實に神人の二原素は此中に搏て一丸となされあるを見る也、スミスが此神人合一的共立社會主義を始めて實施したりし時には、シユチエ、デリチやラサレの學理的社會主義も未だ行なはれざりき、況んやマルクスの社會主義をや、然るにスミスはラサレ、マルクスに勝る數等なる共立主義を

直覺的に發明せり、啻に發明せし而已ならず又能く之を實行せり、マンチェスタ派の缺典は單に需要供給の二事を以て經濟上の問題を悉く解き去んと試しに在り、需要供給は固より經濟の二大要素なり、然ども之を調和するに道義を以てせずんば、恐くは禽獸の經濟學となり了らん、然り、少なくとも是れ社會的民主主義の母たらん耳、スミスは信徒をして「互に兄弟姉妹」と相呼ばしむ、上下推なべて皆然り（天主教にては只僧侶のみ互に兄弟姉妹と呼ぶなり）、管長ヤングの如きすらも、世人之を擅制君主視したるにも拘らず、信徒間に於ては尚「兄弟ヤング」"brother Young" と呼ばれたりき、是

の如く彼等の心悉く一致するが故に邦家の安寧福利を計るに於て彼等の手も亦相一致協同す、されば彼等の生活は恰もフヱニクス(鳳凰の類)の如く其死したる灰の中より倍舊の活力を以て再生し來る也、夫の無神無宗教的なる社會主義の到底夢想し得る所に非ず、全く是れ社會學者の觀念を遙かに超越したる妙案にてありき、

但し彼等は教會維持費貧民救助費弘教費改良費土木費教育費等に要する金銀を何處より獲るや、曰く是れ即ち彼の有名なる什一税法(tithes)に頼る者とす、各信徒は其所得又は利益の十分の一を必ず教會に納む、即ち十圓の

收入ある者は一圓を、千圓の收入ある者は百圓を納附す、是れ彼等の中に在りては實に崛强なる財源なり、皆甘んじて之を爲せば也、

(註) 什一稅法はアサル(asar)又はマアサル(maasur)と曰ひて、猶太國にモーセの律法に循ひて起りし者なるが、該國にても後には衆多の怠納者を生じたること馬拉基書中に詳かなるが如し、歐洲の基督敎國にても昔は此法廣く行はれしかども、今日は有名無實なる者となりぬ、所謂什一稅盜tithe-steelers今や天下に滿つ、此際之を眞面目に甘んじて實行しつゝあるは麼兒門敎徒のみ、彼等が信仰の如何に堅固なるかは此一事にても知らるべし、想ふに我が國人が麼兒門敎を容るゝに最も困難とするは蓋し此什一稅法なるべし、

第十章

成功及び繁榮

宗教上並に實業上

世人には、殊に反對者には罪惡の團塊(かたまり)の如く言ひ罵られたれども、其信徒間には聖人至人と仰がれたりしジョセフ、スミスは、貧窮の家に生れながらも、一たび天師として天下に呼號するや、西より東より南より北より翕然として信徒蟻附したれば、忽にして富强なる一教會を造り出し、ミソリのザイオン市といひ、イリノイ市のナウヴーと

いひ瞬く間に大都會と成りぬ、是を以てジョセフ死したる時には已に、僅々十餘年間の布敎の結果として、天下諸國に十五萬の信徒を有したりき、此懷疑の世にありては是れ驚くべき迅速の成功にあらずや、論者或は曰ん是れ愚夫愚婦の迷信のみと、豈知らずや其中には當時天下第一の經國家政治家と稱せられしブリガム、ヤングありしを、學識・超凡と認められしオルソン、プラットありしを、是豈パウルが初代の基督敎に於る、アウガスチン、ジエロム、テルタリアン、クリソストム、ジヤスチンが使徒次代の耶穌敎に於るに等しからずとせんや、之をしも愚夫愚婦と言

は丶天下何人か愚夫愚婦ならざらんや、一千八百三十年摩兒門教の翻譯成れる年を以て、早くも銅色土人に傳道を開始し、次で英國へ宣教師を派遣せしが、其後ユタ州へ移りてよりは、米國諸州は申すに及ばず、獨逸佛蘭士等歐洲の重なる邦國へ悉く傳教師を派遣したれば、今や本信徒及び准信徒を合して其の數一百萬に垂んとす、而して什一稅の聖庫に入る者之に準じて夥しく、殆ど算數も及ばざらんとす、若し此勢を以て進まば、天下何物か能く之に抗せんや!!

(註) 今や內國には五十箇所の傳教區(Stakes of Zion)あり、外國には(日

本のを含みて十七箇所の傳道部あり一千七百名の宣教師傳道者無給にて働きをれり、聞說近頃ダンマ、パラ氏麼兒門教會の長老某氏に語て曰く、子が宗教の東洋に傳はる何ぞ遲きやと、某氏答て曰く我道は七十年にして早くも東洋に傳はらんとす、之を佛教の三千年にして、始て西洋に傳はらんとするに較ぶれば、其遲速果して何如ぞや、更に其何に由て此相違を來せるかを考索するも亦興味ある事なるべしと、ダンマ、パラ氏默して苦笑せしとぞ、

宗教上の此成功には實業上の繁榮伴なへり、麼兒門教徒が始てユタに逃れたるや、牡牛二千十二頭、牝牛九百八十三頭、馬百卅一頭、騾百十六頭、綿羊六百五十四、放牛三百卅四、豚三百卅七、雛雞九百四羽、犬百卅四、猫五十四、山羊三、鵝五羽、鴿十一、李鼠一、蜜房五を有せしのみなるが、今や其數

幾千萬倍なるを知らず、其富の增殖の比例殆ど天下に冠たらんとす、夫の管長使徒等を役員とせる在鹽湖市『ザイオン協同商館』(前章を見よ)の如きは一箇年の賣上高大凡一千五百萬圓に達す、モルガン郡中に於る仝上の商館(一千八百六十九年ブリガム、ヤングの創設に係る)すらも毎歳七八百萬圓の取引を爲すと云ふ、其他金銀掘採の盛なるはメルカル(Mercur)に、砂糖製造の夥しきはリーハイ(挿圖を看よ)に、各々其一斑を見つべし(リーハイ甜菜糖製造所は米國最大の工場にして大凡一年に壹千萬斤の砂糖を製出す、グラント氏其株主たり)、之を要するに、麼兒門敎徒の畫策は遠大なり、彼等は能く百年の長計をなし千歳の鴻圖を立つ、故に其初逐はれて

第廿一圖



リーハイ甜菜製糖所



鹽湖市の全景（右）

鹽湖市の全景(左)



ユタ山中に入るや、他日一大國民とならんとを期して、鹽湖市の地取を爲しぬ、即はち市街(車道)の幅一百三十二尺餘にして、之に加ふるに左右に於る二十尺餘の歩道(人道)を以てす、而して街衢は各々一萬二千坪の方形に區劃せられ、七百哩の電氣鐵道は市街を縱横す、又其壯觀及び美觀に於ては、第一には間口二百五十尺、奥行一百五十尺、高さ五十尺なる無釘無柱なる圓屋根の大幕殿タバネクルありて、禮拜場及び集會場に充つ、天下の最大奇觀と稱す(挿圖を見よ)、又猶太國なるヱルサレムの神殿と均しく四十年(一千八百五十二年 一千八百九十三年)をかけて建築せる大麼兒門殿堂

(奥行一百八十八尺)(間口九十九尺餘)屹然として信徒の爲めに聖殿となり(挿圖を見よ)、次には『石片會館』とて夫の大教會堂・即ち大麼兒門殿堂の剩せる石片を以て建造せる者(奥行一百二十尺)(間口六十八尺高)(塔の高さ地より一百三十尺)ありて視線をひく也(挿圖參看)、其他『大鹽宮』は大鹽湖水を凝結して蓋へる水晶宮にして、晝は日光、夜は電燈の光輝之に映じて燦爛たり、快樂の場に至りては大鹽湖岸の鹽水浴場、嗚呼亦宏壯美麗なる哉、其中なる舞蹈室は有ゆる便利を具へて大凡そ一千人の男女を容るべし、斯の如く人工百事壯大なるに搗て加て、天然の光景巍然として偉大の觀を極む、先づ夫の路機山脈が山嶽の王

大塩宮



塩湖市（ソールト、レーキ、シチ）の一大奇観

として高く雲表に出るは姑く之を措くも、鹽湖市の東にはリサチの峯巒重疊起伏して天險畏るべく、西北には大鹽湖水渺茫として涯際なく、觀者をして自然に心胸を濶うせしむ、而して又鹽湖市たるや海面を拔くこと四千尺なるが故に、其氣候は燥乾清涼均平を以て特色とし、單に呼吸するも一大快樂にして、眞に『理想の氣候』ideal climateと稱す、百穀善く實り、鑛物亦富り、岩鹽は以て一般の需を滿たすに足るを、更に、又大鹽湖の水は二割の塩を含めば、手桶に五ハイの水を天日に曝すや化して一パイの良塩となるが故に、年々十萬噸の塩は四十萬圓の價を博し來

る、嗚呼天が ユダ に、麼兒門教徒に福ひするや厚しと謂ふべし、嗚呼彼等は天の寵兒なる哉、兇人の手は彼等を驅て此樂園に逃込しめたる也、

但し麼兒門教徒は斯の如く一見天の鍾愛を私する者の如くなれども、其が天下の大疑問たるは依然として舊の如し、固より一箇人としては、人間としては、否な男兒としてすらも、彼等が眞摯なることは、彼等が正人君子なることは、彼等が義俠忠信なることは、誰も疑ふ者无けん、然れども彼等が然か熱心に奉ずる所の宗教果して其信ずる如く天啓に係る者なるかは、尙ほ今後に及びて十分に證

明するを要す、余輩は未だ遽かに之が眞僞を斷定すべからざる也、以上は只形迹につきて或る程度までに判斷を下したる者のみ、尚精細の研究を今後に積んと欲す、

明治卅五年八月　五　日印刷
明治卅五年八月二十日發行

［定價金七拾五錢］

著述兼發行者　東京市芝區三島町十二番地　高橋五郎

印刷者　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　佐久間衡治

印刷所　東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地　秀英舍第一工場

大賣捌所
東京市銀座三丁目二番地　十字屋
仝　神田區雉子町二番地　岡崎屋
仝　日本橋區鐵砲町十二番地　一二三館
仝　本郷區森川町　文明屋

其他東京大阪等各有名書肆